

第4章

有田遺跡第77次調査



調査風景 (東から)



第77次調査区全景（東から）



第77次調査区全景（西から）

第4章 第77次調査（調査番号8305）

1. 地形と概要

（1）立地

当該地は福岡市早良区有田1丁目30-1-3に所在し、発掘調査面積は1,702m²である。

有田地区の台地中央の平坦地のほぼ中央にあって、標高12~14mを測る平坦地に位置する。この地域は、北東側と北西側から谷を切り込むため幅120mの狭長なくびれ部を形成している。当該調査地点においては、近年、大型掘立柱建物が数多く検出されており、当該地の西側約1~2kmの橋本地域は古代額田駅家の推定地が存在することや、更に文献上においては8世紀中頃には早良郡司として人領三宅連、少領早良勝等の郡司層が記されていることから、有田・小田部において古代早良郡の官衙遺構が存在することが充分に推定できる。

戦国時代、有田・小田部は交通の要衝に位置しており、「筑前国続風土記」「筑前国続風土記拾遺」などには伝承として「小田辺城」・「堀ノ内城」の存在が伝えられている。

当該地の周辺では、第1・2・19・29・32・47・55・56・78・89次調査を実施し、この地域における縄文時代以降の跡構成の全容を把握しつつある。当該地は昭和42~43年の区画整理に伴い、九州大学考古学研究室によって、第1・2次調査が実施されている。この調査は跡構の内容確認調査にと



Fig.47 第77次調査地点位置図（縮尺1/600）

どったため、トレンチの調査方法をとっている。縄文時代から奈良時代までの遺構・遺物を検出したが、当該地が相当する「27街区」の調査では古墳時代前期の住居跡3棟、溝状遺構、掘立柱建物跡の柱穴等を検出している。

(2) 概要

今回の調査では第1・2次発掘調査の資料を参考に、古墳時代の集落の把握、掘立柱建物の規模の確認、第19次調査で検出した16世紀の溝の延長部分の確認、縄文時代夜白期の溝の確認等を目的に調査を行った。

表土は耕作上で、深さ約30cmを測る。調査区の東側には耕作土の下に黄褐色の客土が施されており、深さ50~60cmを測る。遺構は褐色ローム層の上面に検出できる。

遺構は縄文時代晚期の溝1条、住居跡1軒、弥生時代の住居跡1軒、古墳時代前期住居跡8軒、古墳時代の井戸跡1、古墳時代前期土壙2、奈良時代~平安時代の掘立柱建物4棟、方形周溝1条、溝3条、柵3条、中世の土塙墓5基、溝7条(内3条は塗)を検出した。

縄文時代晩期の溝は調査区の東南隅より西北方向に延びている。断面はV字形を呈しており、中層より菱形土器を検出した。この溝は東南側の第18次調査、北西側の第56次調査に接続しており、第56次調査では、溝はカーブして東西方向に延びている。古墳時代の住居跡はSC02を除き、ベッドを有しており、4世紀中頃~5世紀初め頃が考えられる。住居跡SC01を除いては、いずれも境界地あるいは他の遺構に切られるため全体の形は明確ではない。住居跡SC01は九州大学の調査によって検出されたいた「27街区1号竪穴住居跡」が相当するが、今回の調査の結果、西袖にベッドを有した長方形プランの住居跡が2軒重複していることが判明した。掘立柱建物は南北方向に2棟、東西方向に2棟存在する。1号掘立柱建物は九州大学によって3ヶ所の柱穴が検出されていた。これらの建物と重複して、幅1~1.5mを測る溝が矩形に巡らされており、これらの建物群との関連が注目される。

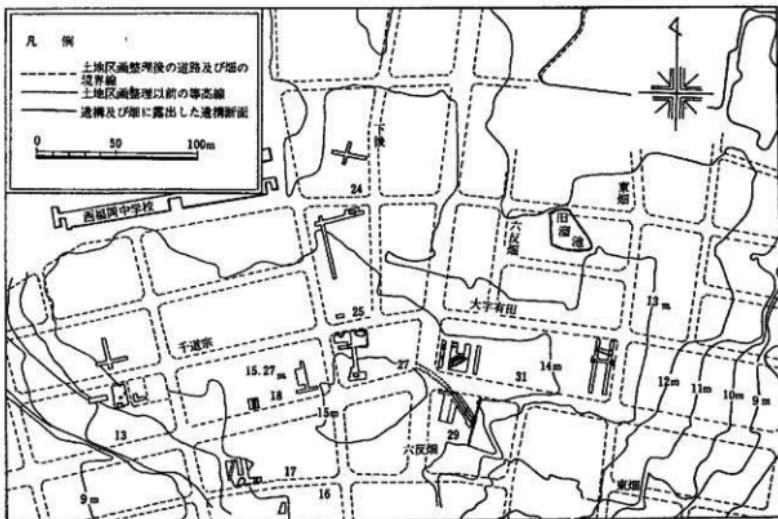


Fig. 48 有田追跡概要図 (昭和41~43年) (縮尺1/300)

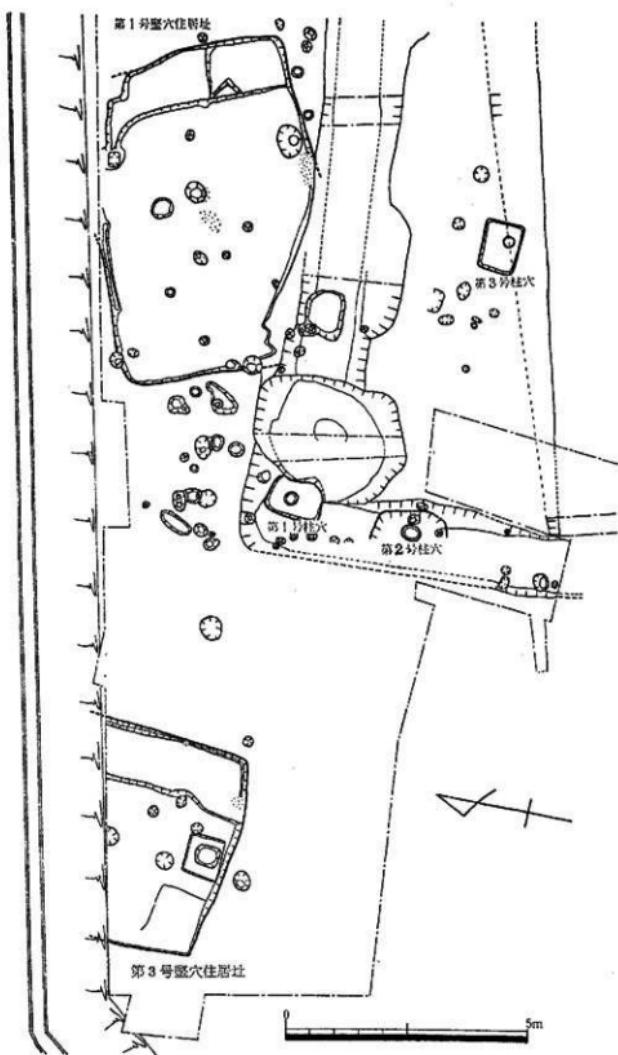


Fig. 49 九州大学調査27街区発掘区域実測図（縮尺1/100）※第2次調査報告書より転載

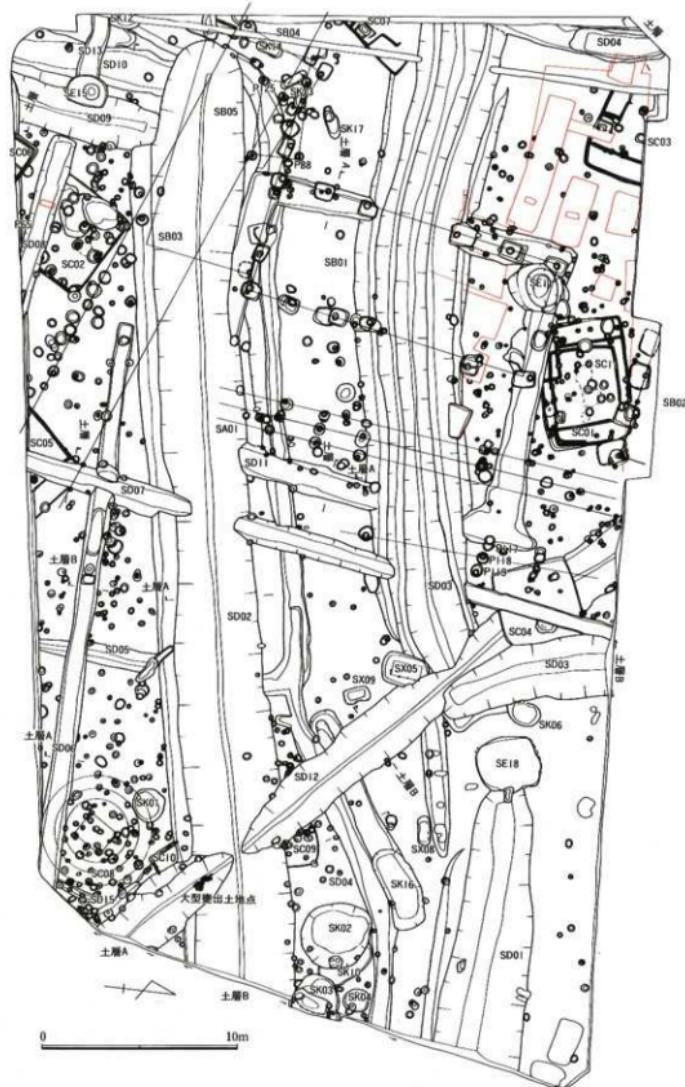


Fig. 50 第77次調査遺構配置図 (縮尺1/250)



第77次調査区全景（南から）



第77次西側調査区（西から）

中世の溝の内、3条の溝はいずれも幅4~6m、深さ2~3mを測るもので、他の調査地点の遺物等から16世紀前半代が考えられる。これらの溝は、直線的もしくは、矩形を呈しており、中世城郭の曲輪に関連するものであろう。

2. 遺構・遺物説明

(1) 住居跡 (SC)

調査区の縦横に走る溝や濠のため、住居跡は剖面を受けて遺存状態は悪いが、縄文時代から古墳時代までの住居跡を9軒検出した。住居跡SC03・05~07は境界地にあるため全体形は不明である。又、SC02・04・09・10も溝に切られ、規模が不明であった。

SC01・11 (Fig.53) 調査区北側の境界地に位置し、溝SD01、掘立柱建物SB02に切られる。上面の削平は著しく、壁の遺存状態は悪い。九州大学の第1次調査で検出された「27街区1号竪穴住居址」が相当する。この調査では、平面形が隅丸長方形で、東側壁に沿ってL字形のベッドを有する住居跡として報告されている。調査内容は「…前略…竪穴住居址は推定復元によれば長辺6.75m短辺3.75mの長方形プランを示し、床面は平坦である。壁体の現存高は20~25cmで…中略…壁は60°の傾斜を持つ。北辺の壁沿いに幅10cm、深さ10cm程の側溝が走っているが、北辺の一部で終っている。…中略…東辺沿いに幅1mのベッド状の造構が設けられているが北方では西に向かってカーブし、南方では一段低くなっている。このベッド状造構の土質は地山と黒色土が混じ合ったもので、当初から掘り残されたものではなく、竪穴住居址完成後に付設されたものである。かは竪穴住居址のほぼ中央にあるが、火熱のため赤変して焼きしまった粘土塊が竪穴住居址南辺のほぼ中央に認められた。ほかにかのすぐ北側に…中略…工作台かとみられる砂岩の扁平な自然石が掘えられていた。…中略…この家屋は火災に会っ

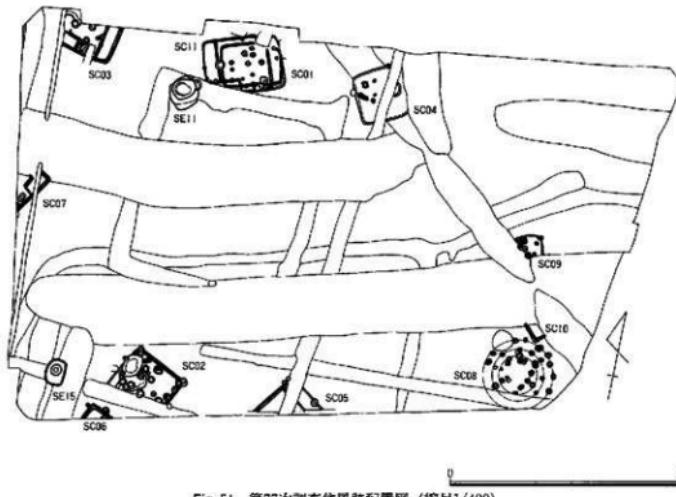


Fig.51 第77次調査住居跡配置図 (縮尺1/400)

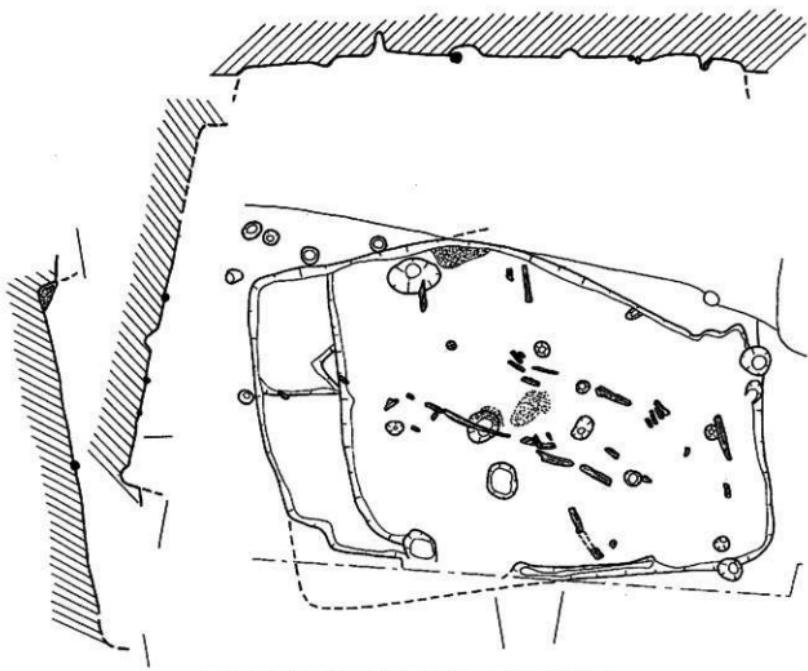


Fig. 52 27街区第1号聚穴住居址〔軒載、一部改編〕(縮尺1/60)

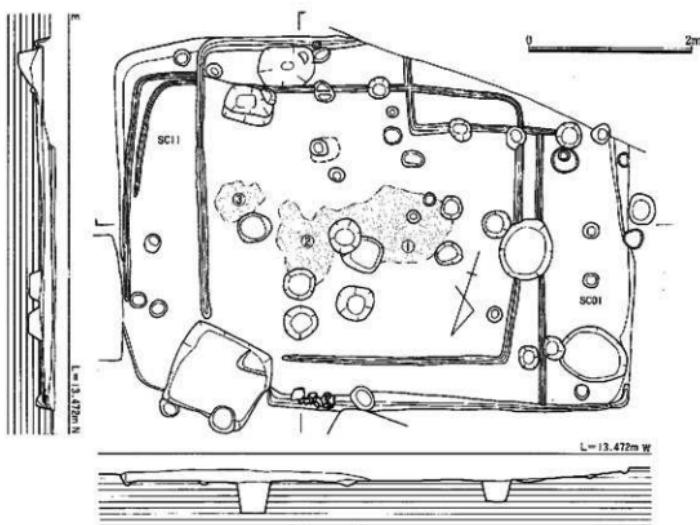


Fig. 53 住居跡SC01・11実測図(縮尺1/60)

住居跡SC01・11（西から）



住居跡SC01・11（西から）



住居跡SC01・11（北から）



たらしく、炭化材が多量に遺存しており、しかも床面は焼けて固く焼きしめられている。この炭化材は一つは東南隅と西北隅を結ぶ対角線状に残っており他の大部分は各辺に対してほぼ直角に倒れたようになっている。」

今回の調査の結果では、2軒の住居跡が切り合っており、建替があったことが判明した。「27街区1号竪穴住居址」をSC01と称し、他の1軒の住居跡についてはSC11と称する。2軒の住居跡の床面は同一で、数ヶ所の焼土面がみられた。又、床面には壁下もしくはベッドドを巡る周溝が存在する。この周溝幅は7~10cm、深さ5cmである。九州大学の調査において周溝の一部が掘りあげられており、先後関係は不明である。周溝の配置状況から判断すると、SC01は、平面形が隅丸長方形を呈し、西側の短い壁にL字形、東側の短い壁側に長方形のベッドを設けた住居跡で、北側・南側の壁下にも周溝を有している。炉跡は位置関係から焼土①が相当するであろう。規模は長さ6.42m、幅4.67mの住居跡である。

SC11は遺存した周溝から平面形が隅丸長方形の住居跡を推測できる。周溝は壁下もしくはベッド内側を巡るものと考えられるので、ベッドが4面に付設されていたと考えられる。ベッドの幅を1mにすれば、規模は長さ約7m、幅約5.5mの住居跡であろう。炉跡は焼土②・③が相当する。いずれもベッドは貼付である。これらの住居跡からは土器器表が出土している。

SC02 (Fig. 55) 調査区南西側の境界地に位置する。溝SD08に切られるため全体形は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。この住居跡は九州大学の第1次調査の「27街区2号竪穴住居址」と同一である。調査内容は「…前略…竪穴住居平面は、竪穴住居の南端が溝の南壁以南には及ばないことから推定して、1辺5mの方形を示すものと考えられる。壁体の現存高は10cm前後のものであるが西北隅は急に深くなり30cmにも及ぶ。壁は77°の傾斜をもっている。床面はほぼ平坦であるが、西北の一角は東西1.4m、南北2.4m幅で20cmほど深くなり、土器器、須恵器片もこの凹地から多く出土している。北壁及び東壁沿いに幅5cm、深さ10cmの側溝が設けられているが、…中略…炉は中央より北方に片寄っており、直径60cmを出す。…中略…竪穴住居の西外の柱穴状の穴から大豆ほどの大きさの植物の種子が約10粒発見された。」削平が著しく壁の遺存状態は悪い。現状の規模は北壁の長さは4.9m、最大幅は4.12m、壁の高さは15cmである。周溝は北壁・東壁のみ存在し、幅10~15cm、深さ10cmを測る。柱穴は住居跡に並ぶP1・P2或いは、P3・P4が相当するものと考えられる。炉跡は径70cmを測る。住居跡の北壁寄りに存在する。又、床の西寄りには、長さ200~230cmを測る大型の浅い上塗が存在する。P1は炉を切り合いでおり、柱としては疑問がある。又、P5は炉及び壁と接しており、窓の存在を推測することが可能である。

住居跡の覆土は黒色粘質土である。覆土からは上器細片が出土したのみであった。九州大学の調査における遺物は、土器器表、須恵器壊身・蓋が出土している。

SC03 (Fig. 57) 調査区北西側の境界地に位置し、且つ、著しい削平を受けているため全体形は不明である。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。九州大学の第2次調査の「27街区3号竪穴住居址」に相当する。調査内容は「東西4.1m、南北3.2m以上である。壁は垂直に近い傾斜をもち、壁の現存高は15cmである。…中略…東辺から南辺の半分にかけての壁沿いに幅10cm、深さ10cmの側溝が走っているが、住居跡全体を囲繞していない。東辺及び西辺にそれぞれベッド状遺構が設けられている。東辺のものは幅1.1m、床面よりの高さ12cmである。…中略…東西辺のほぼ中央に大きなビットが認められた。…中略…東西0.8~1m、南北0.8mのはば方形のプランをした掘りこみを床面から切り込み、その中央に0.5mの方形のさらに深いビットを掘りこんでいる。このビットには住居址埋設土と同質の黒褐色粘質土と地山の土の混入したものが堆積し、底部3cmは暗褐色粘質土が張られていた。…中略

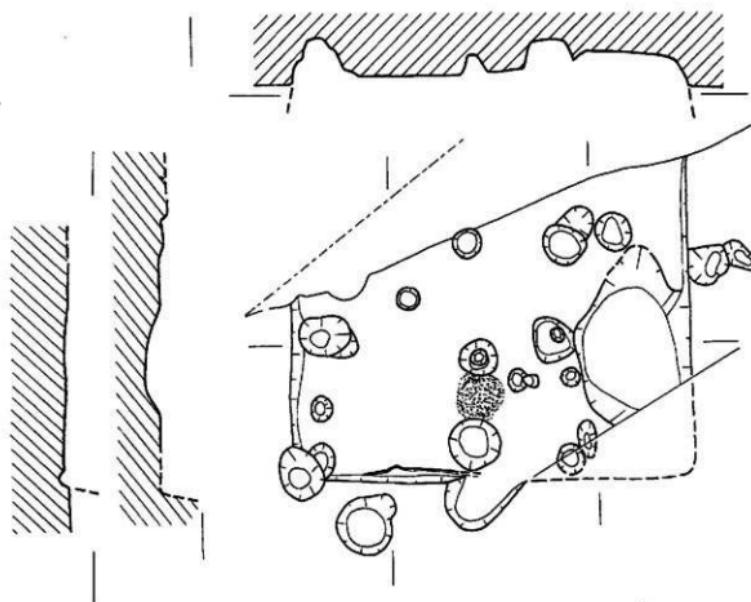


Fig. 54 27街区第2号聚穴住居址〔転載、一部改編〕(縮尺1/60)

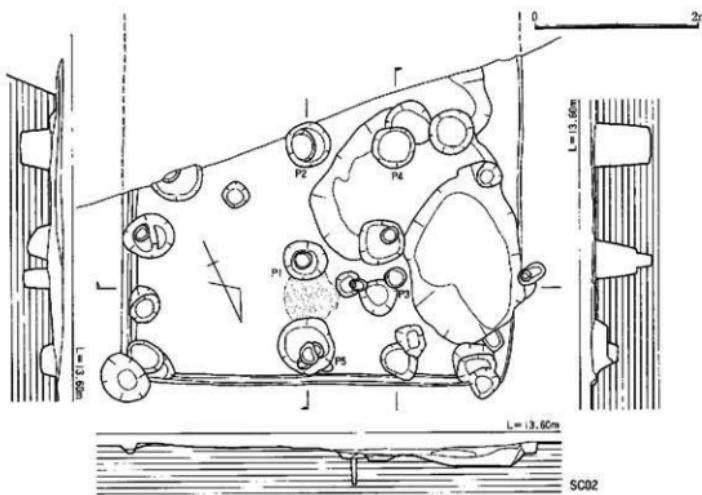
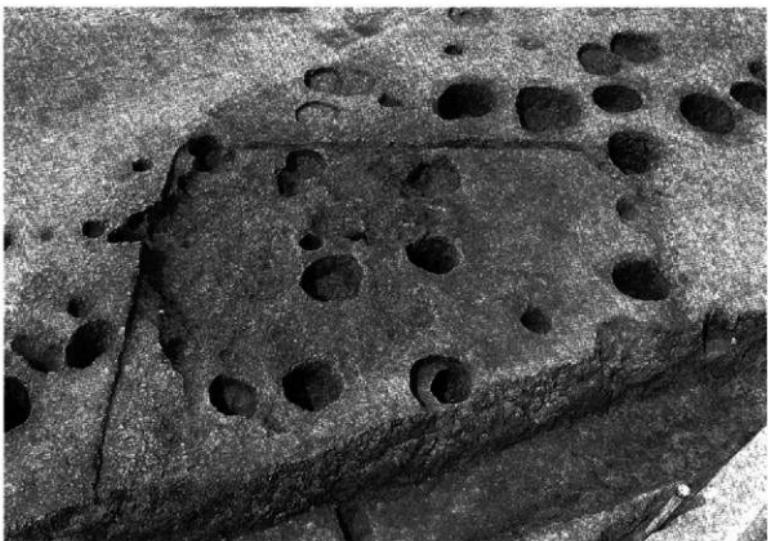


Fig. 55 住居跡SC02実測図 (縮尺1/60)



住居跡SC02（西から）



住居跡SC02（南から）



住居跡SC03（北から）

…火熱によって赤変して焼きしまった粘土ブロックは4ヶ所から発見された。…中略…これに接する円形ピットは炉址と考えられる。」

現状では南壁の長さは4.25m、東壁の幅は3.4m、壁の高さは15cmである。住居跡の東側壁に沿って長方形のベッドが、西側に沿ってL字形のベッドが存在する。西側のベッドはコの字形の可能性もある。ベッドの高さは西側が10cm、東側が16cmである。柱穴は両側のベッドに接して中央に各々P1・P2が存在する。主柱が住居跡の主軸方向に存在すると考えれば、住居跡の規模は長さ約5.3m、幅約3.9mを推定できる。柱穴径は37~45cm、柱根径は16cmを測る。南側壁の中央には、平面形が隅丸長方形を呈する土壙が存在し、長さ70cm、幅40cm、深さ12cmを測る。床面に隅丸長方形のPitが掘られる。幅45cm、深さ40cmを測る。出入口の土壙と考えられる。遺物は九州大学の調査時に土師器が出土している。

SC04 (Fig. 58) 調査区北側に位置する。溝SD12の上に掘り込まれており、且つ、溝SD07・16に切られていたため、当初は住居跡の範囲を確認し得なかった。又、SD12と住居跡覆土が同じ黒色土であったため、柱穴の確認ができなかった。削平が著しく壁の遺存状態は悪い。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。現状では最大長は4.24m、南北幅は4.1m、壁の高さは20cmである。住居跡の東寄りにSD07に切られた長さ107cm程度のPitは、内部に焼土があるので炉と考えられる。覆土は黒色粘質土である。覆土からは古墳時代土師器丸底壺・甕・高环・鉢等が出土した。又、当初溝SD12との造構切り合いが不明なまま、SD12上層出土として掘り上げた土師器丸底壺・甕についてもSC04出土の遺物として考えられるため、SC04出土として報告する。

SC05 (Fig. 59) 調査区南側の境界地で、約1/3を検出した。溝SD07に切られており、又、削平が著しく壁の遺存状態は悪い。全体形は不明であるが、北東側壁に沿ってベッドがあるところから平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。ベッドは長方形又はL字形と考えられ、他の例から両袖形

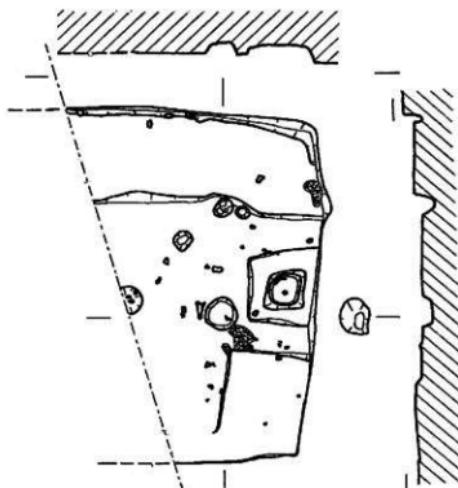


Fig. 56 27街区第3号堅穴住居址〔軒板、一部改編〕(縮尺1/60)

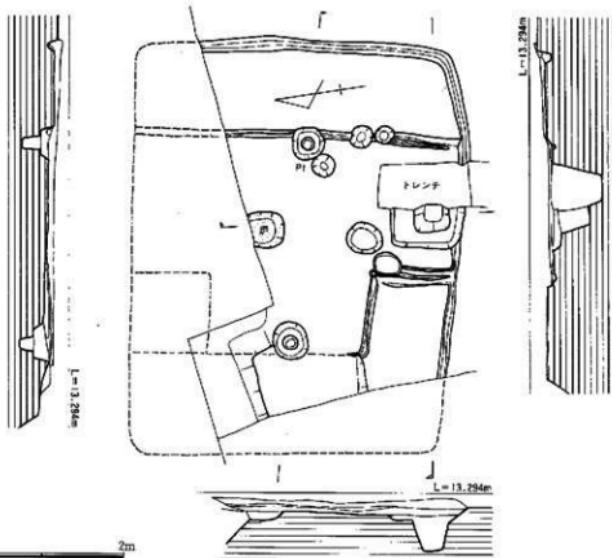


Fig. 57 住居跡SC03実測図 (縮尺1/60)



住居跡SC04（東から）

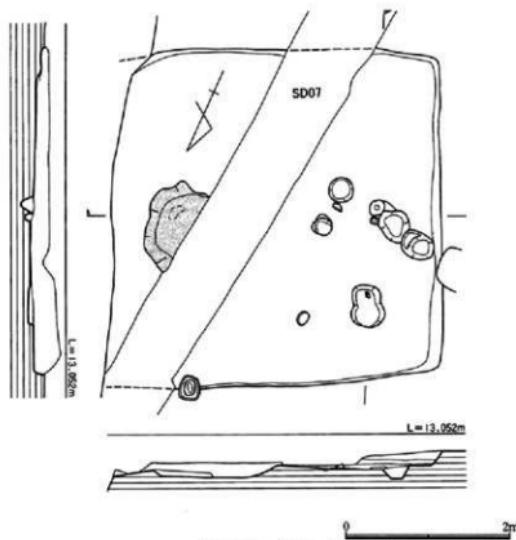
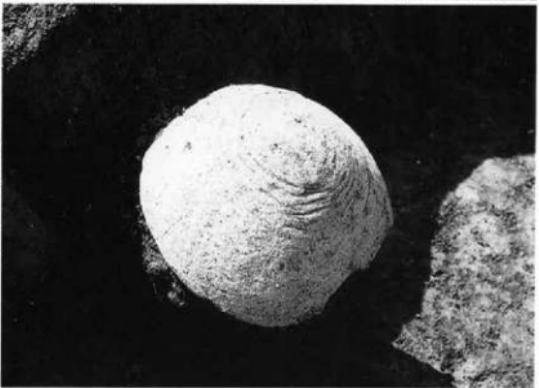


Fig. 58 住居跡SC04実測図（縮尺1/60）

住居跡SC04遺物出土状態（西から）



住居跡SC04遺物出土状態（南から）



住居跡SC04遺物出土状態（東から）



になると考えられる。規模は東壁の現存長2.93m、西壁の現存長3.82m、壁の高さは18cm、ベッドの高さ9cm、幅105cmである。周溝北壁、及び東側ベッド下に設けられ、幅5~10cm、深さ9cmを測る。柱穴は検出できなかった。覆土は黒色粘質土である。覆土からは古墳時代土師器片が出土した。
SC06 (Fig.58) 調査区西南側の境界地に位置し、一部を検出した。削平が著しく壁の遺存状態は悪い。住居跡の西側壁に沿ってベッドを付設しているところから、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。北壁の現存長2.12m、西壁の現存長1.65m、壁の高さは28cm、ベッドの高さ12cmである。壁下には周溝が巡り、幅10cm、深さ8cmを測る。柱穴は検出できなかった。覆土は黒色粘質土である。覆土からは古墳時代の土師器の器台片等が出土した。

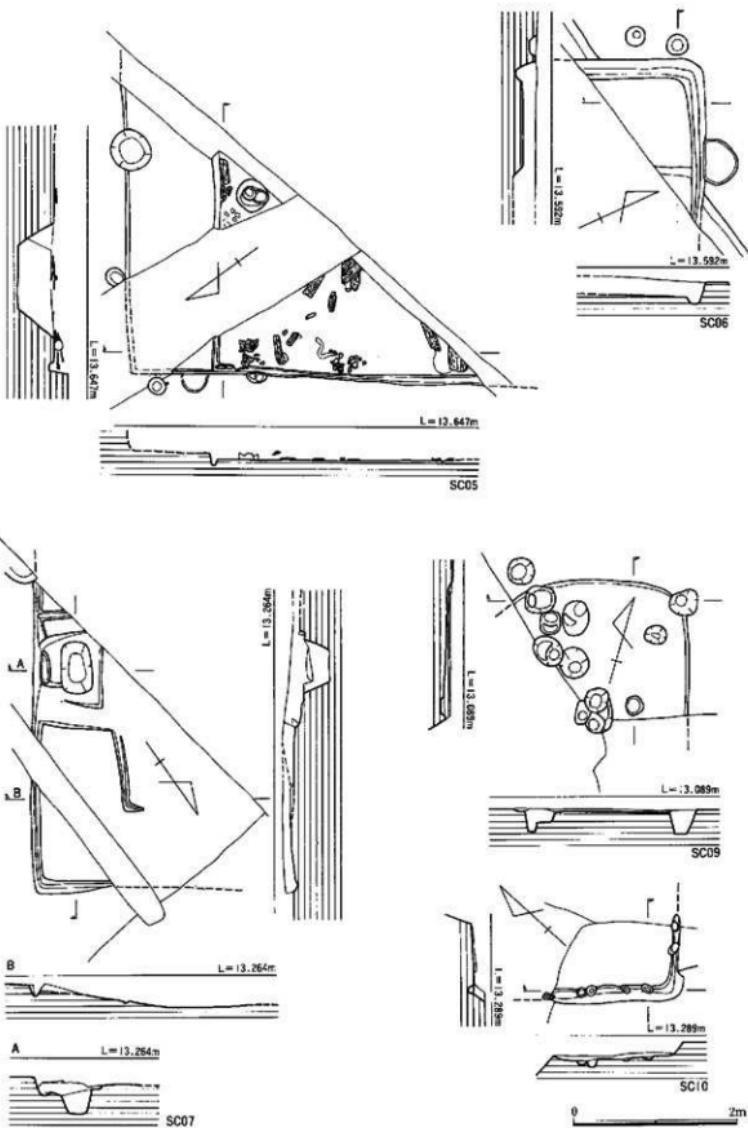


Fig.59 住居跡SC05~07・09・10実測図 (縮尺1/60)



住居跡 S.C. 05 (南から)



住居跡 S.C. 05 滅ぼし土状態 (北から)



住居跡 S.C. 07 (西から)



住居跡 S.C. 07 滅ぼし土 (北面各・さ)

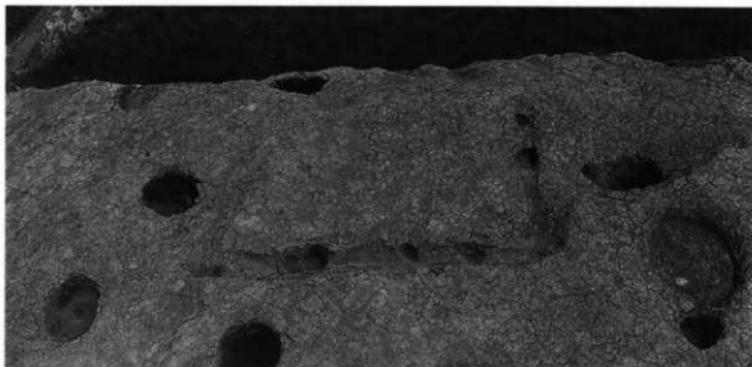
SC07 (Fig.59) 調査区西側の境界地に位置し、溝SD03に北側を切られている。全体形は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。住居跡の両袖にL字形、又はコの字形のベッドを付設する構造である。南北の現存長は13.9m、東西の現存長は1m、壁の高さは15cm、ベッドの幅は105cmである。壁及びベッド下には周溝が巡っており、溝幅8cm、深さ5cmを測る。東壁の中央に接して、出入口の土壠が付設されている。平面形は不整長方形を呈し、底には更に隅丸長方形のPitを設ける。土壠の長さ約96cm、幅75cm、内底のPitの長さ65cm、幅36cm、深さ30cmを測る。柱穴は不明である。覆土は黒色粘質土である。覆土からは弥生土器、古墳時代土師器片、砥石等が出土した。

SC08 (Fig.60) 調査区南東側において、柱穴が集中しており、且つ、サークル状を呈したため、円形住居跡の痕跡と見做した。柱穴の遺存状態は悪い。環状に巡る柱穴群は3重になっており、すなわち、AグループはP1～P8、BグループはP9～P15、CグループはP16～P23、DグループはP24～P33のPit群である。柱穴は隅丸方形、楕円形を呈し、径30～55cmを測る。B～DグループのPit群は、ほぼ同心円的な配置になっているが、Aグループとは配置的にずれている。住居跡とすれば、2軒以上の住居の建て替えと見做すことができる。サークルの直径はBグループが3.1m、Cグループが4.5m、Dグループが5mを測る。出土遺物はない。Aグループは方形の可能性がある。

SC09 (Fig.59) 調査区東側で検出した。溝SD02-12に切られているため全体形は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。削平が著しく壁の遺存状態は悪い。現状では長さ2.15m、最大幅1.75m、壁の高さは4cmである。柱穴は検出できなかった。覆土は黒灰色粘質土である。覆土からは、土器細片の他には時期を特定できる遺物は出土しなかった。

SC10 (Fig.59) 調査区東側に位置し、溝SD02に切られ、溝SD12と切り合う。SD12の覆土とは共通しており、遺構面での先後関係の判断はつかなかった。全体形は不明であるが、平面形は隅丸長方形又は隅丸方形を呈するものと考えられる。削平が著しいため周溝のみ遺存している。最大長は1.75m、最大幅は1.08m、周溝の幅10～15cm、深さ8cmである。周溝内には径約12cmを測るPitが30～40cmの間隔に掘られており、住居壁の土留の杭跡と考えられる。柱穴は検出できなかった。

覆土は漆黒色粘質土で、溝SD12の覆土より暗く、粘性が強いところから、溝に先行するものと考えられる。覆土からは土器細片しか出土していないため時期が特定できない。



住居跡SC10（東から）

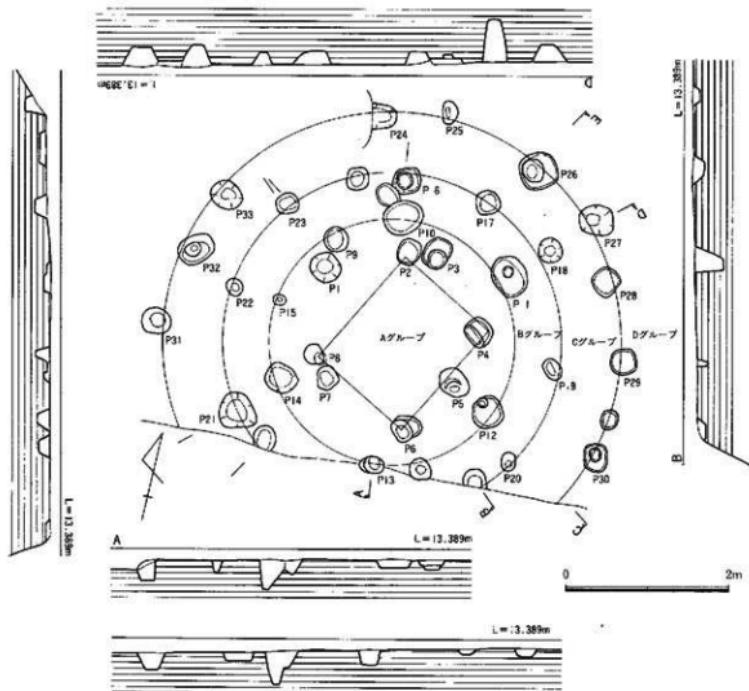


Fig. 60 住居跡SC08実測図 (縮尺1/60)

Tab. II 第77次調査住居跡一覧表

(単位: cm)

番号	平面形	断面形	深さ	ヘッド状地盤	穴地形状	出土地物	時代	備考
01	四角形	642	467	26~25	○ 西側にベッド地盤あり出し、体より18cm、深さ56cm。	○ 中央に幾つかの穴地。	陶文土器、陶生土器、上砂質、無鉄石、木炭。	古墳 建設段
02	方形	490	412	15	×	○ 東側中央に穴地。	陶文土器、灰陶、灰白土器、灰、灰灰土器、灰灰土器、灰灰土器。	古墳 西側に被覆化される。
03	橢円形	425	340	15	○ 東西にL字形ベッド、高さは西側10cm、東側16cm、幅96cm。	○ 中央部北寄りに穴地。	上砂質	古墳 北側に2/3割合スリット。西側は壁設置により被覆化される。
04	椭丸形	434	411	26	×	○ 東部中央に系縫形切削、地土あり。	陶文土器、生土器、高砂質、灰、灰灰土器、無鉄石。	古墳
05	椭丸正方形	238	382	28	○ 先方形または手平ベッド、ベッドの高さ9cm、幅15cm。	○ 北面ベッド地盤に出土あり。	陶文土器、陶生土器、上砂質、無鉄石、灰、無鉄石、木炭。	古墳 北側に2/3割合スリット。床深面に被覆化物がある。
06	椭丸正方形	212	185	28	○ 右側にベッド、高さ12cm、幅20cm。	×	上砂質、灰、灰、苔台	古墳 北側に3/4割合スリット。残りは調査区分。
07	椭丸正方形	392	160	15	○ 両側にL字形またはL字形ベッド。高さより3.6cm、幅100cm。	×	上砂質、中間青磁	古墳 北側に人口のビット。
08	円形	A:複数個B:複数個C:複数個D:複数個			×	○	なし	生土 3回の焼成段。住居跡時は3回。
09	椭丸正方形	215	175	4	×	×	なし	古墳 北側、床深面の一部のみ残存。
10	椭丸正方形	175	108		×	×	なし	上層 12号室に搬入され、本・西壁等のみ残存。
11	椭丸正方形	700	550		○:4面に仕立て	○	なし	古墳 建設段

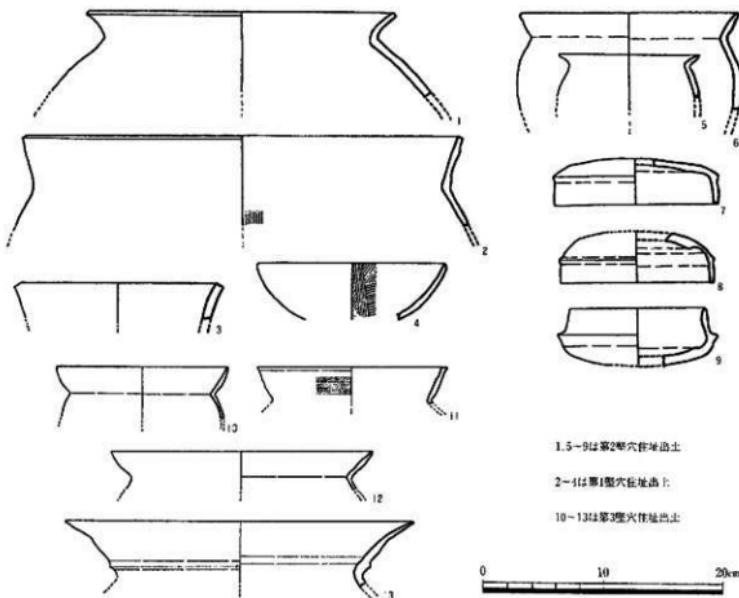


Fig. 61 27街区第1～第3号堅穴住居址出土遺物実測図(転載、一部改編)(縮尺1/4)

(2) 住居跡出土遺物 (Fig. 61・62)

SC01出土遺物 (2～4・15) Fig. 61の2～4は九州大学の調査時に出土した土師器で、2は甕、3は壺、4は鉢である。今回の調査で出土したFig. 62-15は土師器の甕で、体部は丸味をもっており、腹部外側はタテハケ、内面上部はヨコハケ、下位はナナメ方向のハケ調整である。在地系の土器である。

SC02出土遺物 (1・5～9) Fig. 61の土層は九州大学の調査で出土した。1・5・6は土師器の甕、7～9は須恵器である。土師器甕は体部が丸味をもつもので、調整は不明である。7・8は壺蓋で、口唇部の内側を斜めに削り込む特徴をもつ。9は蓋受け部が小さく、立上がりが長い。7・8と同じく口唇部の内側をわずかに削り込んでいる。須恵器はII B期であろう。

SC03出土遺物(10～13) Fig. 61-10～13は九州大学の調査で出土した。10～12は土師器の甕で、10・11は口唇部が内湾し、11の端部は平坦に仕上げる。13は2重口縁部の壺である。

九州大学の第2次調査においての遺物の説明については以下の通りである。「(10)」はやや内湾しながら外反する小形丸底壺である。口縁に最大径をもつが、口脣部は短い。精良な胎土を用いたヘラ磨きがなされている。(11、12)は甕形土器でいづれも「く」の字状に外反する短い口縁をもっている。焼

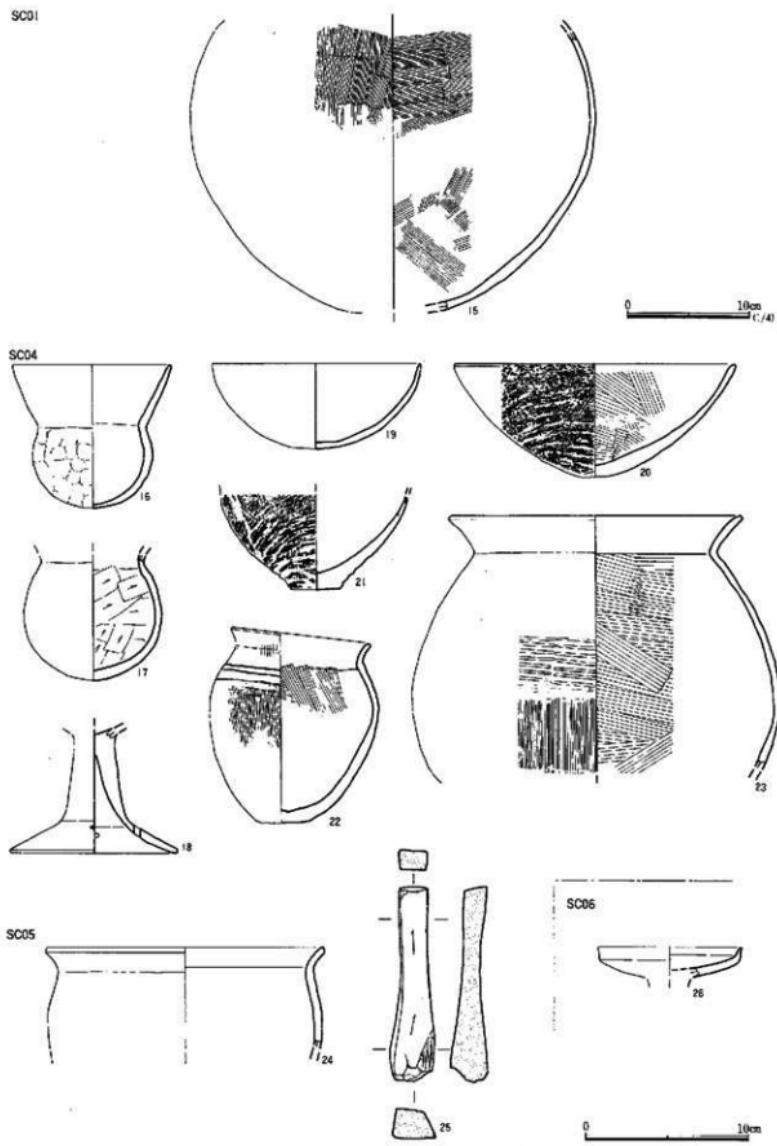


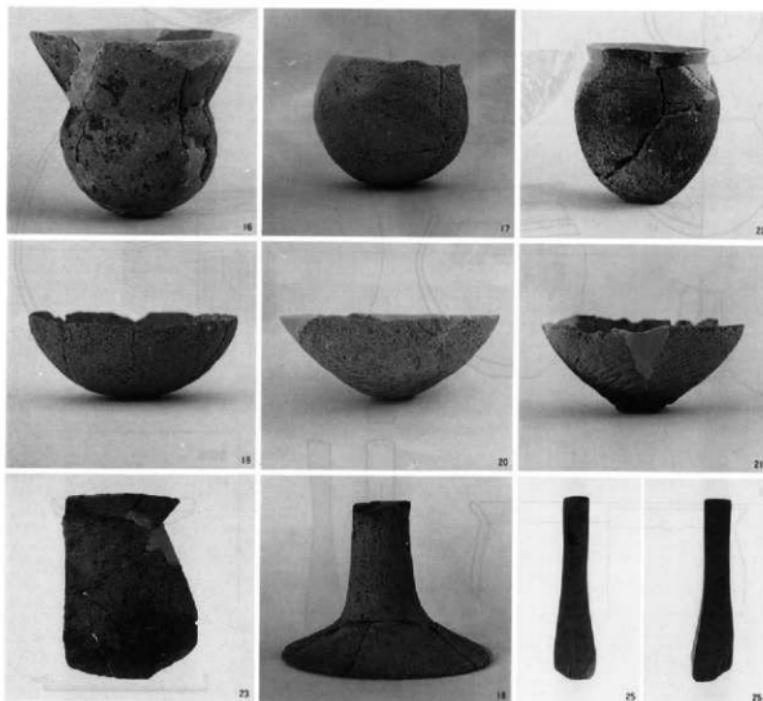
Fig. 62 住居跡SC01・04～06出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）

成悪く表面の剥落がはなはだしいが、(12)には横状に細い刷毛目がみられる。(13)は複合口縁の臺形土器で外面に稜をもつがやや退化している。砂粒を多く含む胎土で、焼成悪く表面の剥離がはなはだしく整形方法は不明である。…後略…

SC04出土遺物 (18~23) 16・17は小型丸底壺で、16の体部は球形で、口縁部は大きく開く。16・17の胴部内面はヘラケズリを施している。21~23は甕である。22の胴部内外面はタテハケ調整で、底部はわずかに平底部を残している。21の外面は粗目の平行叩きで、内面はナデ調整である。底部は小さな平底で、胴部より若干突き出した状態を呈しており、庄内系の土師器である。23は球体に近い胴部で、外面上位は平行叩き、胴部内面はヨコハケ調整である。19・20は鉢である。19は丸底であるが、20は尖底気味で、小さな平底部分を残している。23の外面は粗目の平行叩き、内面はハケ調整である。21の甕と共伴するものであろう。18は高環の脚で、裾部との境に3ヶ所穿孔している。

SC05出土遺物 (24・25) 24は土師器の甕片で、口縁部はくの字形を呈する。25は砥石である。

SC06出土遺物 (26) 26は土師器の器台片で、脚部を欠く。口縁部は細く、直立している。



住居跡SC04・05出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

(3) 井戸 (SE)

古墳時代から戦国時代までの井戸を3基検出した。戦国時代の井戸SE18は、溝SD01の西側に接続しており、溝と関連する機能をもっている。古墳時代の井戸のSE11は九州大学考古学研究室の第2次調査で既に発掘されており、今回は土層作成のために残されたベルトと井戸底の精査を行ったにすぎない。

SE11 (Fig.64) 九州大学考古学研究室の第2次調査において検出されていた遺構で、細かい調査記録は報告されていない。溝SD11、掘立柱建物SB01と切り合っているが、先後関係も不明である。遺構は完掘され、中央にベルトが残されているだけであった。今回の調査は土層作成とベルト撤去を行うだけの作業であった。

素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は不整円形を、断面形は逆梯形状を呈するが、一部が2段～3段掘りになっている。井戸上面での最大径は300cm、最下段の径は247cm、深さは166cmを測る。井戸底部は径110cmの浅い摺鉢状の掘り込みを有している。

井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土を主体としており、上部を南北方向の溝SD11が切り込んでいる。ベルトの撤去により須恵器の蓋等が出土している。

SE15 (Fig.64) 調査区の南西側に位置している。上面は削平を受けており、且、溝SD09に東側を切られ、形状を変形している。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は元来は円形を呈する。断面形は逆梯形であるが、2段目は摺鉢状を呈している。井戸上面での最大径は210cm、深さは84cmを測る。井戸底部には径80cmの浅い摺鉢状の掘り込みを有している。井戸の覆土は黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

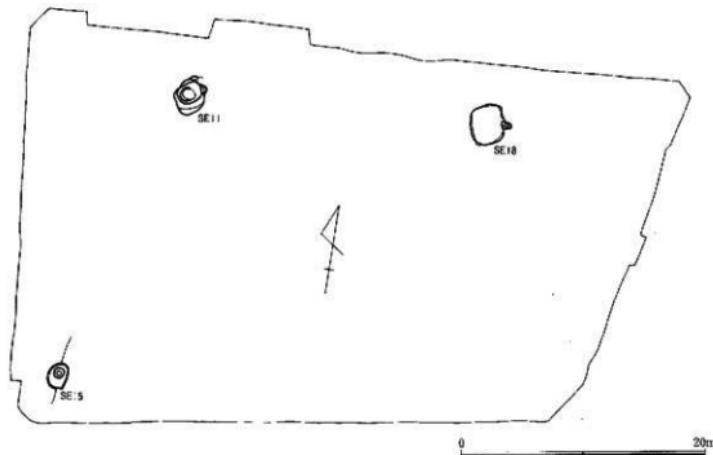


Fig.63 第77次調査井戸配置図 (縮尺1/400)

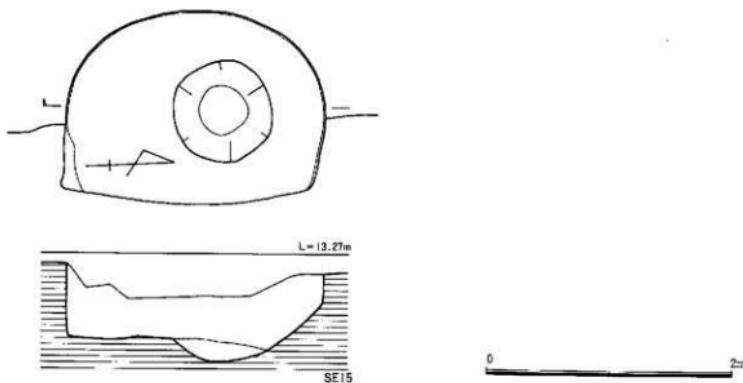
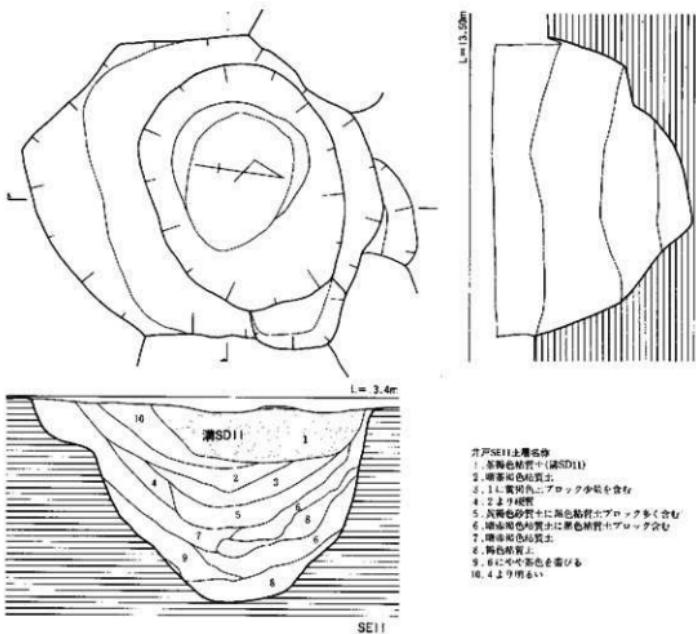
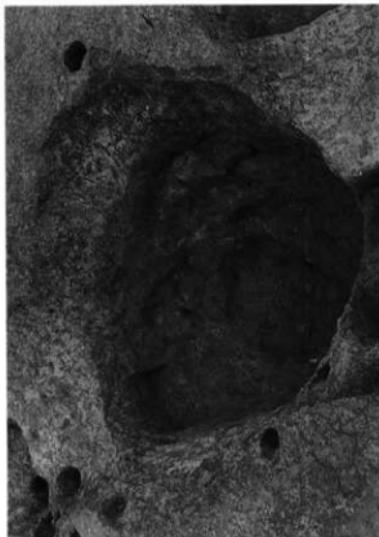


Fig. 64 井戸SE11・15実測図 (縮尺1/40)



井戸 S E 11 (西から)



井戸 S E 11 土層状態 (西から)



井戸 S E 15 (南から)



井戸 S E 18 (北から)

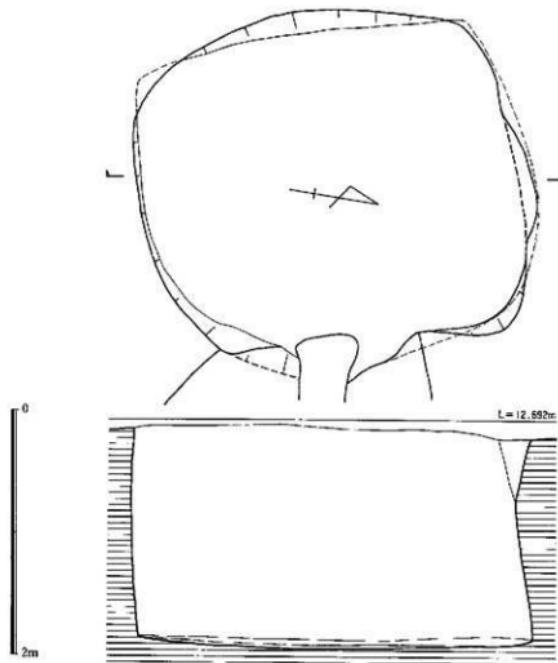


Fig. 65 井戸SE18実測図(縮尺1/40)

SE18 (Fig. 65) 調査区の東側に位置している。溝SD01の西側端に接続している。一連の造構であるのか不明なため、切り合ひ関係についても調査したが、土層においては先後関係は認められない。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は不整隅丸長方形を、断面形は壁がやや内傾した袋状を呈している。井戸上面での最大径は314cm、幅は298cm、深さ186cmを測る。井戸底部は平坦である。溝SD01との接合部は幅118cmの間口をもっており、溝底は井戸底に比べて約10cm低くなっている。接続部の溝底の幅は45cmである。井戸の覆土は暗い褐色粘質土を主体としており、井戸覆土からの出土遺物は土器細片であった。

(4) 土壌 (SK)

調査区内を繩文時代の溝SD12と戦国時代の溝SD01～03が縦横に貫いているため、土壌の遺存状態は悪いが、合わせて7基を検出した。土壌は全て褐色ローム層面に掘り込まれている。出土遺物から古墳時代に属するものが2基である。

SK01 (Fig. 67) 調査区東側に位置する。上面は削平と擾乱を受けている。上面の平面形は不整円形で、底部は不整隅丸長方形を呈している。断面形は逆梯形状であるが、底は平坦ではない。現存長178

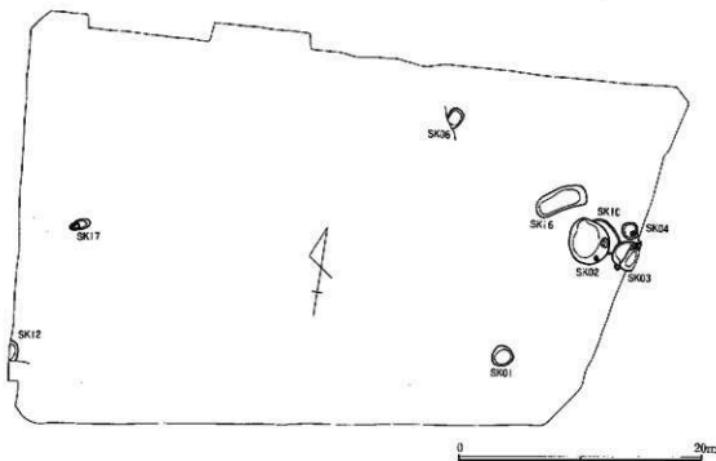


Fig.66 第77次調査土壙配置図 (縮尺1/400)

cm、幅170cm、底面の長さ142cm、幅118cm、深さ18cmを測る。覆土は第1層は黒褐粘質土、第2層は暗灰色粘質土である。土壙内の西側に集中して土器が出土した。遺物は古墳時代の土師器甕・高环を主体としており、須恵器は出土していない。

SK02 (Fig. 67) 上面は削平と擾乱を受けており、且つ、土壙SK10と切り合い関係にある。上面の平面形は不整円形で、底面は不整楕円形を呈している。断面形は逆梯形状であるが、壁は緩い傾斜である。現存長358cm、最大幅338cm、底面の長さ約270cm、幅約220cm、深さ33cmを測る。覆土は第1層は黒色粘質土、第2層は黒色粘質土に焼上を含む、第7層は黒色粘質土を主体としている。土壙内の北側半分に集中して土器が出土したが、これらは主に第1層からの出土である。遺物は古墳時代の土師器甕・鉢・丸底壺・高环・甕、須恵器堆・壺・甕、土鍤、滑石製白玉等が出土した。須恵器甕は朝鮮系と考えられる。

SK03 (Fig. 67) 東側境界地にあるため全体形は不明である。上面は削平と擾乱を受けており、且つ、土壙SK10に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、最大径270cm、深さ28cmを測る。断面形は浅い皿状を呈している。覆土は第1層粘質土、第2層粘質土である。底面の東側には長軸を南北方向にもつ不整長方形の上壙が存在する。この土壙の長さは約190cm、幅約90cm、深さ12cmを測る。遺物は古墳時代の須恵器坏甕、土師器鉢・高环・壺、敲石・滑石製白玉等が出土した。

SK04 (Fig. 68) 上面は削平と擾乱を受けている。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は浅い階鉢状である。現存長128cm、幅120cm、深さ24cmを測る。覆土は第1層粘質土、第2層粘質土、第3層粘質土で、レンズ状の堆積である。遺物は玄武岩製の敲石が1点出土した。

SK05 (Fig. 68) 溝SD12と切り合っている。上面は削平と擾乱を受けており、平面形は不整楕円形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存長184cm、最大幅120cm、深さ35cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。遺物は土師器片、須恵器高环片が出土している。

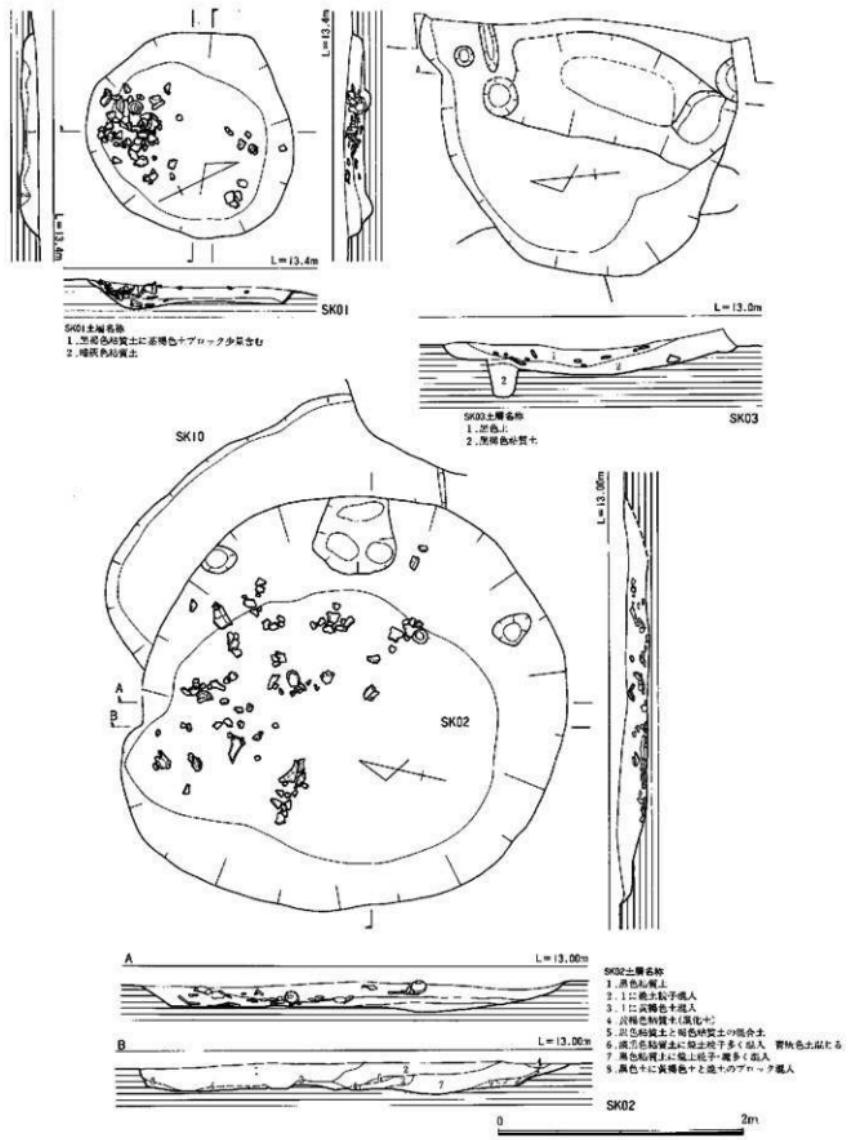
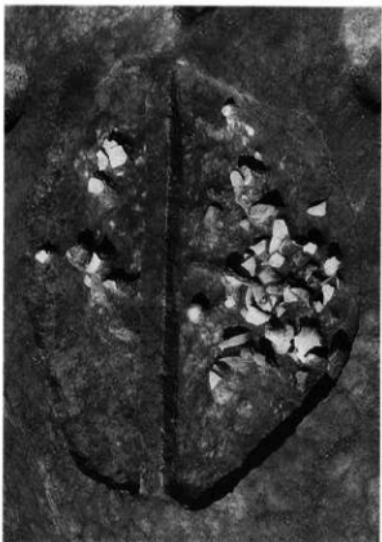


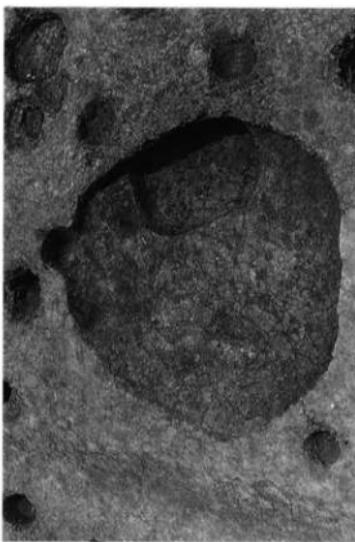
Fig. 67 土壌SK01~03実測図 (縮尺1/40)



土壤SK01(南から)



土壤SK01塊状鉄土状態(南から)



土壤SK01(西から)



土壤SK02(北から)



土塚SK02遺物出土状態（東から）



土塚SK02遺物出土状態（北から）



土塚SK02遺物出土状態（北から）



土塚SK02遺物出土状態（南から）



土塚SK01の遺物出土状態（南から）



土塚SK03（北から）



調査区東端土塚状跡（西から）



土塚SK04（東から）

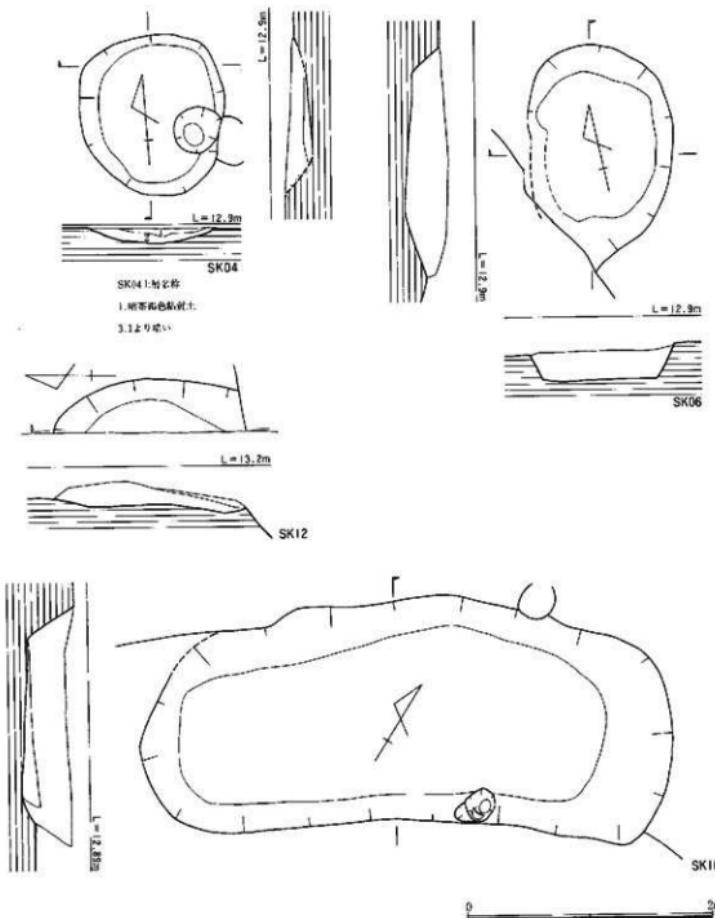


Fig. 68 土壌SK04・06・12・16実測図 (縮尺1/40)

SK10 (Fig. 87) 上面は著しく削平を受け、更にSK02に大部分を切られる。土壌SK03を切っている。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、断面形は逆梯形状である。現存長265cm、最大幅60cm、深さ9cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。遺物は土師器片、木炭が出土している。

SK12 (Fig. 88) 西側境界地にて一部を検出した。上面は削平を受けており、更に南側を溝SD13に切られる。平面形は楕円形が考えられ、断面形は逆梯形状であるが、底部は起伏がある。現存長158cm、最大幅45cm、深さ18cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。遺物は古墳時代の高坏が出土している。

SK16(Fig.68) 溝SD04に接し、溝SD04Bに接続している。元来は溝の一部とも考えられる。平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。長さ440cm、幅190cmを測る。

(5) 土壙出土遺物 (Fig.69~72)

SK01出土遺物 (31~37) 31~33・36・37は土師器、34・35は赤生土器である。31~35は甕、36・37は高环である。31の外面はヨコハケ調整、胴部内面はヘラケズリ調整、32の肩部外面は平行叩きを施している。33の外面は平行叩きの後、沈線を施し、内面には当て具痕が残る。34の口縁部はくの字形を呈している。

SK02出土遺物 (38~58) 38~51は土師器である。38~40は鉢、43~49は甕、41は小型丸底甕、42は高环、50・51は瓶である。48の口縁部はくの字形を呈する。43~47の胴部内面はヘラケズリ調整を施す。47の底部は平底状を呈し、外面はタテハケ調整である。50の瓶の外面は平行叩きで、把手は差しこみの接合である。51の底には径2.8cmの穿孔がある。52~54は須恵器で、52は壇、53は甕の口縁部である。54の内面は不定方向のナデ調整、外面は細かい格子目叩きを施しており、胎土も良質である。朝鮮系の須恵器である。55~57は管状土錠である。58は滑石製の白玉である。

SK03出土遺物 (59~77) 59は須恵器壺蓋で、口唇部内側がナナメに削られている。60~66は土師器である。60・61は鉢で、61の口縁部は外反している。62~64は高环で、62・63は高环の坏部で、63の

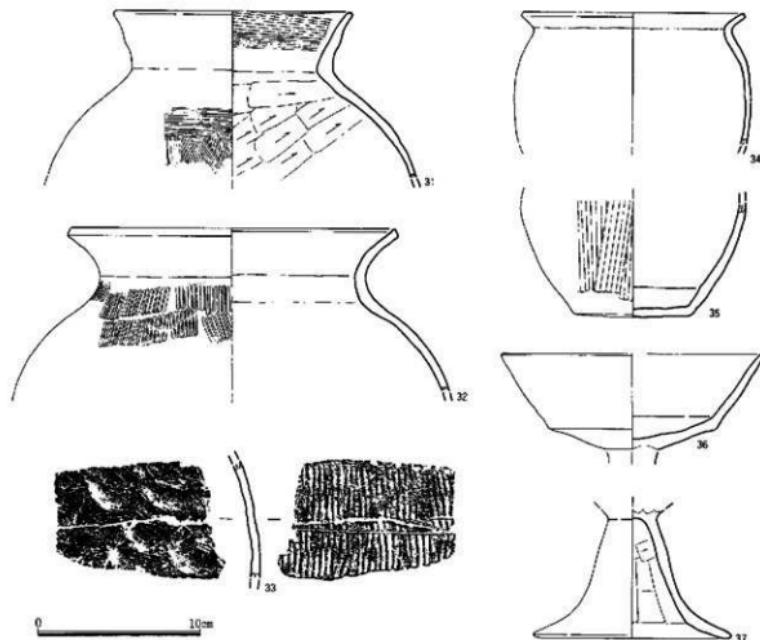


Fig.69 土壙SK01出土遺物実測図 (縮尺1/3)

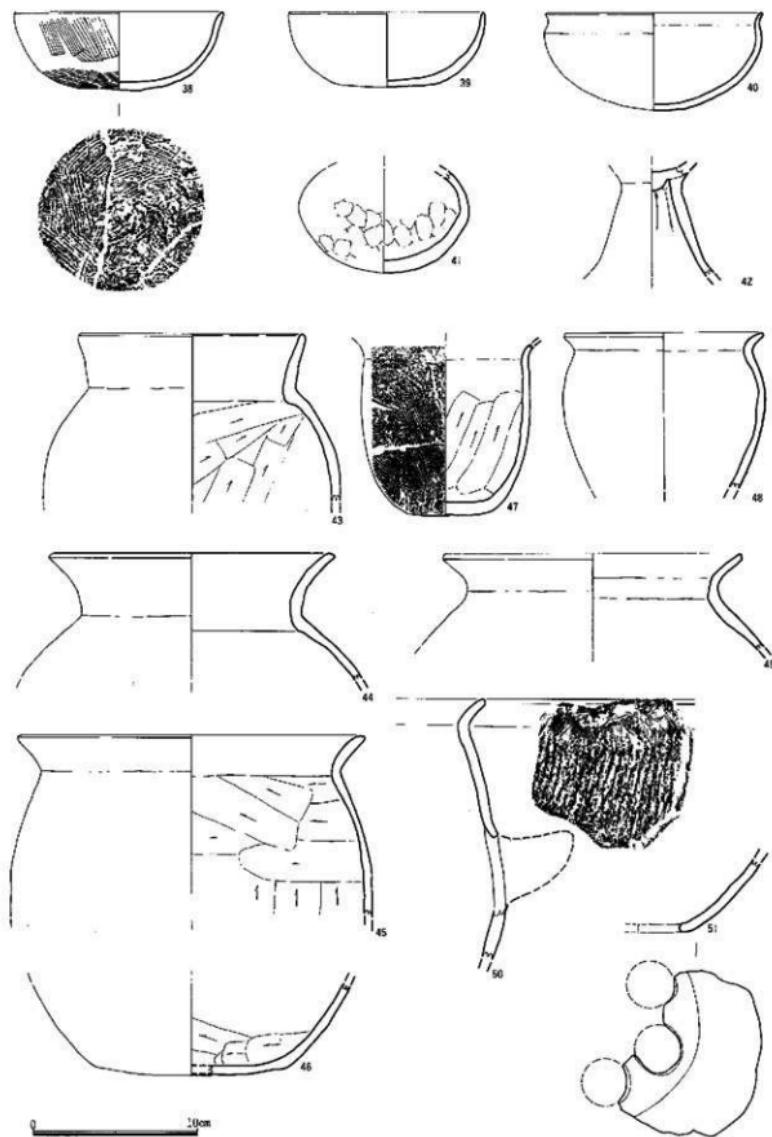


Fig. 70 土壤SK02出土遺物實測圖① (縮尺1/3)

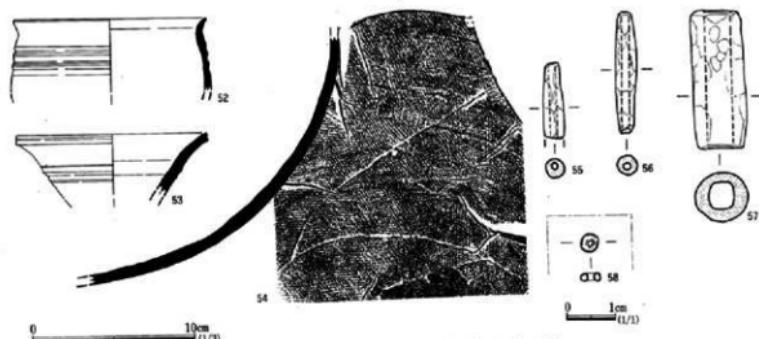
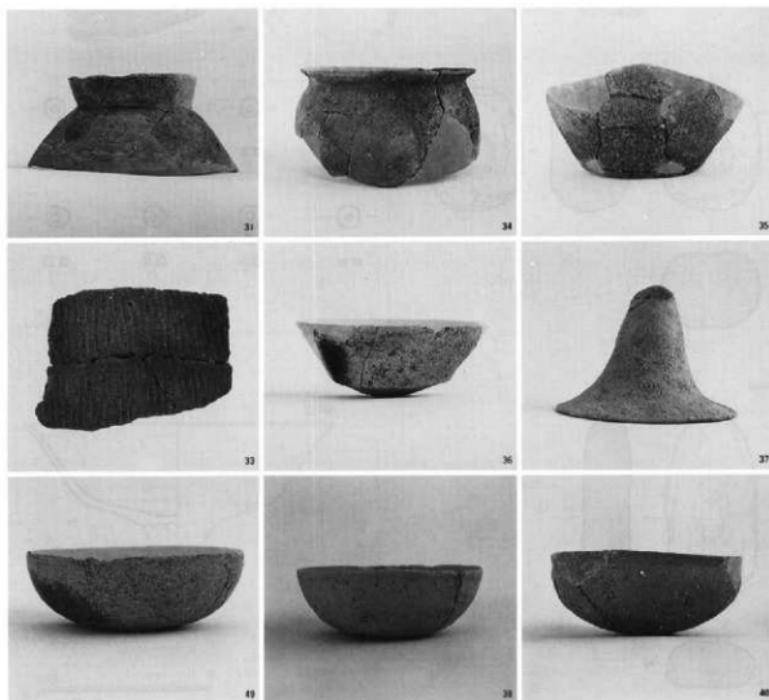


Fig. 71 土塚SK02出土遺物実測図② (縮尺1/1・1/3)



土塚SK01・02出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

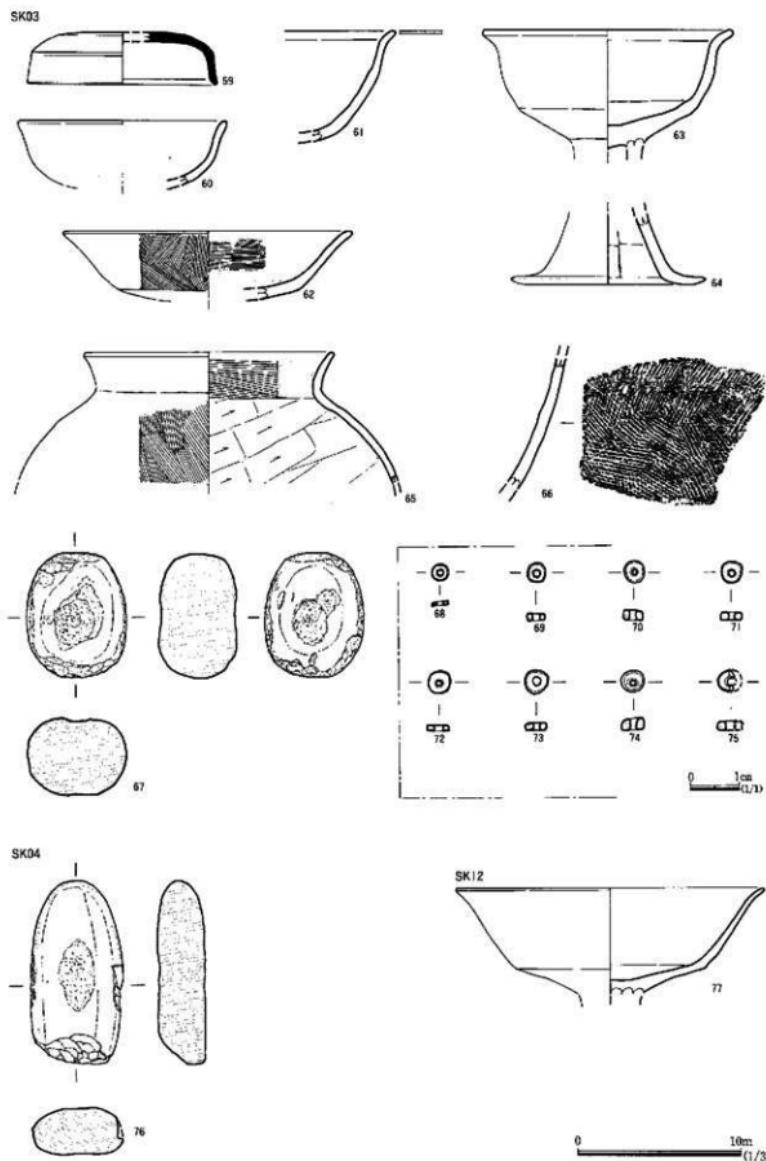
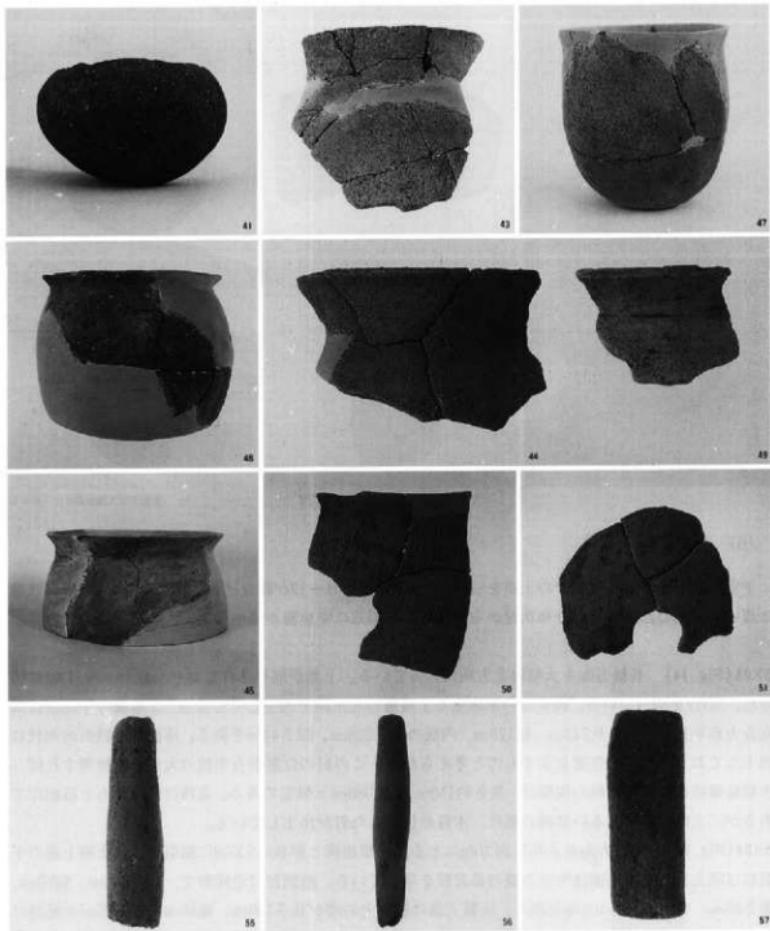


Fig. 72 土壤SK03・04・12出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)

器高は深く、且つ、口縁部が強く外反する。63の脚は裾部が強く外反する。65の腹内面はヘラケズリである。66の外面は細かい平行叩きである。67は敲石で、上下の小口面には敲打痕が強く残る。両面は凹石として用いている。68~75は滑石製白玉で、75は半欠している。

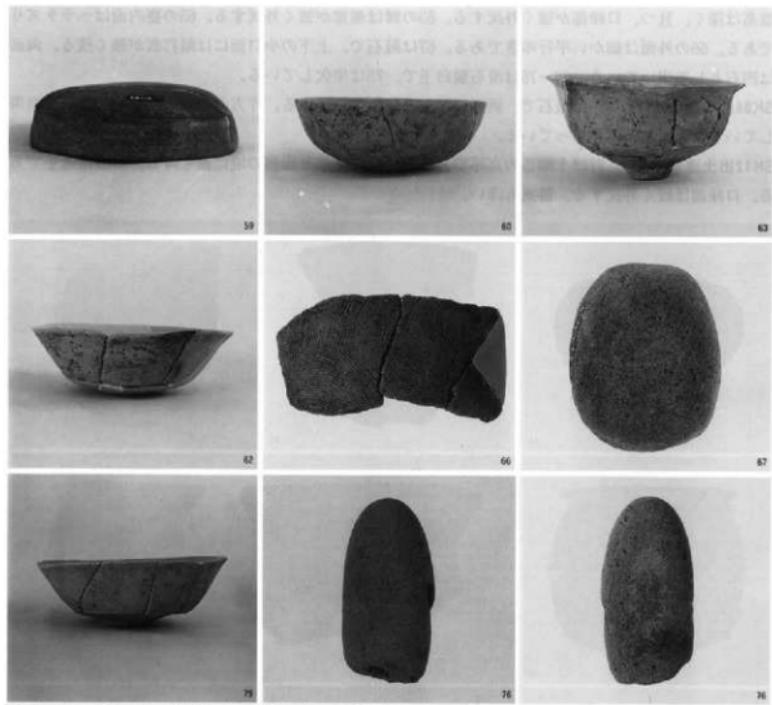
SK04出土遺物(76) 76は敲石で、両面は凹石として用いている。片方の小口部分を敲石として利用している。両面に凹みをもっている。

SK12出土遺物(77) 77は土師器の高环である。环部の体部と底部の境に稜を持ち、器壁は薄手である。口縁部は緩く外反する。器高も深い。



土壤SK02出土遺物

※数字は実測図番号に一致する



土壙SK03・04・12出土遺物

*数字は実測図番号に一致する

(6) 土壙墓 (SX)

平安時代から鎌倉時代までの土壙を5基検出した。清SD01~12が調査区を縦横に走るため、遺存状態は悪い。検出した土壙墓の分布状況から元来はこの周辺に中世墓が集中していたことが推測できる。

SX05 (Fig. 74) 長軸方向を大略南北方向にとっている。上部が削平されており、且つ、溝SD02に切れられ、SD12を切っている。調査時の不注意で土壙墓の北東隅を削平してしまった。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、現存長242cm、幅175cm、内底の長さ226cm、深さ44cmを測る。床面から鉄釘が列状に出土しており、木棺の位置を示すものと考えられる。この釘の位置から木棺の大きさを推測すれば、土壙墓底において棺桶の規模は、長さ約150cm、幅約80cmと推定できる。遺物はいずれも土器細片であるが、土師器の壊あるいは椀の破片、木質が付着した釘が出土している。

SX08 (Fig. 74) 長軸方向を大略東西方向にとる。土壙規模と形状はSX09に類似する。土壙上面の平面形は隅丸長方形、底面はやや不整の長方形を呈している。断面形は逆梯形で、長さ146cm、幅63cm、深さ85cm、底面の長さ102cmを測る。土壙上部には挙大の礫が長さ100cm、幅40cm、厚さ25cmの範囲に投げ込まれていた。覆土の填压に用いられたと考えられる。棺桶の規模は不明である。遺物は瓦器碗



Fig. 73 第77次調査上墳墓配置図 (縮尺1/400)

と白磁碗の破片が覆土から出土した。

SX09 (Fig. 74) 長軸方向を大略南北方向にとっている。上面の平面形は隅丸長方形、底面はやや不整の長方形を呈している。断面形は逆梯形を呈し、長さ141cm、幅80cmを測る。木棺規模は不明であるが、墓擴の中位と下位から土師器環2点が出土している。棺上部に副葬されたものと考えられる。

SX13 (Fig. 74) 調査区の西側に位置し、SX14に近接する位置にある。主軸方位を北西から東南方向にとる。上面の平面形はやや不整の隅丸長方形、底面はやや隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。長さ142cm、幅45cm、底面の長さ104cm、深さ55cmを測る。底は舟底状を呈する。遺物は墓擴の北西小口部分の中位から青磁錐連弁文碗が傾斜した状況で出土した。

SX14 (Fig. 74) 調査区の西側で検出した。主軸方位は南北方向におく。平面形は隅丸長方形、底面は不整長方形を呈し、現存長137cm、幅55cm、深さ48cmを測る。底は舟底状を呈する。覆土中から白磁碗片、及び小型の磨石、土玉が出土している。

(7) 上墳墓出土:遺物 (Fig. 75)

SX05出土遺物 (81~89) 81は土師器の环で、体部は強く開き、底径と口径の比が大きい器形である。82~89は鉄製釘で、断面形は方形、又は長方形である。85~88は頭部を欠いている。83~89には木質が残っている。

SX08出土遺物 (90・91) 90は瓦器碗で、断面三角形の高台をもつ。91は中国白磁碗IV類で、低い高台を有している。

SX09出土遺物 (92・93) 92・93は糸切り底の土師器環で、体部は丸味を持ち、あまり開かない。外底部に板日痕がある。

SX13出土遺物 (94) 94は完形品である。龍泉窯系の青磁碗で、外面に錦蓮弁文を施す。内底には印花文がある。

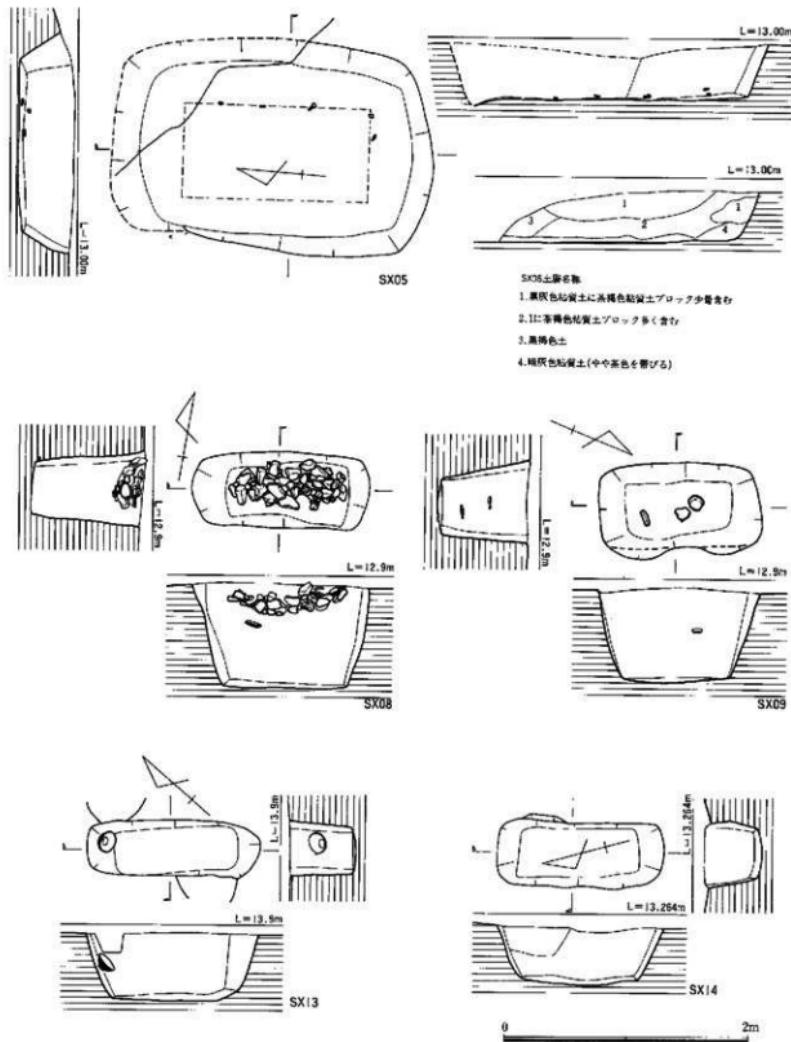
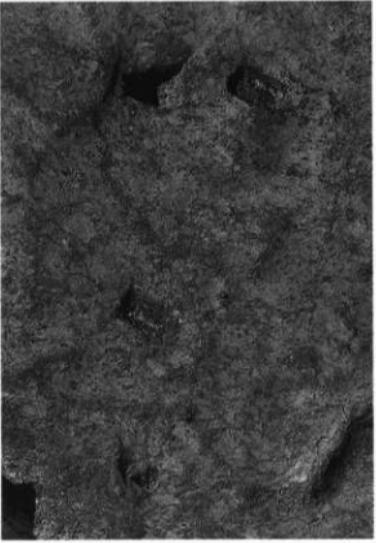


Fig.74 土壠塗SX05・08・09・13・14実測図 (縮尺1/40)



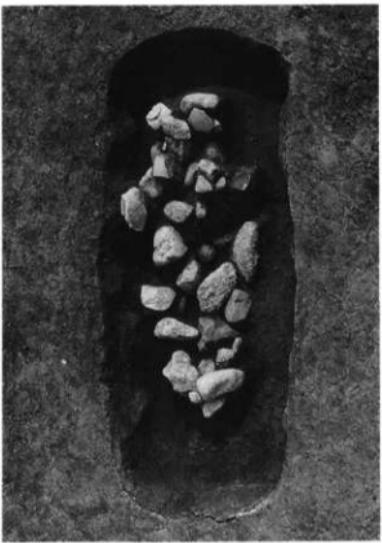
土塚墓 SX05 (東から)



土塚墓 SX05 鉄釘出土状態 (西から)



土塚墓 SX05 鉄釘出土状態 (南から)



土塚墓 SX08 (北から)



土壤窓 SX 08 実態状態（南から）



土壤窓 SX 09（西から）



土壤窓 SX 13（南西から）



土壤窓 SX 14（東から）

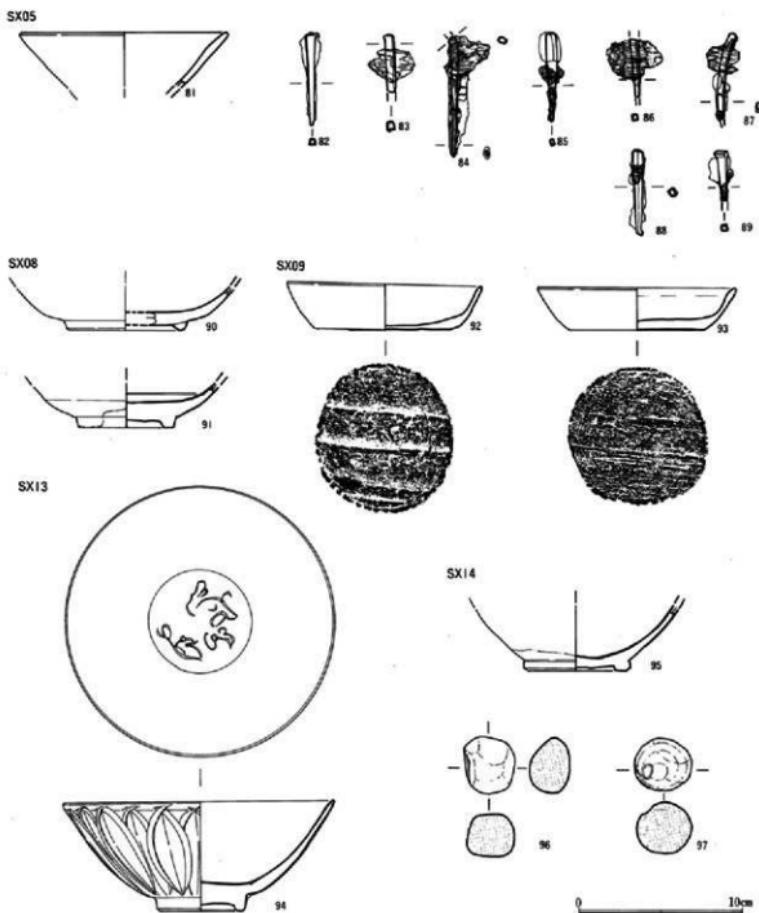
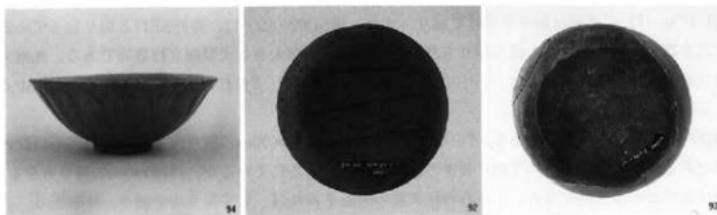
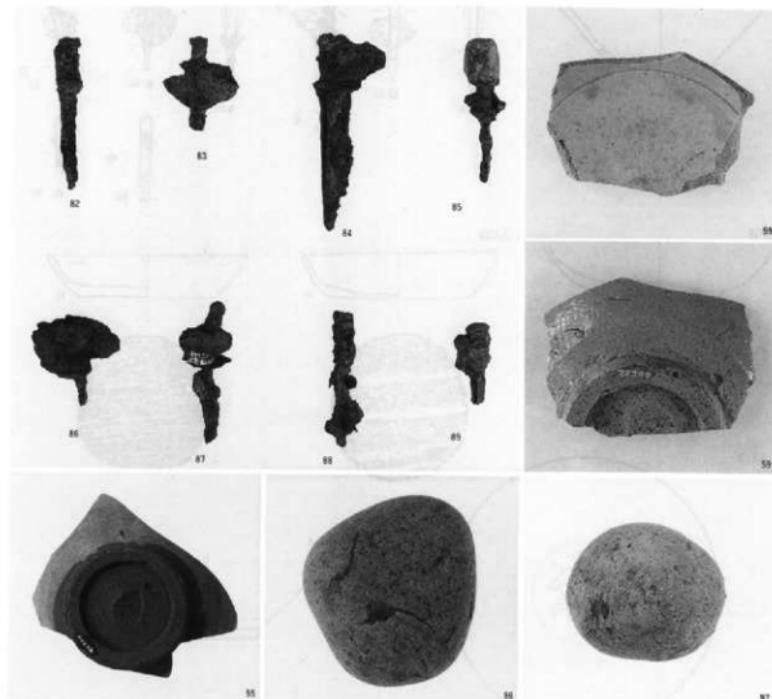


Fig.75 土壌竈SX05・08・09・13・14出土遺物実測図（縮尺1/3）



土壌竈SX09・13出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する



SX14出土遺物(95~97) 95は中国白磁碗IV類である。96は石製品で、磨石であろう。97は土製品の丸玉であるが、穿孔はない。

*数字は実測図番号に一致する

(8) 堀立柱建物 (SB)

調査区の西側において大型柱穴の集中地域があり、堀立柱建物5棟、及び櫓3条等を検出した。柱穴はいずれもローム層に掘り込まれている。

SB01 (Fig.77) 上面は削平を受けており、また、溝SD02・03・11、井戸SE11と切り合っているため柱穴を数ヶ所欠いている。柱穴掘り方及び柱根径の規模が大きな大型堀立柱建物である。九州大学考古学研究室の第1次調査では、SP10は「1号柱穴」、SP11は「2号柱穴」、第2次調査では、SP 6は「3号柱穴」と呼称されている。

調査内容は以下のとおりである。「…中略… 1号柱穴は110×90cmの掘り方をもち、径25cmの柱の抜き跡がある。2号柱穴はその半分を後世の溝によって破壊されているが、ほぼ140cmの掘り方をもち、内部に径25cmの抜き跡がある。これらの柱穴群の断面をみれば、まず掘り方を掘り、柱を建て、その周りを粘土でしめしていることがわかる。」建物は主軸を南北方向におき、梁行3間、桁行7間の規模を

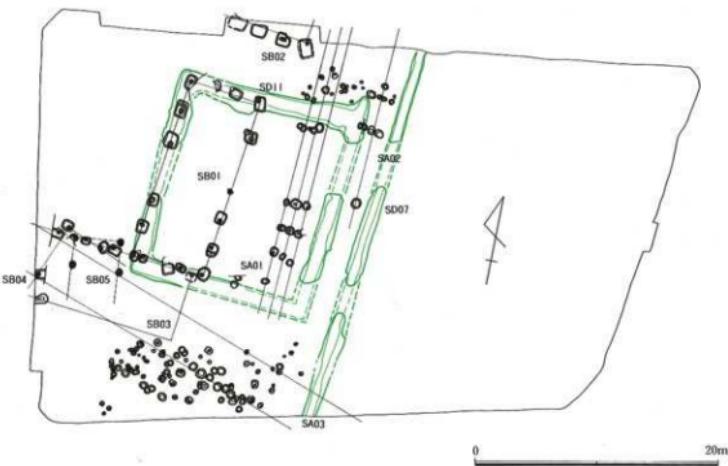


Fig. 76 第77次調査掘立柱建物・構配図 (縮尺1/400)

もった側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位はN 7°Eである。柱間は梁行19.8尺、桁行49.5尺で、梁間平均は6.7尺、桁間平均は8.3尺である。柱穴掘り方の平面形は隅丸長方形を呈し、掘り方の長さ100~130cm、幅80~130cm、深さ80cmを測る。柱根径は30~35cmである。柱穴から土師器瓶、須恵器蓋・甕、土製品が出土している。

SB02 (Fig. 78) 調査区の北側境界地で検出した。柱穴掘り方径が大規模な大型の掘立柱建物である。大略東西方向に延びる梁行4本分の柱を検出した。調査区の北側は道路工事のため、切り下げられており、今後全体形を把握するのは困難であろう。SB01と主軸方向を同じくする。現状の梁間平均は210cm(7尺)で、4本柱とすれば、梁行の長さ630cmを推測できる。現状での主軸方位はN 84°Eである。柱穴掘り方は隅丸長方形で、断面形は箱型又は袋状を呈する。掘り方の長さ120~160cm、幅115~135cm、深さ100~120cmを測る。柱根径は35cmを測る。遺物は弥生土器、土師器が出土している。

SB03 (Fig. 78) 上面を削平されている。更に溝SD03・11に切られ、柱穴の大部分を欠くため全体形は不明である。掘立柱建物SB01と切り合うが、先後関係は不明である。建物方位が一致しているところから建て替えが考えられる。掘り方規模の大きな大型掘立柱建物である。建物は西側の境界地にあたるため、規模もまた不明である。梁行2間、又は3間、桁行5間以上の規模をもった側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN 84°36'Wにおき、柱間は梁間17尺、桁間38.3尺を、梁間平均8.5尺又は5.6尺、桁間平均7.7尺を測る。掘り方の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ55~98cm、幅60~100cm、深さ50~60cmを測る。柱根径は20~25cmである。遺物は土師器瓶、須恵器甕等が出土している。

SB04 (Fig. 80) 西側境界地に位置し、また、溝SD02と切り合うため大部分を削平され、全体形は不明である。柱穴掘り方の規模が大きい。大略南北方向で、梁行1間以上、桁行2間以上の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN 20°Eにおき、柱間は梁間10.3尺、桁間7.5尺を測る。掘り方の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ90cm、幅65~85cm、深さ35~40cmを測る。柱根径は28~30cmである。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器甕等が出土している。

SB05 (Fig. 80) 調査区西側で検出した。溝SD02に切られるため全体形は不明である。SD03・04と切り合う。梁行2間、桁行1間以上の規模をもった側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN 23°Eに



据立柱建物SB01、溝SDI11（西から）



据立柱建物SB01、溝SDI11（北から）

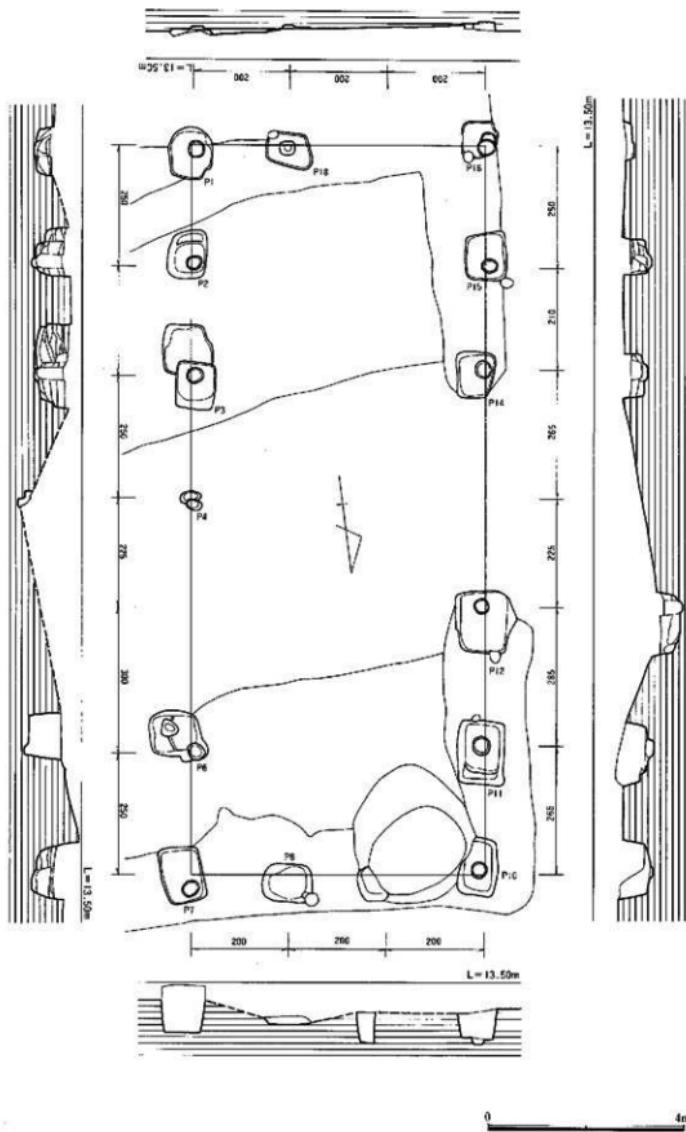


Fig. 77 据立柱建物SB01実測図 (縮尺1/100)



掘立柱建物 SB01-P2 (東から)



掘立柱建物 SB01-P5 の状態 (東から)



掘立柱建物 SB01-P10 (東から)



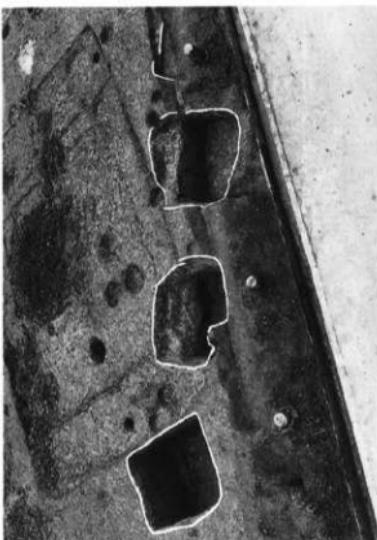
掘立柱建物 SB01-P11 (東から)



掘立柱建物 SB 01-P 12 (東から)



掘立柱建物 SB 01-P 14 (東から)



掘立柱建物 SB 02 (北から)



掘立柱建物 SB 02-P 16 の状態 (南から)

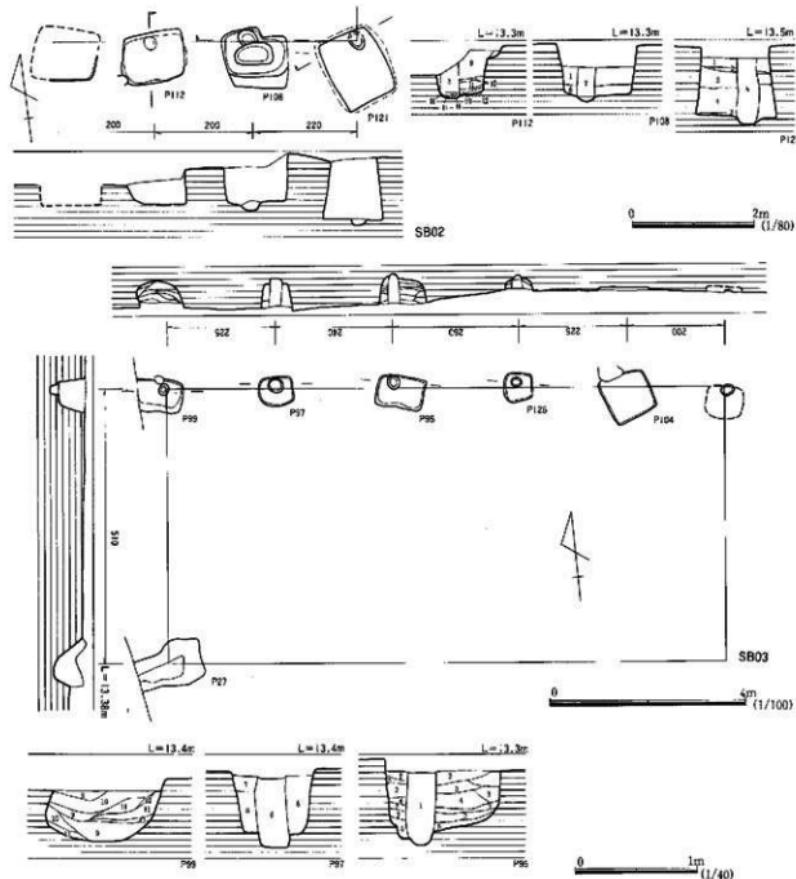


Fig. 78 稲立柱建物SB02・03実測図 (縮尺1/40・1/80・1/100)

SB03土層名録

1. 黒褐色粘土質土
2. 1に黒褐色の小アロック少し含む
3. 黑褐色土上に黑色土を含む
4. 黑褐色土上に黑色土を含む
5. 黑褐色砂質土と黒褐色土上のアロック含む
6. 黑褐色土
7. 1より黒い黒褐色土上に埋り
8. 黑褐色土に黒褐色土少し混入
9. 黑褐色土に黒褐色土のアロック混入
10. 黑褐色土に黒褐色土の混合土
11. 黑褐色土
12. 黑褐色土上に黒褐色土混入
13. 黑褐色土
14. 1に黒色土少す
15. 黑褐色粘土質土
16. 黑褐色粘土質土
17. 黑褐色粘土質土
18. 黑褐色粘土質土、少しきれい
19. 黑褐色土と黒褐色土上の混合土
20. 黑褐色土
21. 黑褐色土上に黒褐色土混入
22. 黑褐色土
23. 1に黒色土少す

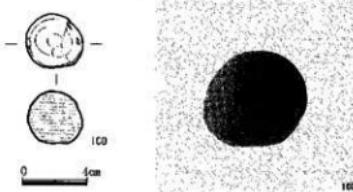


Fig. 79 稲立柱建物SB01出土遺物実測図 (縮尺1/3)



擧立柱建物SB 03（西から）



擧立柱建物SB 03-P 96の北縁（南から）



擧立柱建物SB 03-P 96の北縁（南から）



擧立柱建物SB 05（南から）

Tab. 12 第77次調査堀立柱建物一覧表

LK=30.0m

直標名	規模	帶 行		第 行		方位	床面積 (m ²)	柱 穴 状 態				出土 遺 物
		高さ(尺)	幅(尺)	支高(尺)	幅(尺)			深さ	直径	仰角	柱根径	
SB01	7×3	226(6.8)	226(6.8)	218(6.7)	200(6.7)	N7°E	90	15	80	18°-19°	8°-10°	土師器皿、須恵器類、土製品及 陶、出露石 青SS21と 切り合う
		226(6.8)	226(6.8)	226(6.7)	200(6.7)			30	80	18°-19°	8°-10°	
		226(6.8)	226(6.8)	226(6.7)	200(6.7)			35	80	18°-19°	8°-10°	
		226(6.8)	226(6.8)	226(6.7)	200(6.7)			35	80	18°-19°	8°-10°	
		226(6.8)	226(6.8)	226(6.7)	200(6.7)			35	80	18°-19°	8°-10°	
SB02	3×3		420(14)	220(7.3)	200(6.7)	N84°E		3	18-19	19-20	18-18	35 須恵器、土師器
SB03	5×3	206(6.7)	226(7.5)	226(6.7)	210(17)	N84°30'W	56.7	7	50-60	55-56	19-20	土師器皿、須恵器類、瓦 青SS21と 切り合る
		206(6.7)	226(7.5)	226(6.7)	210(17)			7	50-60	55-56	19-20	
		206(6.7)	226(7.5)	226(6.7)	210(17)			7	50-60	55-56	19-20	
		206(6.7)	226(7.5)	226(6.7)	210(17)			7	50-60	55-56	19-20	
SB04	2×1	456(15)	227(7.0)	227(7.3)	310(10.3)	N22°E	13.95	3	35-40	90	15-15	28-30 須恵器、土師器、須恵器、馬糞土
SB05	2×1	390(12.3)	228(7.5)	164(5.0)	240(7.9)	N23°E	9.36	5	10-10	45-50	40-45	土師器 青SS21と 切り合る 青SS203-04と 切り合る

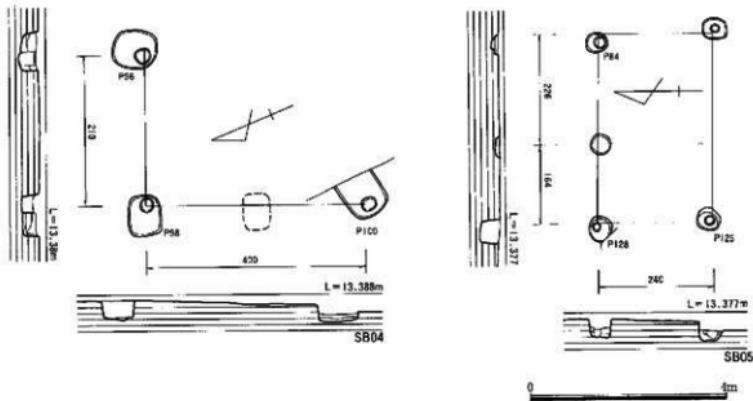


Fig. 80 堀立柱建物SB04・05実測図(縮尺1/100)

おき、柱間は梁行7.9尺、桁行12.9尺、桁間平均6.5尺を測る。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径40~50cm、深さ10~40cmを測る。柱根径は16~20cmである。柱穴から土師器片が出土している。

(9) 堀立柱建物出土遺物 (Fig. 79)

SB01出土遺物 (100) 100はSX14出土の土製品の玉と同じ形状を示し、同様に穿孔はない。

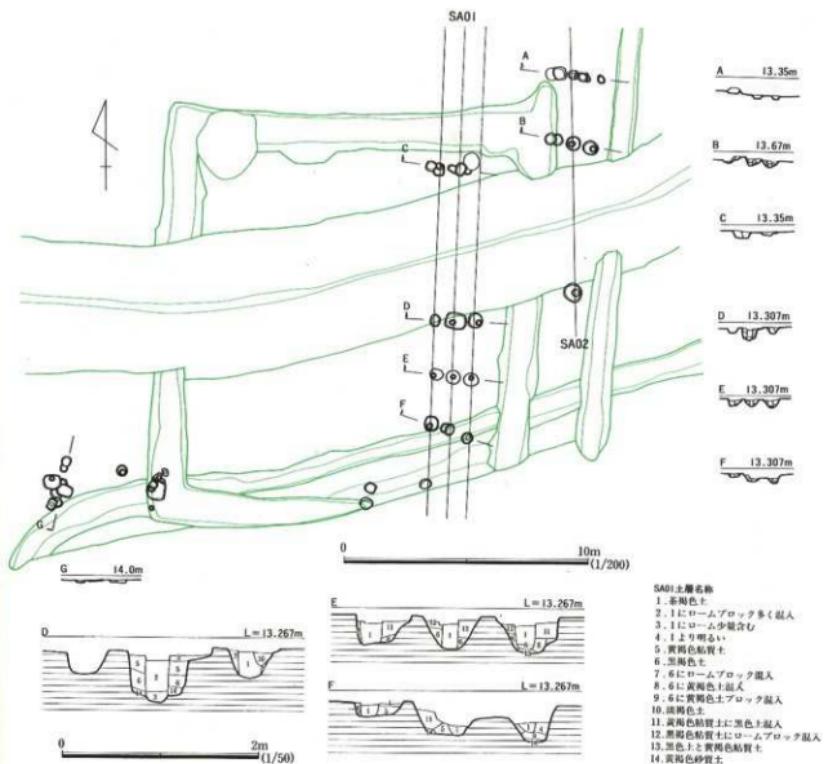
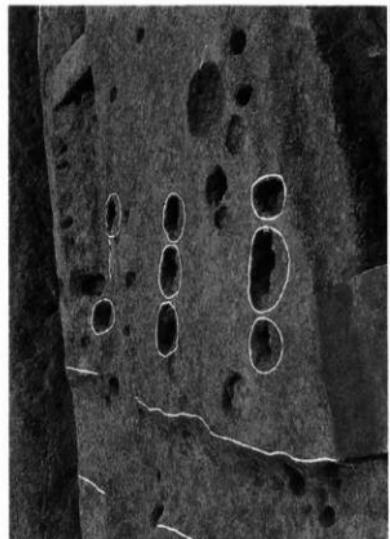


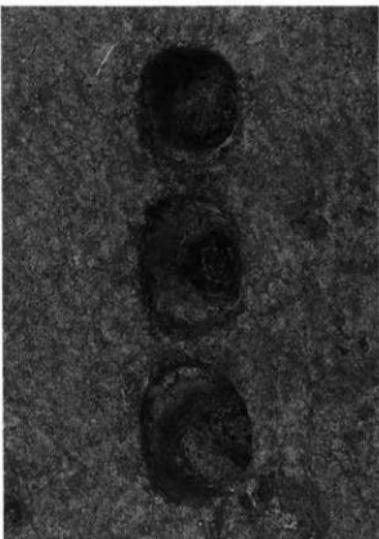
Fig. 81 棚SA01・02実測図 (縮尺1/50・1/200)



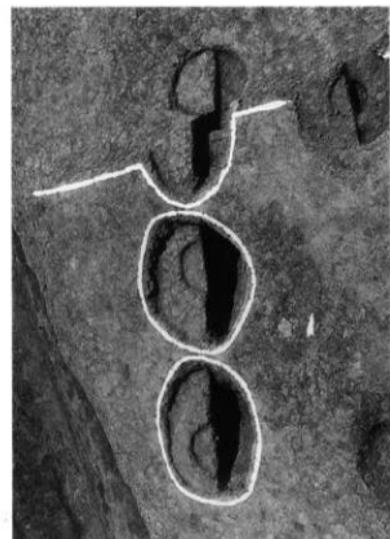
棚SA01・02 (西から)



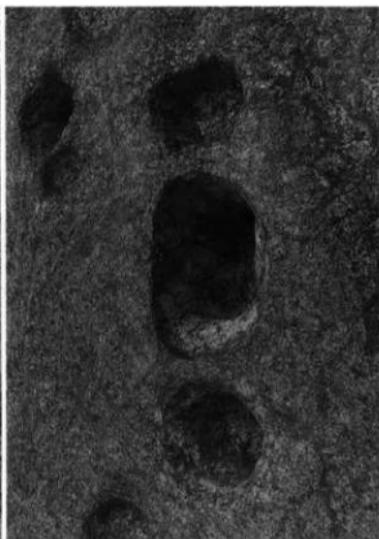
標 S A 01 (北から)



標 S A 01-P Bi . 94 (北から)



標 S A 01-P 19 . 18 . 17 (北から)



標 S A 01-P 23 . 93 . 24 . 25 (北から)

(10) 構 (SA)

4条の構を検出した。上面を大幅に削平され、且つ、溝SD02・03・11等と切り合っているため、柱穴をきちんと把握できなかった。3本の柱穴で構成された構は南北方向の構が2条、単独柱穴の構は東西方向の構が2条である。

SA01 (Fig. 81) 大略南北方向の構で、主軸方位はN5°Eである。溝SD02・03に切られる。構の柱穴の一部は既に九州大学考古学研究室の第1次調査のにおいて完掘されていた。遺構は削平のため遺存状態が悪い。構は主柱と2本の支柱で構成されており、4ヶ所を検出した。現状で把握した長さは15.20mを測る。主軸方位は南北方向がN5°E、東西方向がN85°Wである。北側の3本1組の柱穴は東西方向に柱穴を並べているが、南側は徐々にその方向を変えており、南側では直角に曲がるコーナーを形成しているものと推定できる。各柱間の平均値は110cmである。柱穴掘り方は不整円形を呈している。柱穴径は20~40cm、柱根径は10~15cmである。覆土は黒褐色粘質土、もしくは黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合土である。

SA02 (Fig. 81) 構SA01に平行しているが、削平のため一部しか検出できなかった。主柱と2本の支柱で構成されており、2ヶ所を検出した。現状での長さは4.5mである。柱穴径は22~30cm、柱根径は15cmを測る。主軸方位はN5°Eである。

SA03 (Fig. 76) 主軸方位はN79°Wの構である。西側の第107次調査で検出したSA02から連続するものである。西南の境界地にあることや、溝SD02に切られるため、全体形は不明である。1本の柱で構成されており、現状で把握した長さは約6m、柱穴の数は6個を数える。柱穴径は25~40cm、柱根径は12cmを測る。

SA04 (Fig. 76) 主軸方位はN79°Wの構である。西側の第107次調査で検出したSA04から連続するも

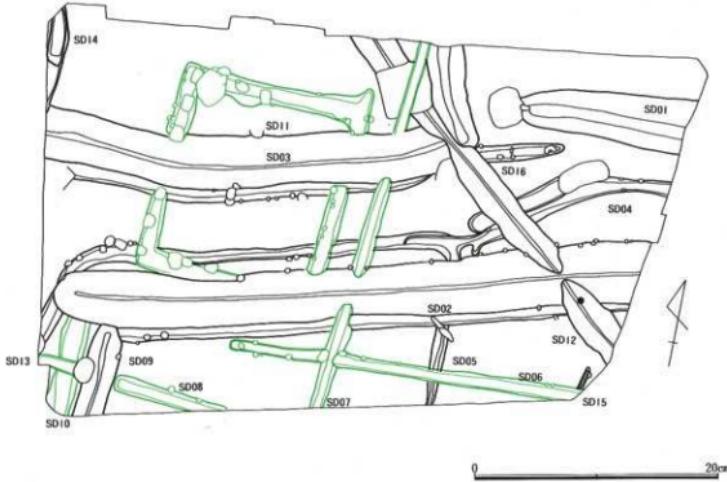
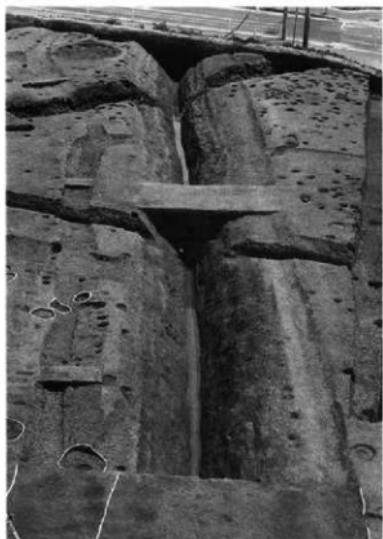


Fig. 82 第77次調査溝配置図 (縮尺1/400)



溝SD02（西から）



溝SD02（西から）



溝SD01・井戸SE18（西から）



溝SD03（西から）

のである。

(II) 古代から近世の溝 (SD)

調査区において東西方向・南北方向の縦横に溝が走っており、縄文時代から江戸時代までの溝13条を検出した。縄文時代の溝1条、奈良～平安時代の溝4条、戦国時代の溝7条、江戸時代の溝1条である。戦国時代の溝は幅4～6m、深さ2～3mの規模をもち、塗としての要素が強い。江戸時代の溝は、幅は120cm程度で、浅く、矩形に溝が分岐しているところから区画を示す溝と考えられる。

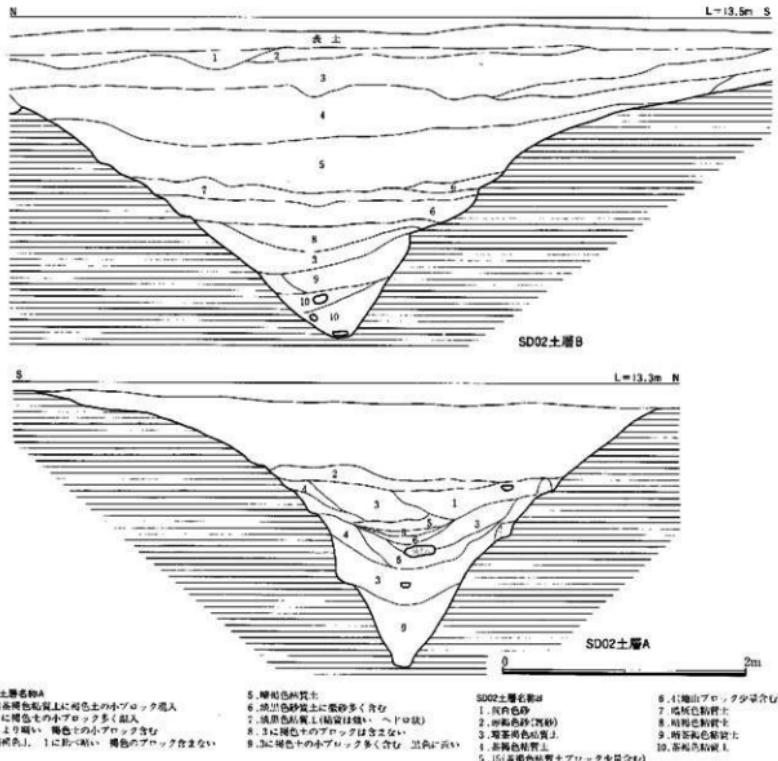


Fig.83 溝SD02実測図 (縮尺1/40)



溝 S D 02 土層状態（東から）



溝 S D 02 土層状態（西から）



溝 S D 03 土層状態（東から）



溝 S D 03 土層状態（南から）

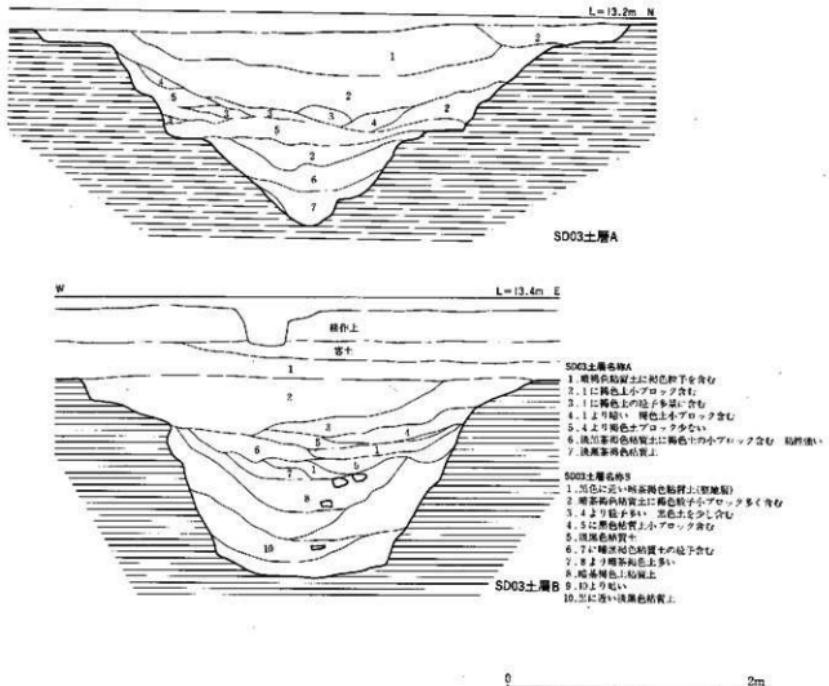


Fig.84 溝SD03実測図 (縮尺1/40)

SD01 (Fig.82) 調査区の東側境界に位置しており、長さ14.3mまでを確認するにとどまった。大略東西方向の溝で、溝の西側に向かって溝幅は狭くなっている。先端には井戸SE18が接続している。底は東方向に下っている。溝の断面形は箱型掘りであるが、2段掘りになっており、上部は摺鉢状、下位は逆梯形になっている。溝上面の幅は450cm、底面の幅は80cm、深さ174cmを測る。底面は湧水がある。

覆土は暗い褐色土、又は茶褐色土を主体としている。覆土から瓦質土器、中国青磁・白磁、高麗青磁、李朝陶器、瓦類等が出土しており、戦国時代の造構と考えられる。

SD02 (Fig.83) 調査区の中央南寄りに位置しており、東側境界地から直線的に西側境界地まで延びる溝で、長さ48mを測る。大略東西方向の溝である。溝SD07・09・11・12を切っており、溝SD04・05に切られる。西側においては溝の幅は狭くなっている。溝の終わりを示している。断面形はV字形を呈するが、上部は幅広く、中位以下は急に幅が狭くなり、傾斜が強い。溝上面の幅は570cm、底面の幅は30cm、深さ256cmを測る。

覆土は暗い褐色粘土質土、暗茶褐色粘質土を主体としている。覆土から上師器环、瓦質土器鉢・火合、唐津焼碗、瓦類、鉄製品、石器等が出土しており、戦国時代の造構と考えられる。

SD03 (Fig. 84) 調査区の中央北寄りに位置している。大略東西方向から南北方向に矩形に曲がる溝である。東西方向の長さ約34.8m、南北方向の長さ約9mを確認した。溝の東西方向の両肩に接して、近世の溝SD16が切っている。溝の断面形は東西方向と南北方向で大きな違いがある。東西方向では、溝の断面形は大略幅広いV字形を呈し、溝中位の壁両側に幅30~50cmのテラス状(犬走り状)の段を有している。南北方向では、断面形は逆梯形を呈しているが、上位に肩部を形成している。溝上面の幅は東西方向では約4.4m、犬走り状の段部の幅は0.25m、深さ1.72mを測る。南北方向での溝上面の幅約3.7m、肩部幅2.5m、底面幅1.4m、深さ1.7mを測る。覆土は暗い褐色粘質土、暗茶褐色粘質土を主体としている。

覆土から土師器皿、瓦器碗、瓦質土器鉢・火舎、国産陶器、備前焼鉢、瓦類等が出土しており、戦国時代の遺構と考えられる。

SD04 (Fig. 85) 調査区の中央に位置しており、やや蛇行しながら大略東西方向から南北方向に曲がる溝である。排水溝、又は道路としての機能の他に区画の役目をもつものと考えられる。西側は大きくカーブして、東西方向に延びている。SD04の北側に接して、長さ13.4mの溝SD04Bが接している。東から約18.5mのところでは南側方向にSD05が分岐している。溝の断面形は逆梯形、又は浅い舟底状を呈している。溝上面の幅は111cm、底面の幅は55cm、深さ31cmを測る。

覆土は暗い茶灰色粘質土を主体としている。覆土から須恵器、瓦器碗、瓦質土器、白磁碗、瓦類等が出土しているが、瓦質土器の蓋等から江戸時代の遺構と考えられる。

SD05 (Fig. 85) 調査区の南側境界に位置し、溝SD04から南に分岐した溝である。長さ13.2mまでを確認した。大略南北方向の溝で、排水溝又は区画の役目をもっていると思われる。断面形は逆梯形、又は浅い舟底状を呈し、溝上面の幅は110cm、底面の幅35~80cm、深さ34cmを測る。覆土は暗い茶灰色



溝SD03・07・11・12（北から）

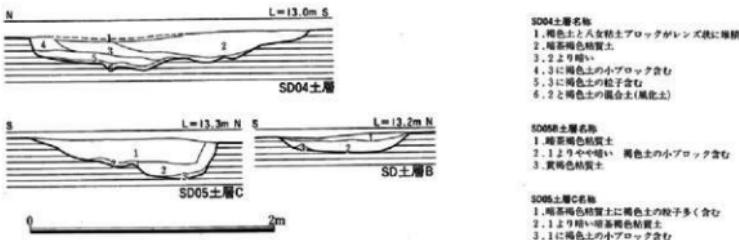


Fig. 85 溝SD04・05実測図(縮尺1/40)



溝SD05土層状態(東から)

粘質土である。覆土から土師器皿、須恵器、瓦質土器、白磁碗、石器等が出土している。SD04と同じく江戸時代の遺構と考えられる。

SD06 (Fig. 86) 調査区の南側に位置しており、大略東西方向の溝である。西側までの長さ28.9mのところで溝は終わっている。溝SD07を切っている。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅130cm、底面の幅75cm、深さ82cmを測る。溝底内に長さ250cmを測る土塊が存在する。

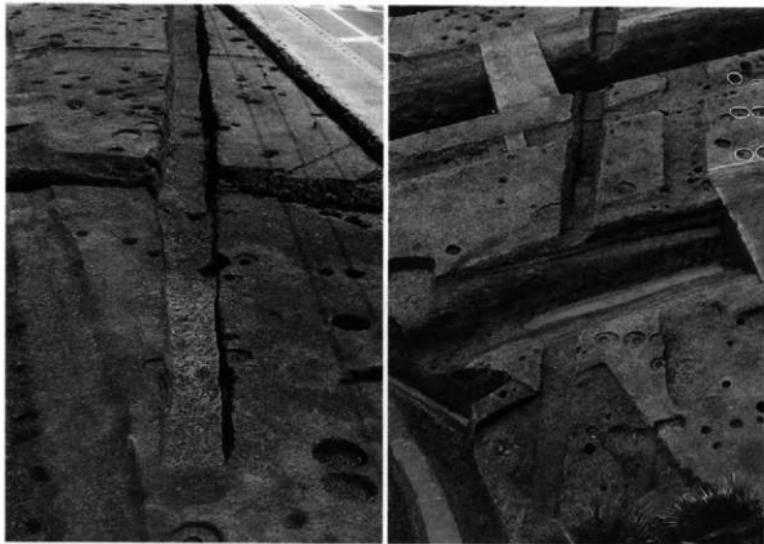
覆土は黒褐色粘質土、又は暗灰色粘質土を主体としている。覆土から繩文土器片、土師器瓶片、石器等が出土している。覆土の状態から古墳時代～鎌倉時代の幅が考えられる。

SD07 (Fig. 86) 大略南北方向の溝で、調査区の中央に位置している。溝SD02・03に切られ、住居跡SC04を切っている。北側から南側までの長さ31.5mまでを確認した。溝SD11、櫛SA01・02、獨立柱建物SB01の主軸に平行した溝である。区画の役目をもつていると考えられる。断面形は逆梯形を呈し、上位の壁はやや膨らみをもつている。溝上面の幅は130cm、底面の幅は60cm、深さ60cmを測る。

東西方向の溝SD08・13とは溝主軸が直交する方向にあり、また、溝の形状も同一であることから、これらの溝は一連のものと考えられる。

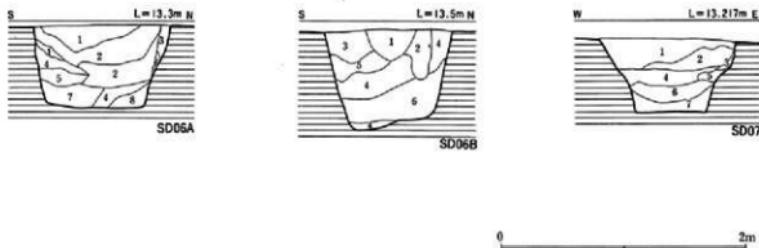
覆土は茶褐色粘質土、暗褐色粘質土を主体としている。覆土から須恵器腹・高环及び石器等が出土している。古代の遺構と考えられる。

SD08 (Fig. 82) 調査区の南西側境界に位置している。大略東西方向の溝で、区画の役目をもつていて。溝SD09と接するところで終わっており、長さ9mまでを確認した。断面形は逆梯形を呈し、溝上



溝SD06 (西から)

溝SD07 (北から)



SD06土層A名前

1. 黒褐色粘質土
2. 暗灰色粘質土に茶褐色粘質土ブロック多く含む
3. 暗褐色粘土
4. 2よりやや茶色を帯びる
5. 黄褐色粘質土に黒褐色粘土ブロック少しあむ
6. 黄褐色粘土
7. 4と黒褐色粘質土ブロック少しあむ
8. 茶褐色粘土

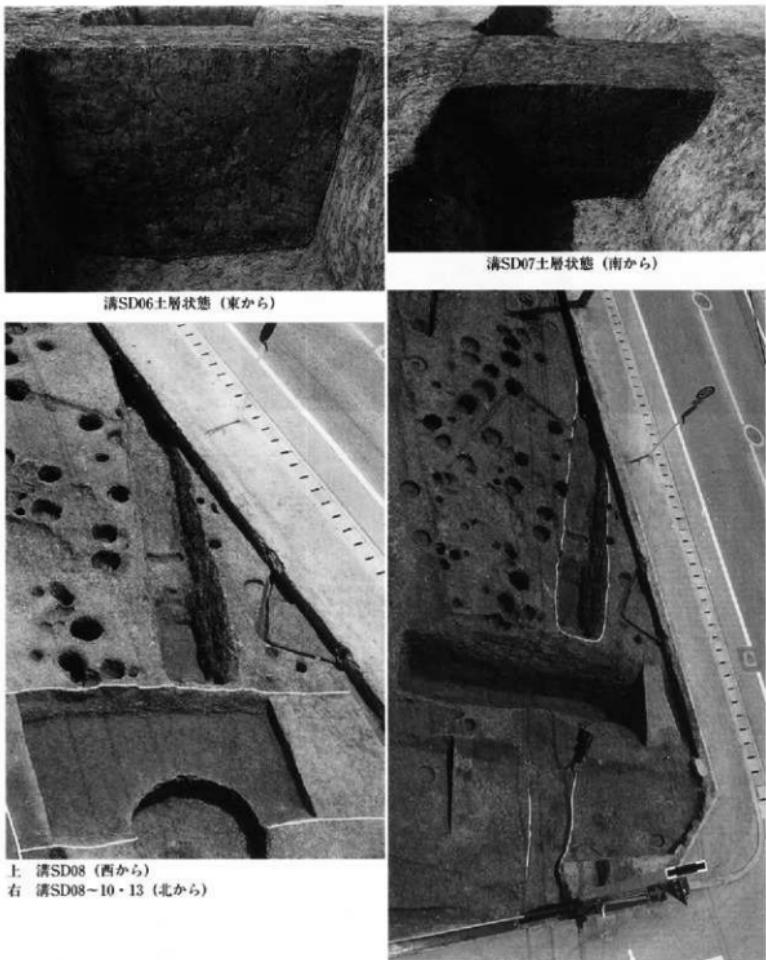
SD06土層B名前

1. 黒褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. やや茶色を帯びた黒褐色粘質土(地山ブロック)
4. やや茶色を帯びた黒褐色粘質土(地山ブロック)
5. 黑褐色粘質土。地山ブロックを多量に含む
6. 黄褐色粘土。黒褐色粘質土を含む

SD07土層名前

1. 黒褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 1にやや黄色の地山ブロック含む
4. 1に地山ブロック含む
5. 黄褐色粘土
6. 暗褐色粘土。1に地山ブロック多く含む
7. 茶褐色砂質土

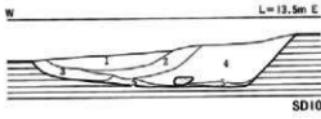
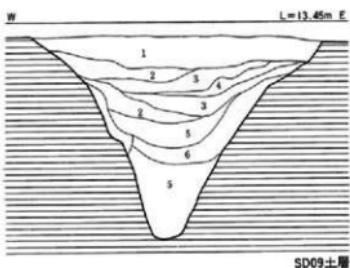
Fig. 86 溝SD06・07実測図 (縮尺1/40)



面の幅は130cm、底面の幅は75cm、深さ63cmを測る。溝SD09を挟んで西側にある溝SD13は主軸方向が同一方向であるので、陸橋を挟んだ同一の溝と考えられる。

覆土は黒褐色粘質土を主体としている。覆土から須恵器壺蓋が出土している。奈良時代の遺構と考えられる。

SD09 (Fig. 87) 調査区の南西側境界に位置しており、大略南北方向の溝である。溝SD02の西側肩に

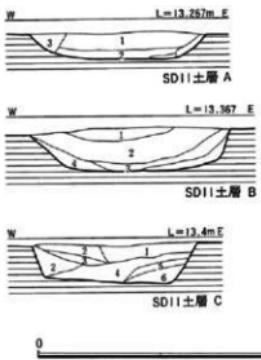


SD09土層名

- 堆高褐色粘土
- 黒褐色粘土(茶色が強い)
- 褐色粘土に黒褐色粘土混入
- 褐色粘土に黒褐色粘土混入
- 2より褐色(木炭・木炭片混入)
- 褐色粘土
- 2より明るい褐色土含む
- 3に褐色土ブロック含む

SD10土層名

- 明褐色粘土に黒褐色粘土が混入
- 褐色粘土間に黒褐色粘土混入(木炭片等含む)
- 褐色粘土に黒褐色粘土混入
- 2より褐色(木炭・木炭片混入)
- 褐色粘土



SD11土層A名

- 堆高褐色土
- やや黄褐色土
- 褐色粘土
- 褐色粘土に地山ブロック含む
- 地山

SD11土層C名

- 堆高褐色粘土
- 2より暗い 黑褐色土の粒子多く含む
- 2より明るい 黑褐色土の粒子多く含む
- 1と褐色土の混合土
- 黄褐色粘土

Fig. 87 溝SD09-11実測図 (縮尺1/40)



溝SD11（北から）

接して終わっているが、溝SD13、井戸SE15を切っている。長さ7.3mまでを確認した。断面形はV字形を呈し、溝上面の幅は260cm、底面の幅は22cm、深さ168cmを測る。覆土は暗い褐色粘質土、又は茶褐色粘質土を主体としている。土師器皿・环、瓦質土器火舎、石器が出土した。

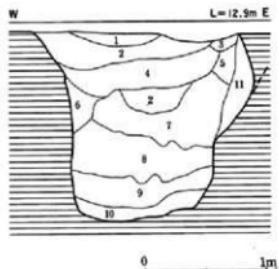
溝SD02と同じ時代の遺構と考えられ、第78次調査のSD01溝が接続するものと推測できる。

SD10 (Fig. 87) 調査区の西南側隅に位置している。溝SD02-13に切られている。長さ8mまでを確認した。大略南北方向の溝である。断面形は逆梯形、又は舟底状を呈し、底は平坦ではない。溝上面の幅は210cm、底面の幅は150cm、深さ42cmを測る。

覆土は暗い褐色粘質土を主体としている。覆土からは土器の細片等が出土した。遺構の時代は不明である。

SD11 (Fig. 87) 調査区の東側に位置しており、方形に区画した溝である。溝SD02-03に切られており、遺存状態は悪い。この溝は掘立柱建物SB01-03を切っている。東辺側の溝は、若干北側に突き出しており、現存長16.5mを測る。北辺の長さ約16m、西辺の長さ17.6m、南辺の現存長8.8mを測る。主軸方位はN7°Eにとり、掘立柱建物SB01、及び溝SD07と主軸方向を一致させている。柵SA01-02との切り合い関係は不明である。断面形は逆梯形、又は舟底状を呈している。溝上面の幅は98~118cm、底面の幅は90~75cm、深さ22~38cmを測る。覆土は暗い茶褐色粘質土、又は黒褐色粘質土を多量に含んだ褐色粘質土を主体としている。覆土から土師器ヘラ切り底の皿・瓶片、須恵器円面鏡・鏡片、青磁碗等が出土しており、平安時代の遺構と考えられる。

SD13 (Fig. 82) 調査区の西南側境界に位置し、溝の東側を井戸SE15に切られている。大略東西方向の溝で、溝SD08と同一方向である。長さ3.2mまでを確認した。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の最大



SD14土層名表
 1.茶褐色粘質土(しまり弱い)
 2.暗褐色土に黄褐色粘質砂粒子含む(しまり弱い)
 3.茶褐色粘質土
 4.黄褐色土に黄色褐色粘質粒子含む(しまり弱い)
 5.-6.よりやや茶色澄びる黄褐色粘土大ブロック含む
 6.-7.同上
 7.茶褐色土に黄褐色土ブロック、赤褐色土ブロック含む
 8.茶褐色粘質土に黄褐色土ブロック含む
 9.暗褐色粘質土に褐色土粒子混入
 10.暗褐色粘質土
 11.茶褐色粘質土

Fig. 88 溝SD14実測図 (縮尺1/40)



溝SD14 (南から)



溝SD14 土層状観 (南から)

幅は120cm、底面の幅は80cm、深さ14cmを測る。覆土は暗い褐色粘質土、又は暗い茶褐色粘質土を主体としている。覆土から土師器へラ切り底の皿・环・青磁碗等が出土しており、古代の遺構と考えられる。

溝SD08とSD13の間には井戸SE15と溝SD09が切り込んでいるため不明確な部分もあるが、溝SD08とSD13は元来は同一の溝で、方形区画をする溝と考えられる。SD08とSD13の間は陸橋部分と見做すことができる。

SD14 (Fig. 88) 調査区の北西側境界に位置しており、全体形は不明である。大略南北方向の溝である。溝SD03と切り合っているが、先後関係は不明である。また、境界地にあるため西側の壁の検出が明確にできていない。断面形は壁がやや膨らんだ逆梯形と考えられ、下位は壁が立っている。溝上面の幅は180cm、底面の幅は95cm、深さ156cmを測る。覆土は暗い褐色粘質土、又は暗茶褐色粘質土を主体としている。覆土からの遺物は土器の細片であった。

この溝は戦国時代の遺構で、第78次調査のSD01、又は第82次調査のSD01が接続するものと考えられる。

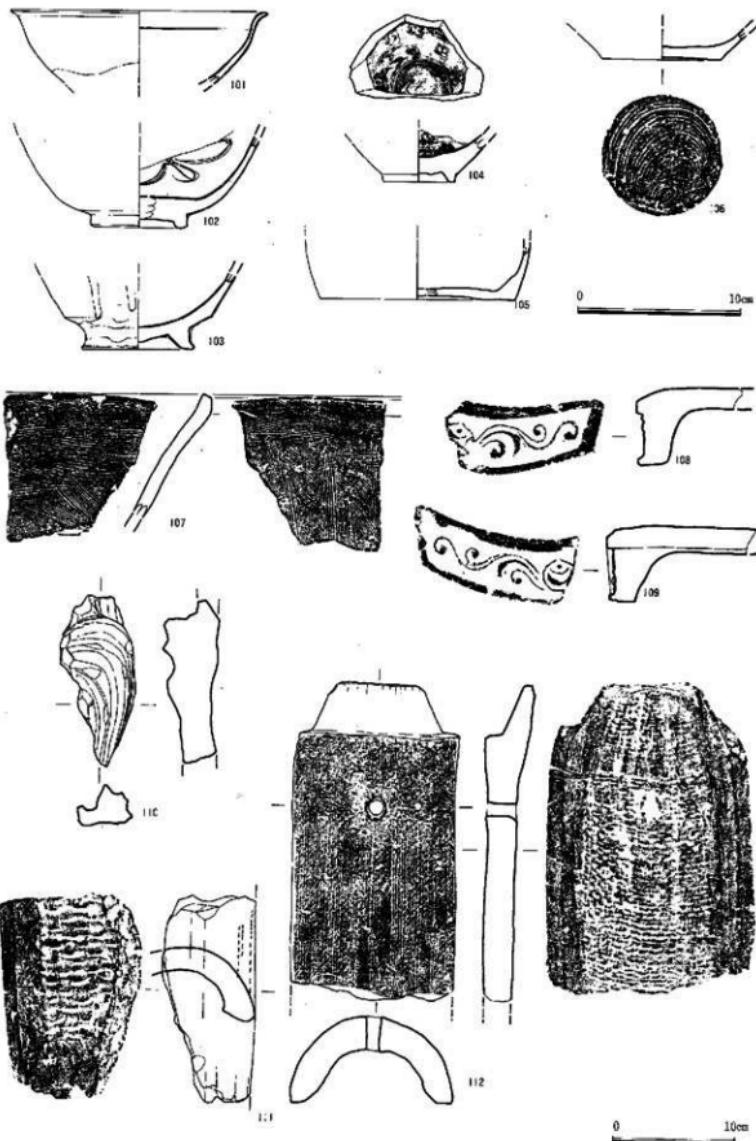
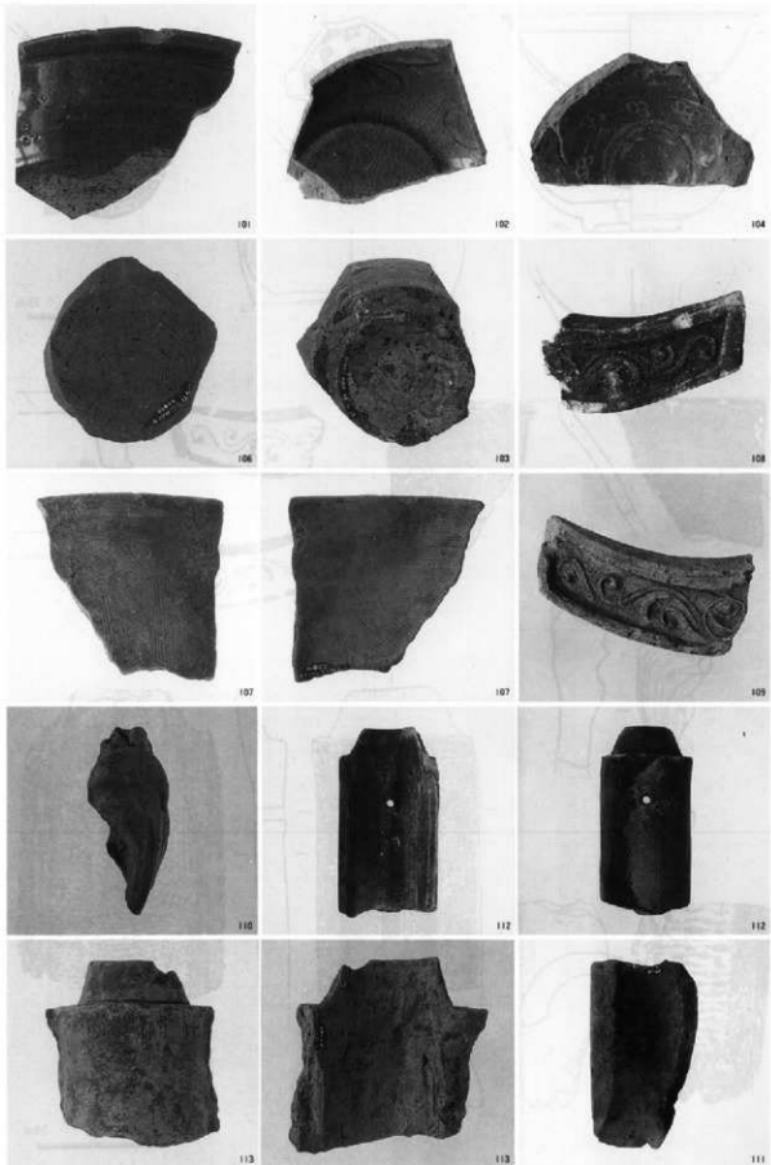


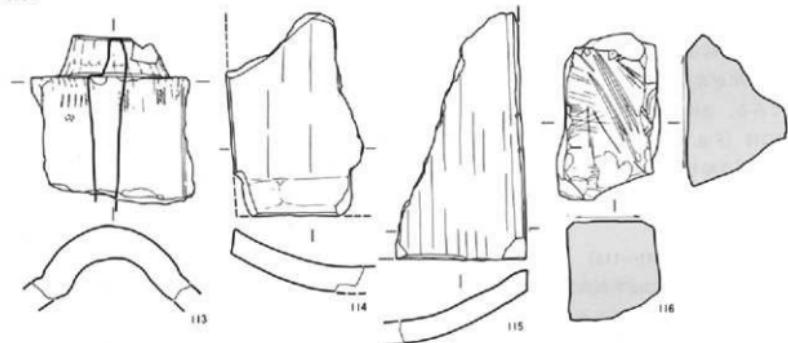
Fig. 89 濟SD01出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/4)



溝SD01出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

SD01



SD02

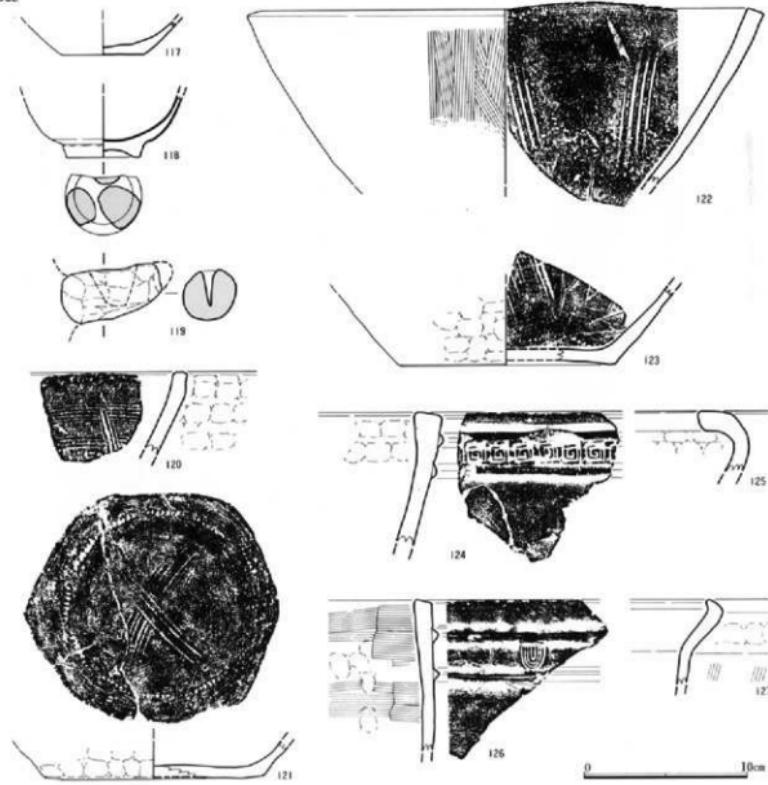


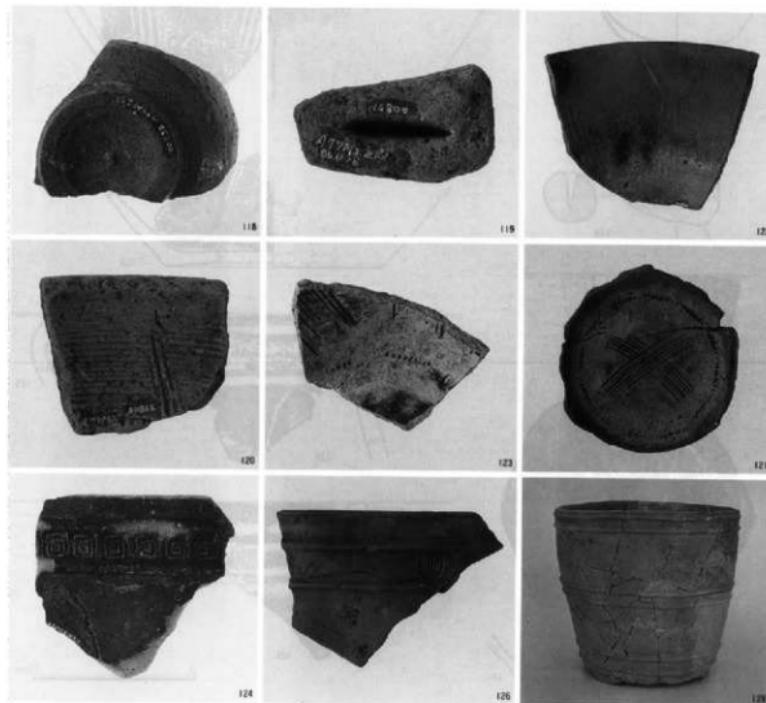
Fig. 90 漢SD01・02出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SD15 (Fig. 82) 調査区の東南側境界に位置し、溝SD06と切り合う。大略南北方向の溝で、長さ2.6mまでを確認した。幅の狭い溝であるが、溝の中には住居跡SC10の周溝と同じく、溝内に径15~20cmの小小Pitが存在する。溝断面形は逆梯形を呈し、上面の幅は50cm、深さ28cmを測る。覆土は黒色粘質土である。遺物の出土はない。住居跡の周溝と考えることもできる。

SD16 (Fig. 82) 大略東西方向の溝で、溝SD01・03の西側の肩に接している。溝の長さは41.5m、断面形は逆梯形で、幅130cm、底幅は90cm、深さ18cmを測る。SD04と同じく、近世の造構であろう。

(12) 古代から近世の溝出土遺物 (Fig. 89~97)

SD01出土遺物 (101~118) 101は白磁碗V類、102は龍泉窯系青磁碗、105は中国陶器壺又は壺、104は高麗青磁碗、103は李朝陶器碗、106は土師器で、糸切り底の环、107は土師質土器の鍋である。108・109は軒平瓦である。瓦当面の文様は、宝珠形の中心筋りに唐草文を配している。108・109は同窓と考えられる。110は鬼瓦片で、耳の部分であろう。111・112は丸瓦で、谷部は粗目の布目痕があり、背部には繩目の叩き痕がある。111の背部は丁寧なナテ調整を行なう。112には釘穴がある。111の煙は黒色を呈しているが、112は甘い。113は伏間瓦で、谷部はヘラ削り調整を行い、背部は繩目叩きの後、ナテ調整を行なっている。114・115は平瓦で、谷・背部共にナテ調整である。116は砥石である。



溝SD02出土遺物

■数字は実測図の番号に一致する

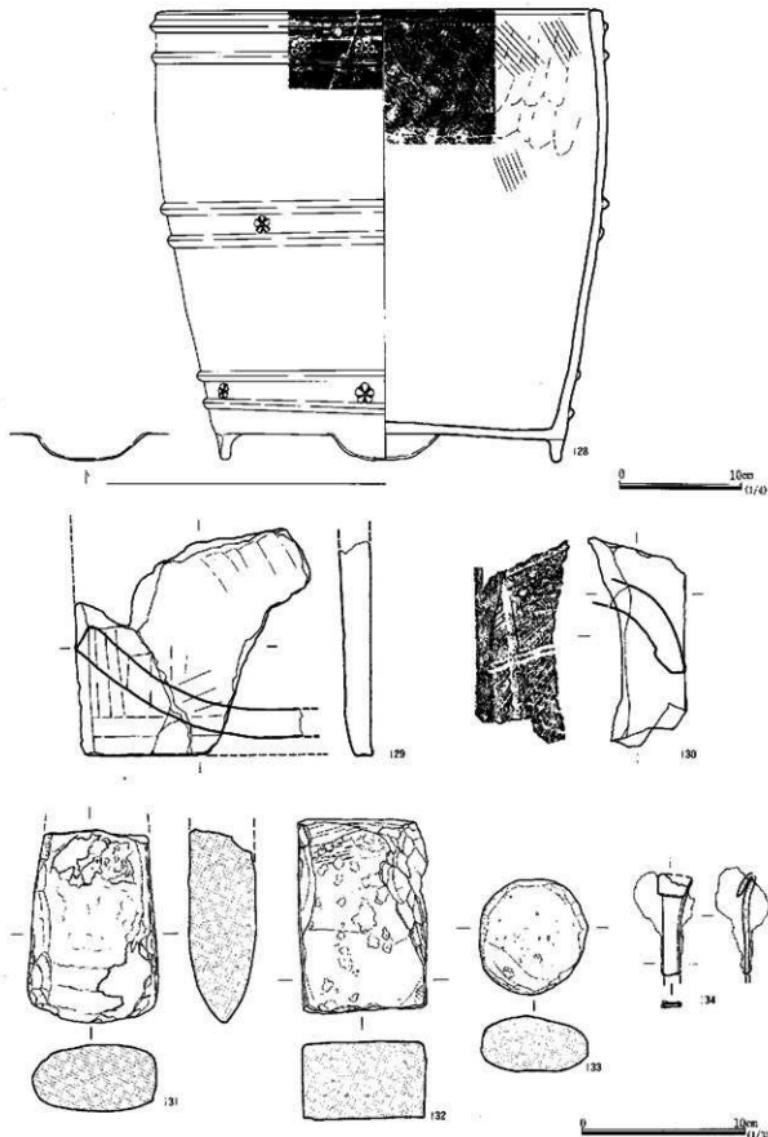


Fig. 91 漢SD02出土遺物実測図① (縮尺1/3・1/4)

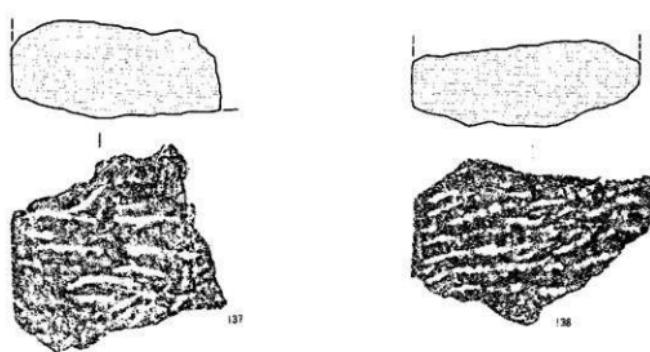
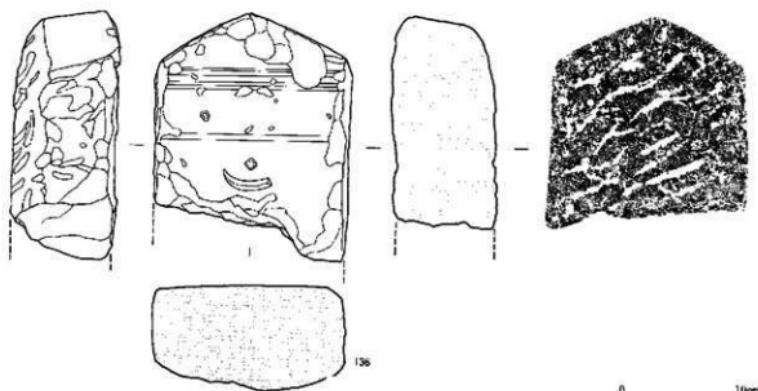
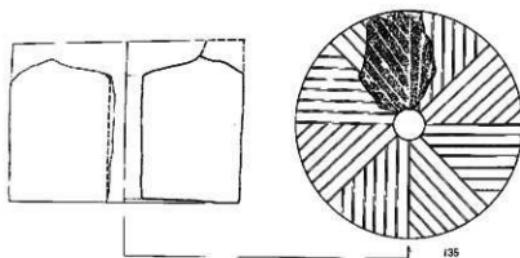
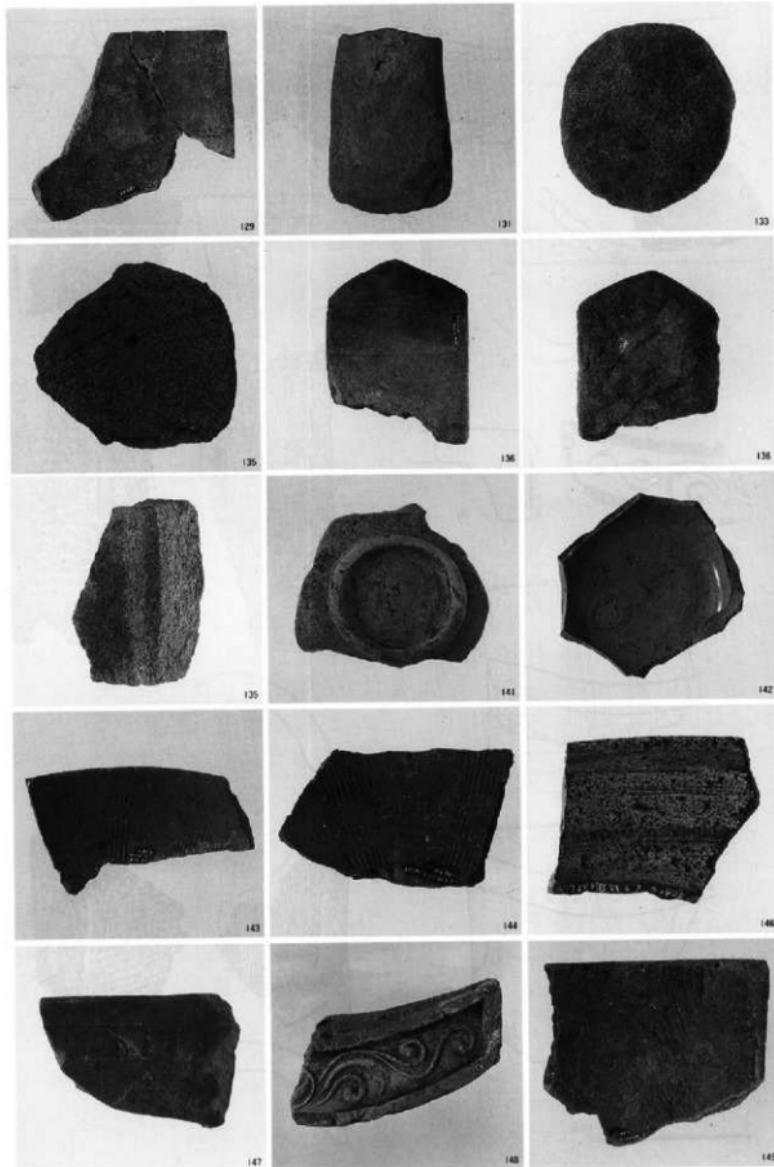


Fig. 92 滇SD02出土遗物实测图② (缩尺1/4)



溝SD02・03出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

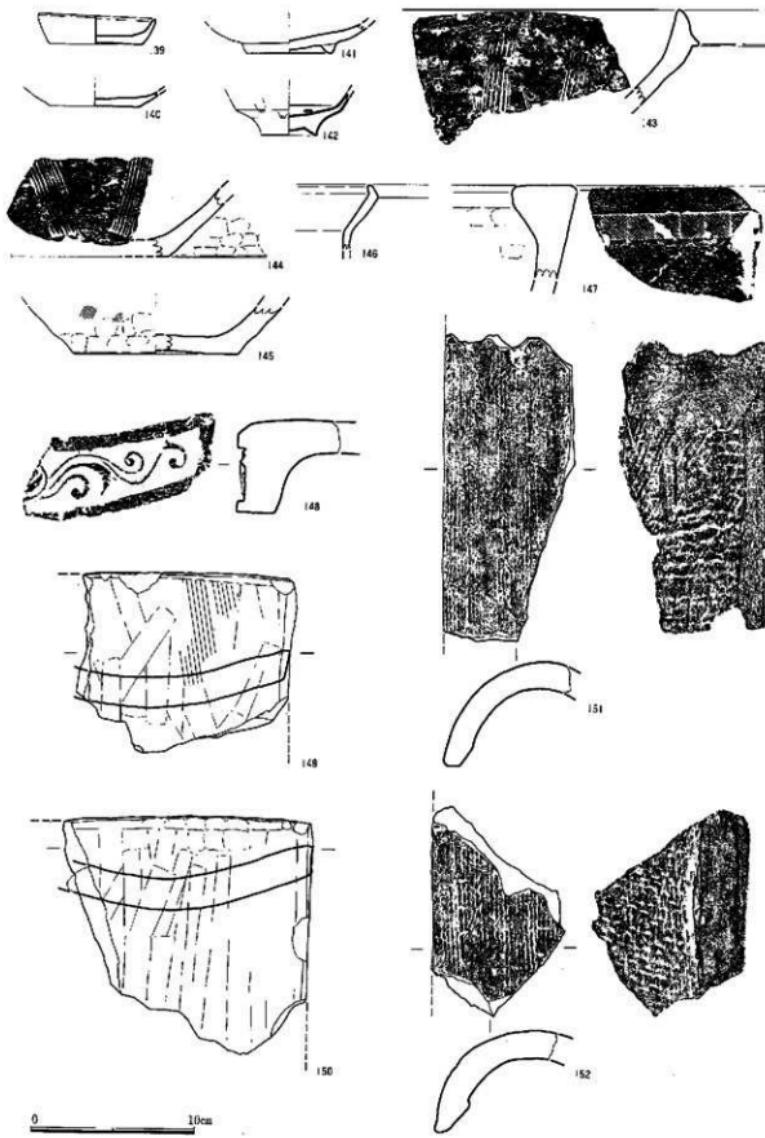


Fig. 93 溝SD03出土遺物実測図① (縮尺1/3)

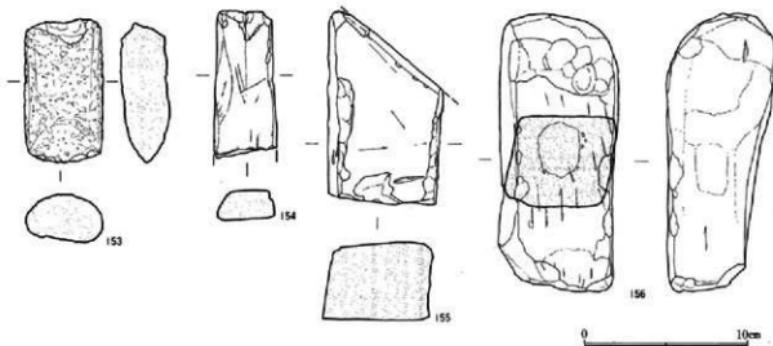
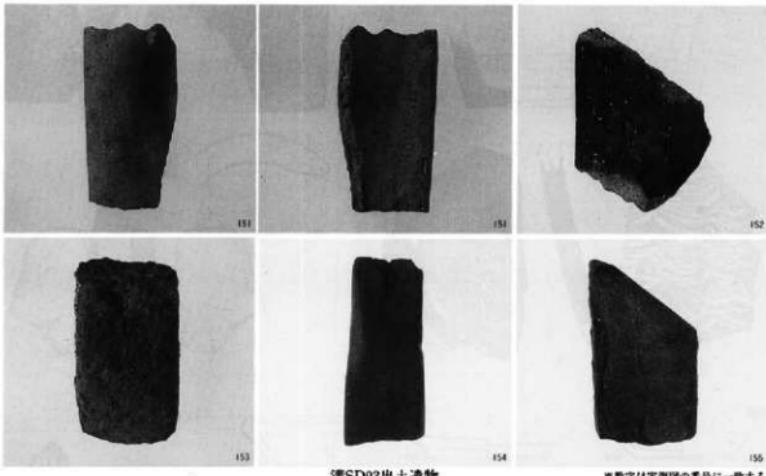


Fig. 94 溝SD03出土遺物実測図② (縮尺1/3)



溝SD03出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

SD02出土遺物 (117~138) 117は土師器で、糸切り底の壺、118は唐津焼碗(李朝か)である。119は土師器の櫃の把手で、上部に縦長の溝を切っている。120は土師質土器の摺鉢である。121~128は瓦質土器で、121~123は摺鉢、124~126・128は火舎である。121の内面は使用による磨滅が著しい。128は完形品で、上・中・下位の3ヶ所に2重の三角突帯を巡らし、各々の突帯間には梅鉢文をスタンプしている。127は足鍋片である。129は平瓦、130は丸瓦で、煙は甘い。131~133、135~138は石製品である。131は玄武岩製の石斧、132は砥石、133は敲石である。135は粉引白の上白で、中央に軸孔がある。上縁は欠損し、上部くぼみの底面は傾斜をもっている。136~138は板碑片である。136は頂部・額部と塔身の一部を残しており、塔身部には梵字が刻まれる。莊嚴点と涅槃点の一部が残っており、大日如

米（胎蔵界アーンク・金剛界バーンク）と思われる。137・138は板碑の一部である。134は鉄製の釘と考えられる。頭部は折り曲げている。

SD03出土遺物 (139~156) 139・140は糸切り底の土師器で、139は皿、140は壺である。141は瓦器檜で、断面三角形の高台を有している。142は唐津焼碗で、内底と疊付に日痕がある。143・144は備前焼の摺鉢で、143はIV期に属する。145~147は瓦質土器で、145は鉢、146は足鍋、147は火合である。147の外面上位に筋違い文を連續押印している。148~152は瓦類である。148は軒平瓦である。瓦当面の文様は宝珠形の中心飾りに、左右に均整唐草文を用いる。149・150は平瓦で、谷、背部共にナデ調整である。151・152は丸瓦で、谷部は布目痕がある。151の谷部には糸切り痕が残る。151・152の背部には

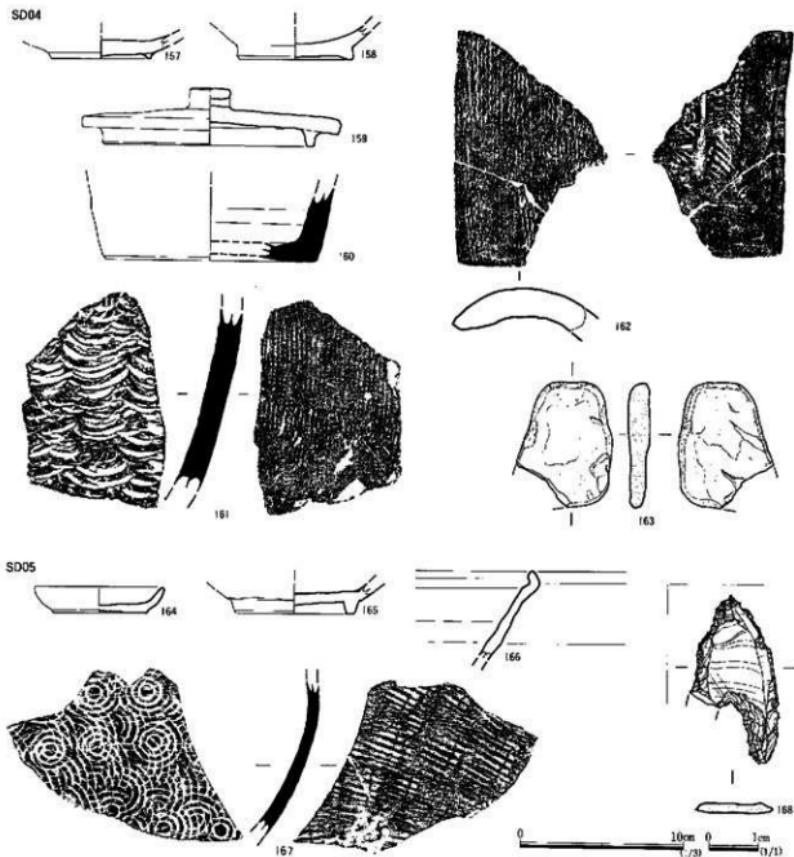
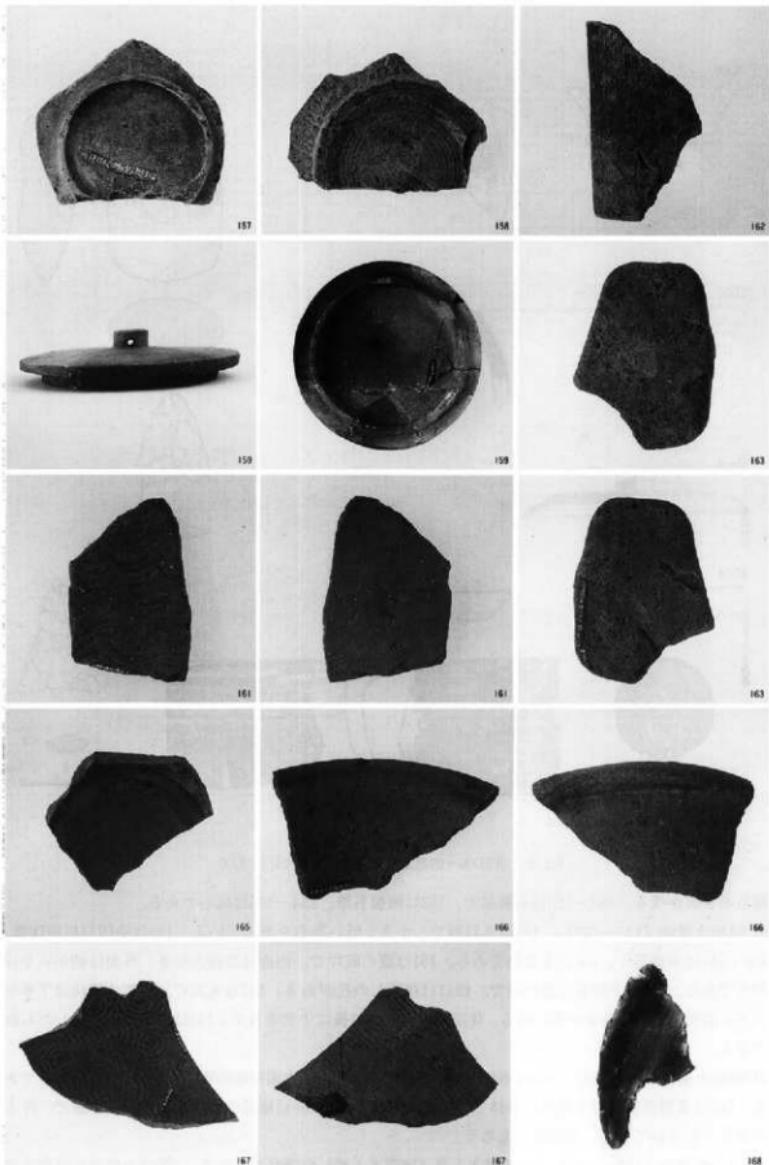


Fig. 95 濱SD04・05出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)



清SD04・05出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

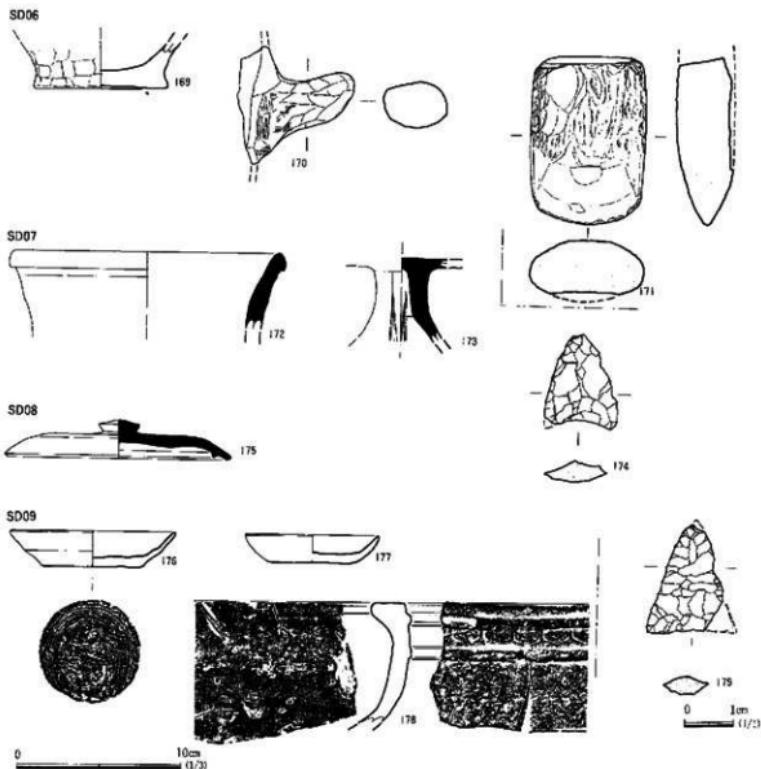


Fig. 96 漢SD06~09出土遺物実測図(縮尺1/1・1/3)

縦目叩き痕が残る。153~156は石製品で、153は磨製石斧、154~156は砾石である。

SD04出土遺物(157~163) 157は瓦器碗で、小さく低い高台を有している。158は中国白磁碗IV類、160・161は須恵器で、160は壺底部である。161は壺の破片で、内面は青海波叩き、外面は細かい平行叩きである。159は土師質土器の蓋で、鉢には紐通しの孔がある。162は丸瓦で、谷部の周縁は丁寧なケズリ調整である。糸切り痕が残る。背部は縦目叩きの後にナデを施す。163は扁平鑓を利用した石鎌である。

SD05出土遺物(164~168) 164は糸切り底の土師器皿、165は中国白磁碗VIII類、167は須恵器壺片である。166は東播系須恵質土器の片口鉢で、魚住窯であろう。168は縦長の削片を用いた削片鎌で、片方のかえりを欠いている。未製品であろう。

SD06出土遺物(169~171) 169は繩文土器(突帯文土器)の壺底部である。170は土師器の壺把手で

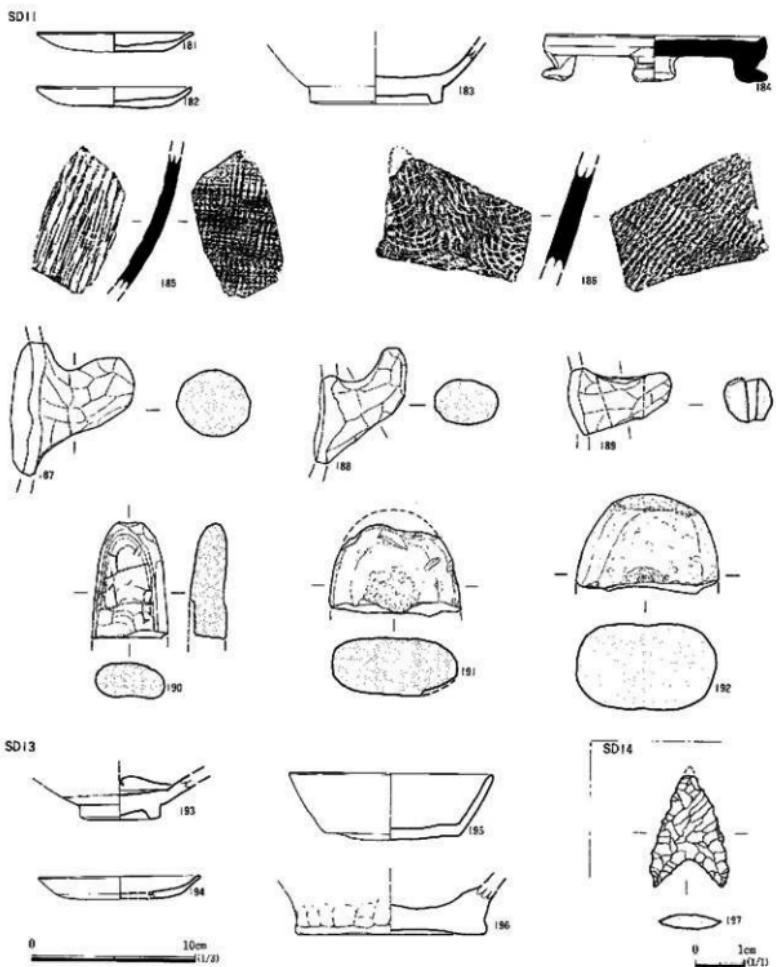
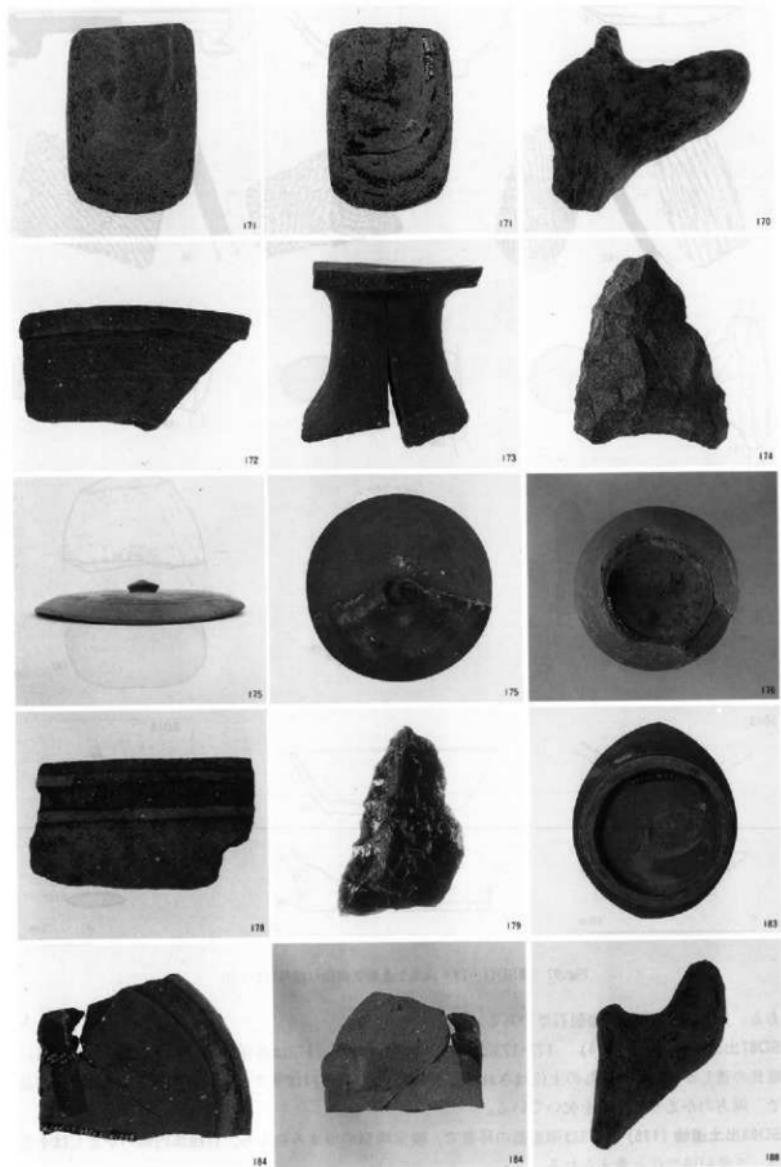


Fig.97 溝SD11・13・14出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)

ある。171は玄武岩製の磨製石斧である。

SD07出土遺物 (172~174) 172~173は須恵器で、172は甌、173は高环の脚である。脚には3ヶ所に縱長の透しがあるが、透しの上位はきれいに切れていない。174はサヌカイト製の石鏡である。未製品で、両方のかえりの先端を欠いている。

SD08出土遺物 (175) 175は須恵器の环蓋で、擬宝珠形のつまみをもち、口縁部内側のかえしは小さい。7世紀後半代と考えられる。

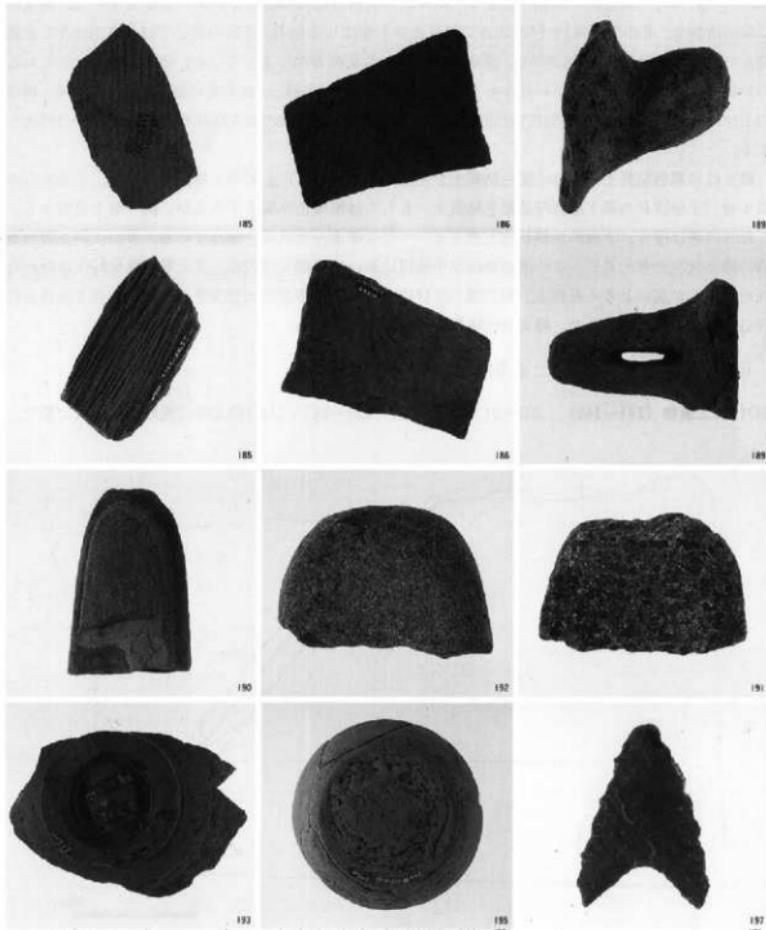


溝SD06-11出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

SD09出土遺物 (176~179) 176・177は糸切り底の土師器で、176は壺、177は皿である。178は瓦質土器の火舎で、外面に2条の突帯を貼り付け、その間に半截した亀甲文のスタンプを行っている。179石鑿で、黒曜石である。片方のかえりを欠いている。

SD11出土遺物 (181~192) 181・182はヘラ切り底の土師器皿である。183是中国越州窯系の青磁碗で、内底と疊付に目痕がある。184~186は須恵器である。184は円面硯で、獸足状の4脚を有している。硯部の縁の立ち上がりは小さく尖っている。185・186は甕片で、185の内面は平行叩き痕、186の内面は同心円状の叩き痕である。187~189は土師器で、瓶の把手である。189は細形に穿孔している。



■番号は実測図の番号に一致

190～192は石製品で、190は石斧である。191・192は敲石、もしくは凹石で、いずれも半分を欠いている。192の両面には敲打による凹みがある。

SD13出土遺物（193～196） 194・195は土器器で、194はヘラ切り底の皿、195はヘラ切り底の壺である。193は中国同安窯系の青磁碗、196は陈生土器の甕底部である。

SD14出土遺物（197） 197は石鏡で、サヌカイトである。

(13) 繩文時代の溝 (SD)

SD12(Fig.100) 調査区の東側に位置し、南東から北西方向に調査区を斜めに横断している。南東側は第87次調査、北西側は第18・56次調査で延長部分を確認している。今回の調査では長さ34mまでを確認した。溝の主軸方位はN55°Wで、溝底は南東側から北西方向に下っている。徐々に深くなっているので排水溝的な役目をもっていたかもしれない。断面形はV字形、一部箱築研掘りを呈している。西壁の上位から中位においてはPit状の凸凹が著しく存在する。溝上面の最大幅は310cm、深さ175～195cmを測る。

覆土は黒褐色粘質土、又は暗褐色粘質土を主体としている。Fig.97の上層図でみると、土層図Aの第1層、土層図Bの第1層は暗茶褐色粘質土、もしくは黒褐色粘質土であるが、同一層と見做せる。これらの層は厚く、下層の堆積状況と違って、一度に埋まった状況を示している。第87次調査等の遺物の出土状況を考えると、この溝の埋没が中層においては縄文時代に、又上層は弥生時代に埋められた可能性が高いと考えられる。特に溝の中位において、突堤の大型深甕と小型甕が各1箇所分投げ込まれた状態で出土した。縄文時代晚期の遺構と考えられる。

(14) 繩文時代の溝出土遺物 (Fig.101～103)

SD12出土遺物（201～248） 201～211・216～237・239～241・244は縄文時代晚期の夜白式土器で、

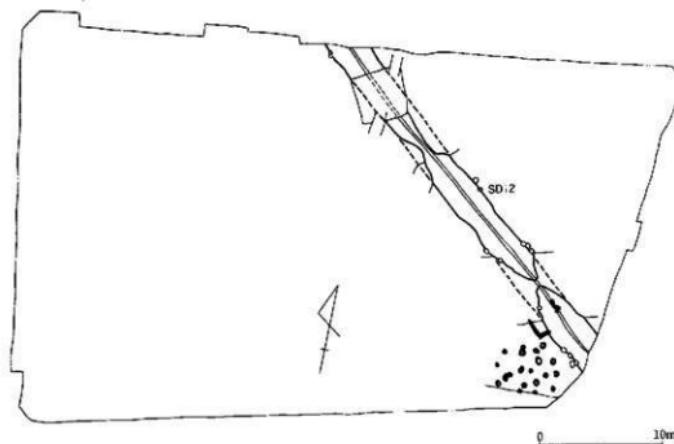


Fig.98 溝SD12配置図 (縮尺1/400)

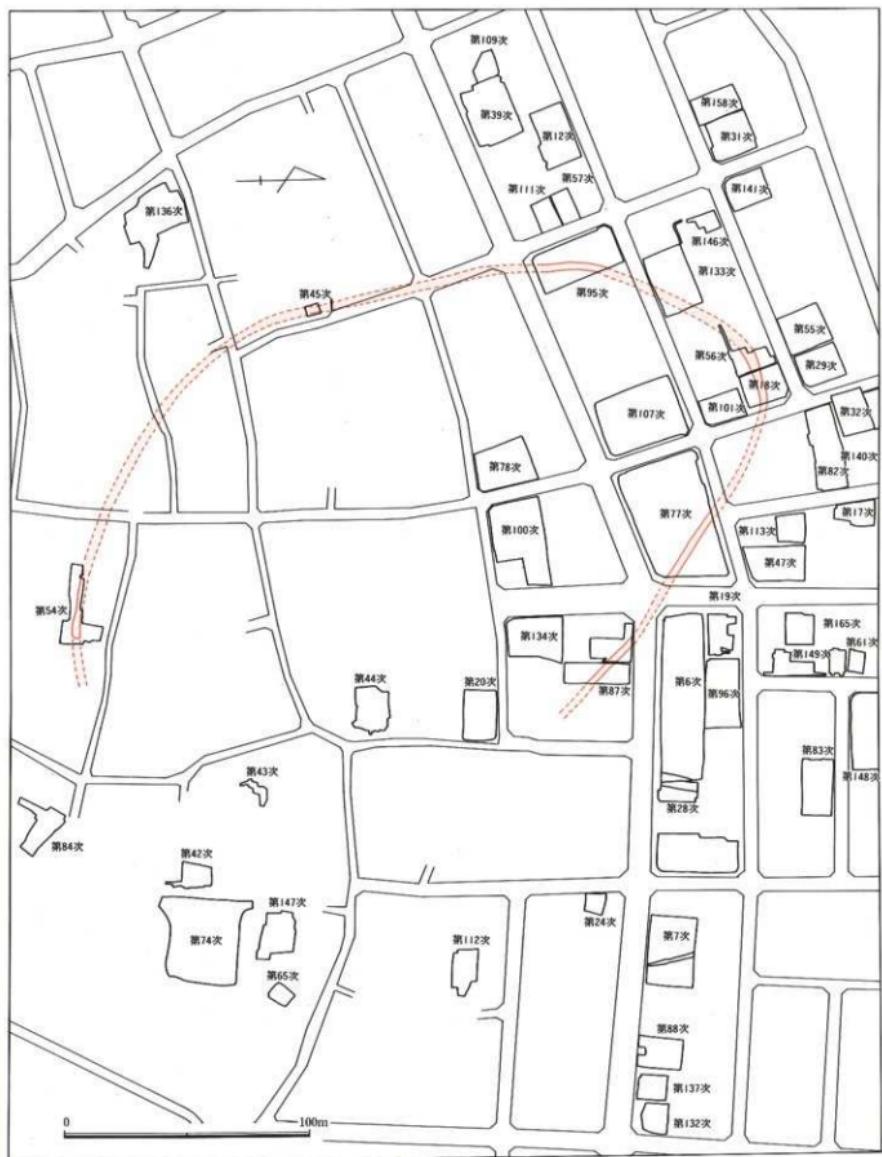


Fig. 99 環濠配置図（縮尺1/2,000）

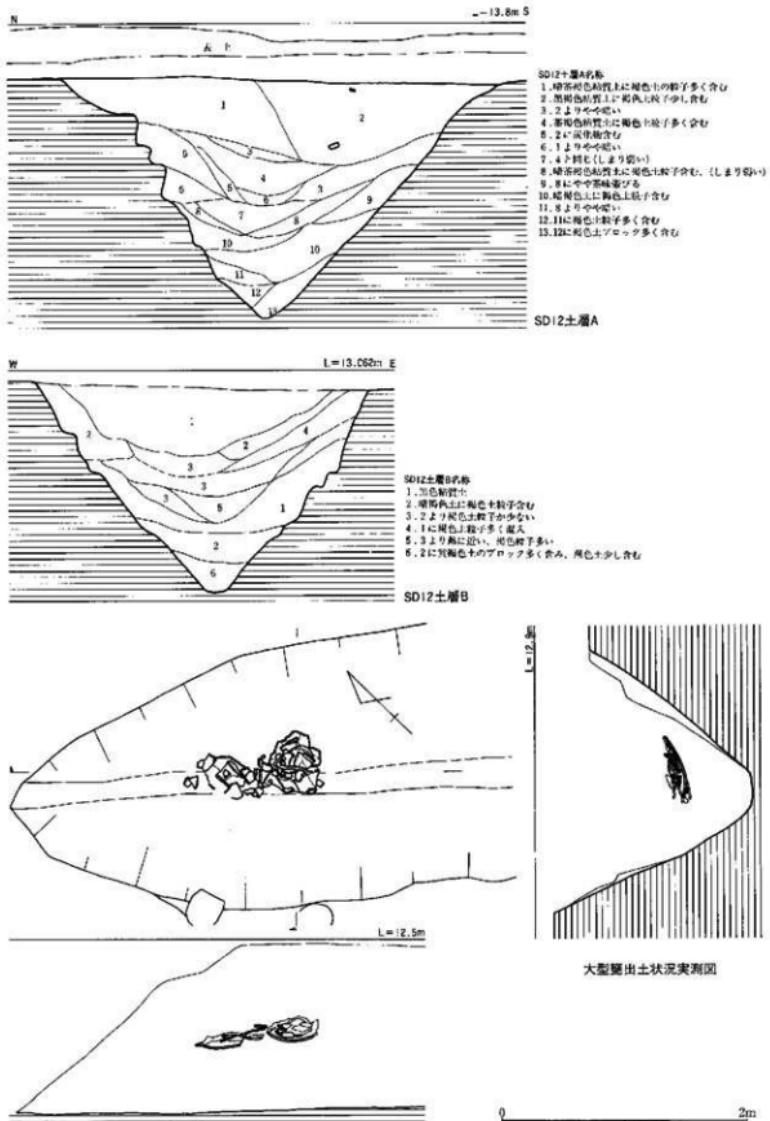


Fig. 100 溝SD12土層図・大型窯出土状況実測図 (縮尺1/40)



溝SD12（東から）

溝SD12（北西から）



溝SD12裏出土状態（西から）



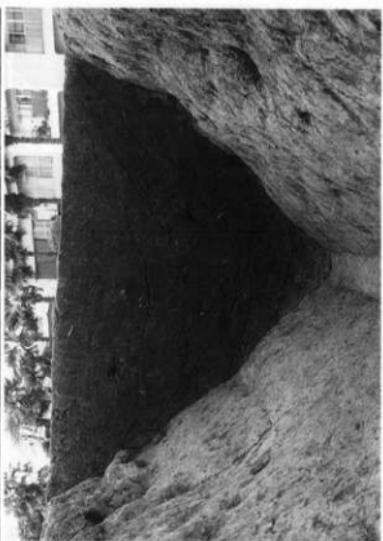
溝 S D 12 大型甕出土状態（西から）



溝 S D 12 大型甕出土状態（北から）



溝 S D 12 土層状態（西から）



溝 S D 12 土層状態（南から）

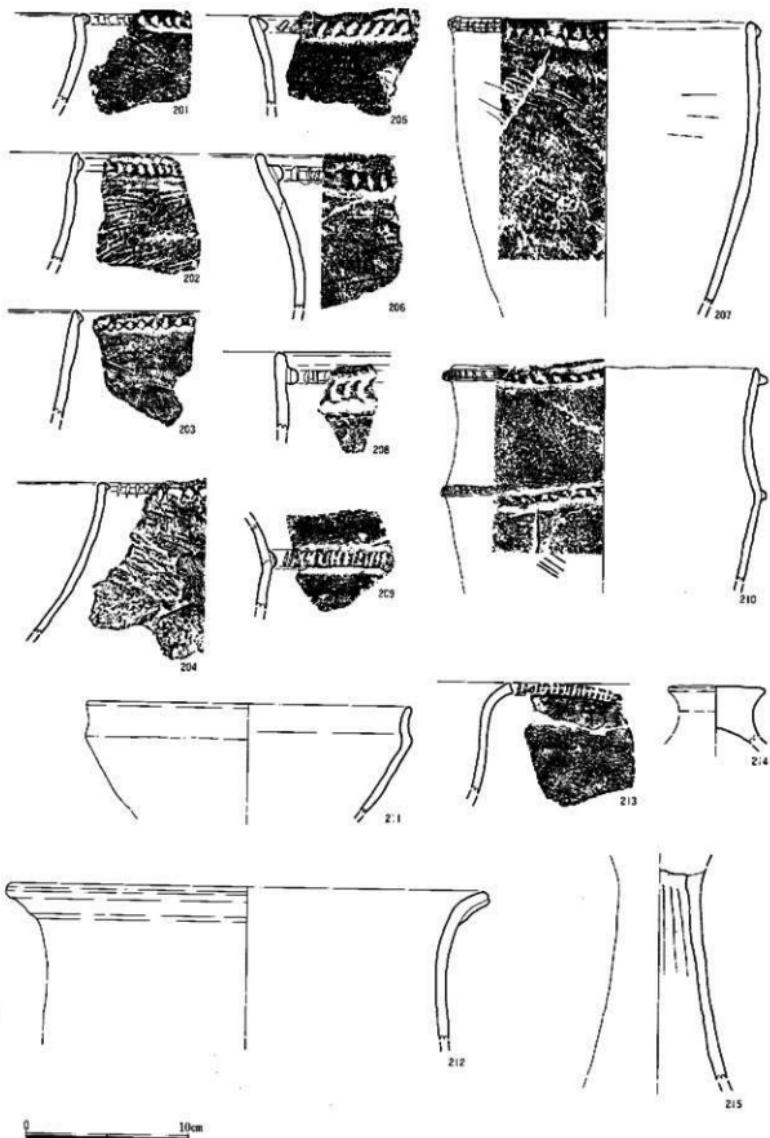


Fig. 101 溝SD12出土遺物実測図① (縮尺1/3)

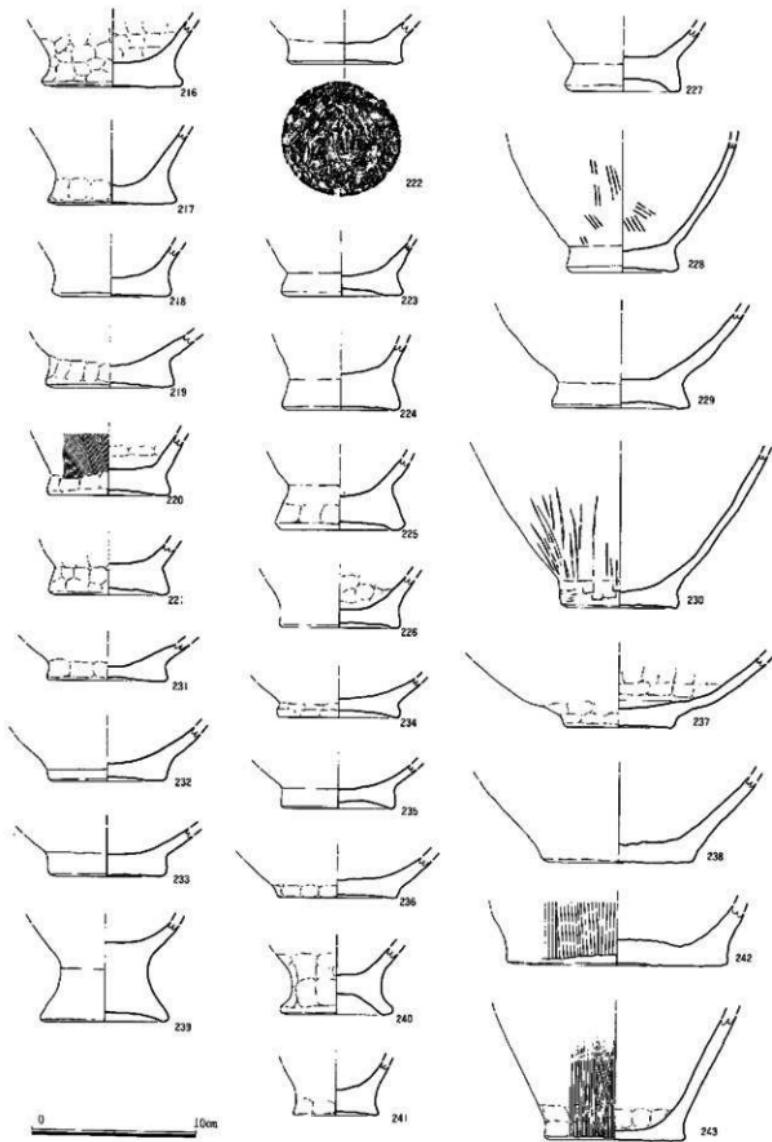
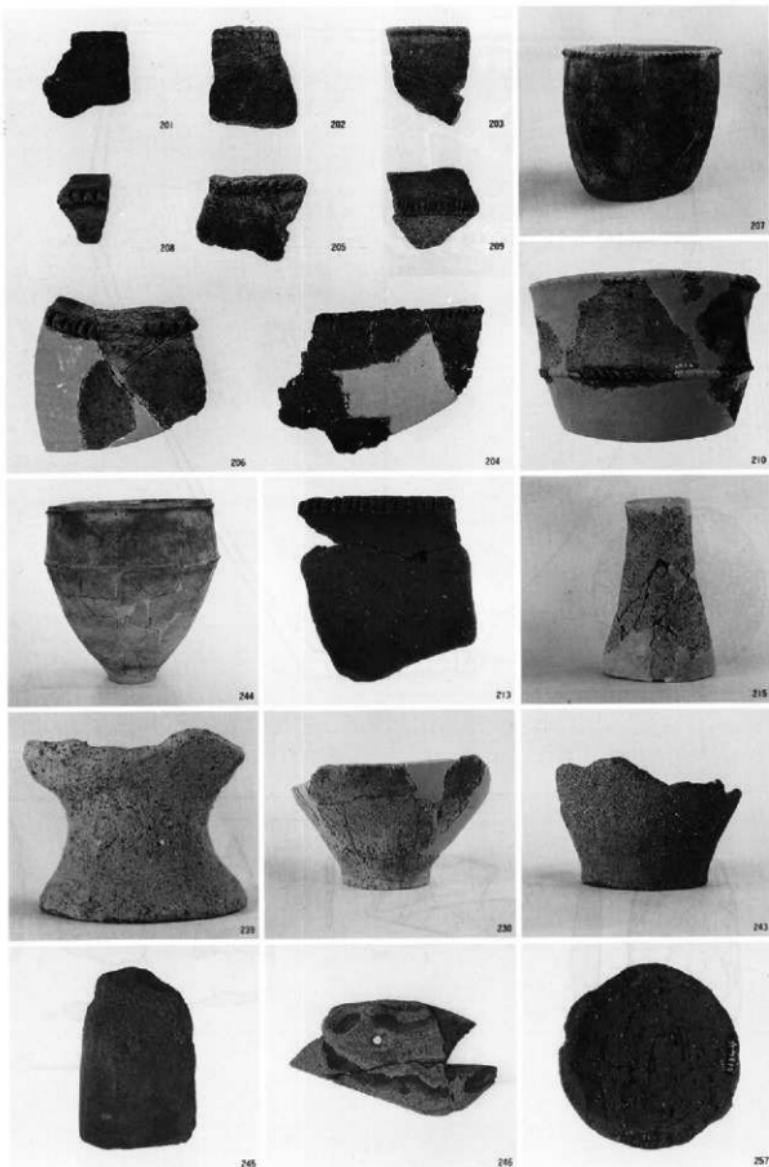


Fig. 102 漢SD12出土遺物実測図② (縮尺1/3)



溝SD12出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

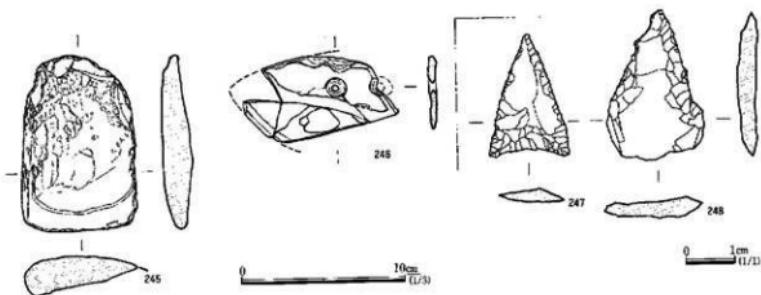
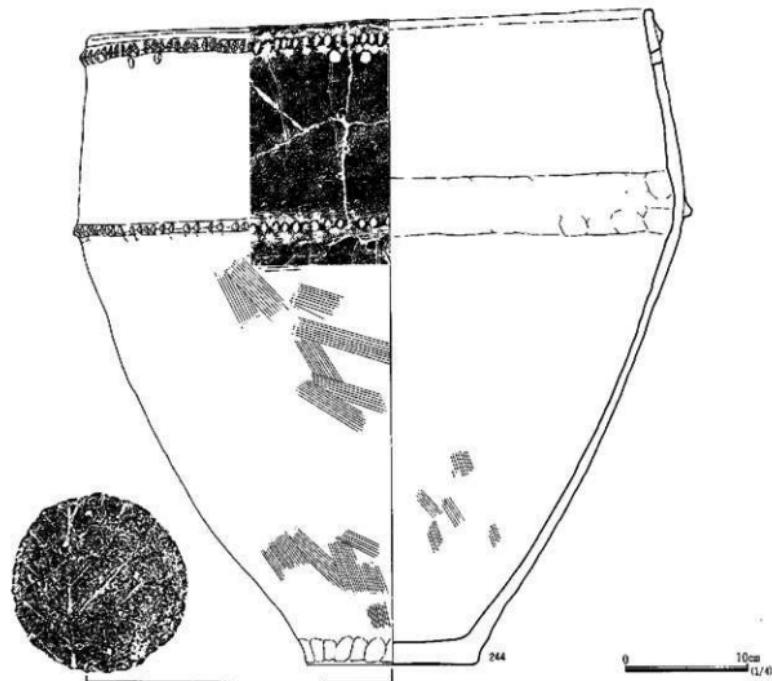


Fig. 103 清SD12出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3・1/4)

201~208は甕の口縁部、216~230・239~241は甕の底部、231~237は壺、又は鉢の底である。201~208は体部が丸味をもち、口縁部に刻目突帯を貼付ける甕で、201・205・206は口縁部が内傾する。204は器高が低く、口縁部が大きく聞く甕である。突帯は203~205・207が口唇部付近に貼付けるに対し、202・206・208は口縁部の直下にある。209・210・244はくの字形に腹部上半部を内側に屈曲させる甕である。209・244の内傾した上半部は丸味をもつて対し、210は外反している。調整は内面がナデ、外面はヨコ、ナナメ方向の貝殻条痕がある。底部は上げ底で、216~220・223・228・229のように端部が外へ強く張り出したものや、221・224・225のように前者よりも器壁が厚くなるもの、又、222・226・230のように端部が外へ余り張り出さないものがある。239・240は高台状の高い底部をもつ甕である。241は小型の甕である。211は鉢で、胸部の上位で屈折し、口縁部は外反している。231・234・235が底部と考えられる。231・232・233・236は壺型土器である。232・236・237は上げ底である。212~215・238・242・243は弥生上器で、212は大型壺、213は口唇部に刻目を施した甕、214は蓋、215は高杯の脚、242・243は甕の底部である。

245~248は石器である。245は玄武岩製の磨製石斧、246は石庖丁である。石庖丁の背部は弯曲している。247・248は剥片鎌で、248は木製品である。248は横長の剥片を用いており、基部・かえりができていない。

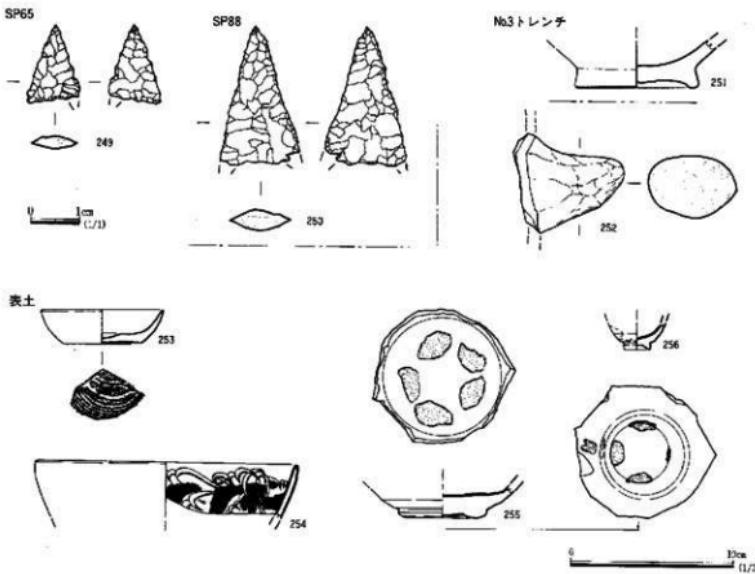
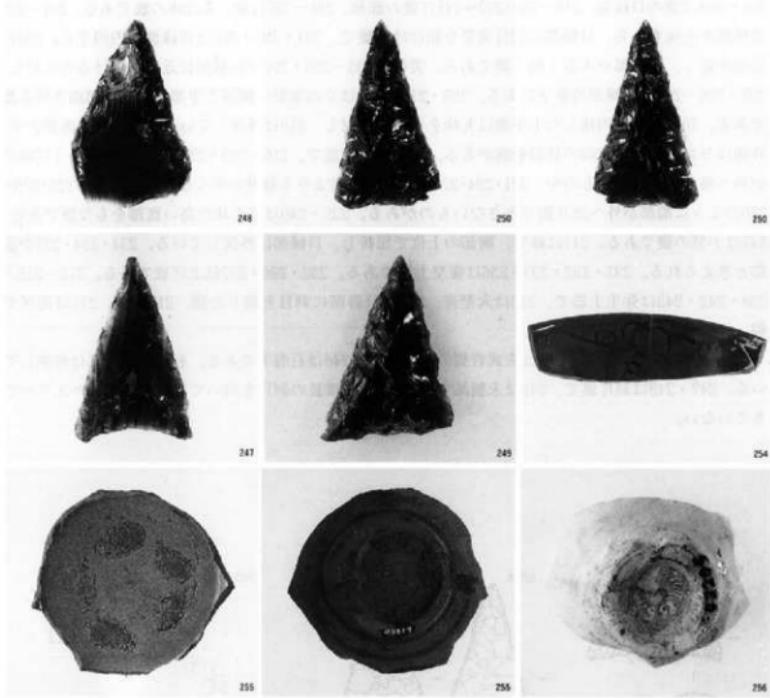


Fig. 104 SP65・88、No. 3 トレンチ、表土出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)



溝SD12・Pit66・88・表土出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

(15) その他の出土遺物 (249~256) (Fig.104)

SP出土遺物 (249、250) 249はSP65、250はSP88出土である。いずれも打製石器で、石材は黒曜石である。

No3トレンチ出土遺物 (251) 251は縄文時代晩期土器の底部である。

表土出土遺物 (252~256) 252は土師器瓶の把手で、256は国産の白磁の環である。253~255は溝の上面、又は上層から出土した。溝SD03-SD04から切られており、これらの覆土に含まれていたものが混入したものである。253は土師器糸切り底の皿、254は中国青磁の同安窯系の碗、255は唐津焼碗である。内底と疊付に砂目がある。

3.まとめ

今回の調査では縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物を検出した。昭和42年の第1次調査、43年の第2次調査の2度に亘る九州大学考古学研究室の発掘調査において縄文時代終末期の環濠や、奈良時代の掘立柱建物等が検出されて以来、有田遺跡は重要遺跡として、研究者の間で注目されるに至った。しかし、板付道路が早くから日本考古学会の注目を浴び、発掘調査の進展と共に史跡保存化されたことは対照的に有田遺跡は区画整理事業を契機として市街化へ進み、近年までこれらの縄文時代や奈良時代の遺構についての調査は進展がみられなかつた。当該調査地の周辺地域は有田台地においても最高所でもあり、又、開発を進めるのに有効な平坦地形をなしている一方で、宝見・原・橋本地域へ至る交通の要衝でもある。50年代の後半において、この地域は集中的に開発が行われており、今回の第77次調査の対象となった開発もこの1例である。

当該調査で検出した遺構は、大別するとⅠ期は縄文時代晩期、Ⅱ期は古墳時代、Ⅲ期は奈良～平安時代、Ⅳ期は鎌倉時代、Ⅴ期は戦国時代、Ⅵ期は江戸時代となる。

Ⅰ期は縄文時代晩期の遺構で、溝SD12・住居跡SC10が相当する。住居跡SC10は溝SD12に切られ、また、削平のため出土遺物はない。溝SD12は東南方向では第87次調査、北西方向には第18・56次調査、西方向には第95次調査において延長部分を検出しており、第54次調査例等を加えると南北300m、東西200mを測る規模をもつ環濠が推定できる。また、この環濠が台地の中央を取り巻くように廻るのではなく、台地西側に開削した浅い谷を廻る状態にあることは、板付遺跡の環濠と比べ特徴的な点である。今まで、この環濠内において同時期の遺構は存在しない。溝の時期については、種々論議されるところであったが、今回の調査において、上層では弥生土器が混入するものの、中層以下においては突堤式土器である夜臼式土器単純層であることが判明した。同様なことは第87次調査において観察できている。第87次調査で検出した1号溝は既に九州大学考古学研究室の第1次調査によって発掘されており、土層用に残されたベルトを発掘する程度であったが、ここでも上層（2～4層）は下層に比べ堆積が厚く、遺物としては弥生土器の板付I・II式を含むのに対し、下層は夜臼式土器のみであった。このことは本文でも触れたように溝の埋没の過程に違いがあると推測できる。弥生時代の或る時期まで、この溝は完全に埋まることなく、継続的に利用されていたものと思われる。この溝は第87次調査においては溝幅約2.4m、深さ1.3mの規模であったが、ここでは溝幅310cm、深さ約190cmに達し、徐々に深さを増している。第87次調査地点は台地の最高所に位置していることや、又、溝幅や深さが他の地点に比べ規模が小さいことから出入口等の施設の存在したことを考えることもできよう。

Ⅱ期の遺構は竪穴住居SC01～07、土壙SK01～03・12、井戸SE11が相当する。住居跡はいずれも長方形プランで、SC02・04を除いて両袖にベッドを有している。SC01・03～07は古墳時代初頭に比定できる。SC04は溝SD03に切られるため形状が不明であるが、庄内系土器が共伴していることが注目される。共伴の在地土器は内外面ハケ調査で、一部平底を残しているところから、弥生時代終末期の住居跡とみることもできる。SC02は須恵器が出土しており、6世紀初頭に比定できる。5世紀代以降はカマドは既に普及しており、又、主柱は4本で構成されるのが一般的であるが、SC02では主柱を確認できなかった。土壙SK02・03内からは土師器を主体として遺物が出土している。SK02には朝鮮系の須恵器が共伴し、小型鉢・丸底壺・高壺・壺・甕がセットで出土している。5世紀後半代に比定できる。SK03からは須恵器の环蓋土師器壺・高壺が出土しており、又、須恵器の調整手法の土師器壺も共伴する。6世紀前半代が考えられる。

III期は奈良～平安時代で、掘立柱建物SB01・02・03、溝SD06・07・08・11・13が相当する。溝SD07・08・13は矩形に巡る同一の溝と考えられる。溝を構成するもので、SD08とSD13の間は陸橋と見做せる。この溝と主軸方向と同じにするのが、方形区画の溝SD11と掘立柱建物SB01・02・03である。溝SD11は掘立柱建物SB01を切っており、また、出土遺物にはヘラ切り底の土師器皿や越州窯系青磁があることから11世紀代が比定できる。SD07からは平安時代の須恵器甕が、SD08からは7世紀前半代の須恵器甕蓋、SD13からはヘラ切り底の上師器皿と13世紀の龍泉窯系青磁碗が出土しており、これらからSD07、08、13溝の時期は、7世紀から13世紀の幅をもっていると考えられる。

SB01・02は同一主軸方向にあるため、同時存在が考えられる。SB01・03は互いに切り合い関係になるが、建物方向が一致することから、時期的には大きな隔たりはないものと考えられる。これらの建物は第107次調査で検出したSB01・07、第29・55次調査のSB01と主軸方向を大略一致させているところから同時期の所産と考えられる。溝SD07・08・13はこれらを囲繞する溝とも考えられる。SD13の遺物は9世紀から13世紀までの遺物が混じっているが、これは溝SD10との切り合いが調査時において不明瞭であったため13世紀の遺物が混入した懸念もある。これらの遺物の取り扱いによっては、溝SD07・08、更には掘立柱建物SB01～03の時期にかかるだけに慎重を期したい。ここではSB01～03の時期は、溝SD11に先行する遺構で、少なくとも11世紀以前の時期で、溝SD08から出土した7世紀前半の甕蓋に近い時期としたい。掘立柱建物SB01と溝SD07・08・13との関わりについても今後の検討を要する。また、この時期には土塙墓SX05が伴う。

IV期は鎌倉時代で、これには土塙墓SX08・09・13・14が相当する。従来の調査によると、この地域では土塙墓が集中的に検出されている。SX09からは糸切り底の土師器甕、SX13からは龍泉窯系鍋蓮弁文碗が副葬されていた。これら資料により土塙墓の時期はSX08・09が13世紀、SX13が13世紀の後半、SX14が12世紀に比定できる。

V期は戦国時代で、溝SD01～03・09・14が相当する。これらの溝はFig. 4に示したように矩形、もしくは直線的に連続するもので、中世城郭の曲輪を構成するものと考えられる。これらの溝が全て同時期に併存したのか、若干疑問が残るが、城の規模が広大なことから現時点での判断は行わない。時期は大略16世紀としておきたい。「筑前統風土記拾遺」によれば、有田に「堀内」という城があったことが伝えられており、これらの溝が相当するものかもしれない。

VI期は江戸時代で溝SD04・05が相当する。東西方向の溝から南北方向に分岐する溝を構成するもので、Fig. 4の旧地形図の中に示された旧道に一致している。溝SD04は溝SD02が埋まった後に重複するようにつくられているところから、中世末期の塗跡が埋設の終末過程で道として残った可能性もある。17世紀代であろう。

最後に、有田遺跡の調査は区画整理及び宅地化された地域の開発・再開発に付随して調査の対応を行っているため、調査区域が限定される。このため一ヶ所の調査では遺跡の各時代における重要遺構の全体像を見極めるのは困難である。広大なこの遺跡の各時代の全容を把握するには従来の一律的な「一把一からけ」の対応では上記の重要な課題を解明することは不可能である。従って重点地域を設定するとともに今後とも継続した調査が望まれる。

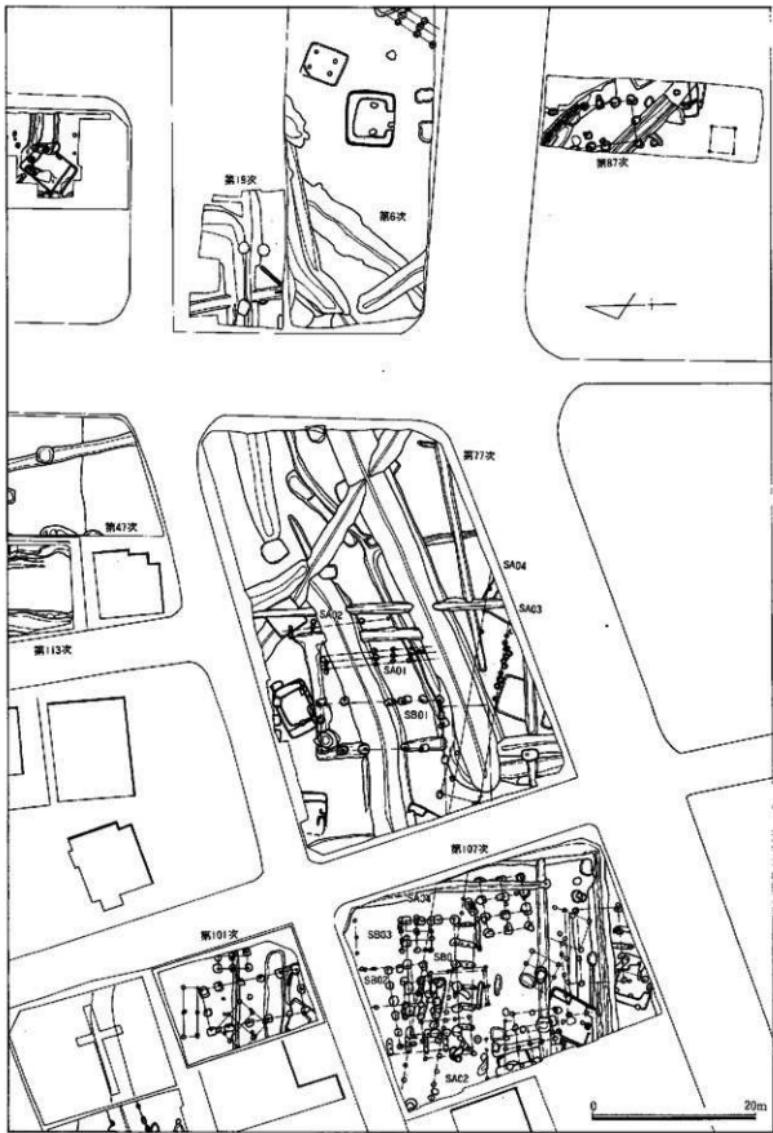


Fig.105 第6・19・47・77・101・107・113次造構配置図 (縮尺1/600)

Tab. 13 第77次調査遺構一覧表

(単位: cm)

遺構名	位置 構名	遺構類	形 態			深	出 土 遺 物	時期	備 考
			平面形	現存長	現存幅				
SK01	D1	土壠	不整圓角方形 逆傾形	178	170	18	共生土器層、土師器高环・盒・甕・罐・瓶、須恵器 鏡、壺、瓶、土瓶、瓦片、石製品玉	古墳	
SK02	D2	土壠	不整圓形 逆傾形	358	338	33	共生土器層、土師器高环・盒・甕・甕・甌、須恵器 鏡、壺、瓶、土瓶、瓦片、石製品玉	古墳	土壠 SK10と 切り合う
SK03	D3	土壠	不整圓角形 浅小瘤狀	270	242	28	共生土器層、土師器高环・盒・甕・甌、須恵器 鏡、壺、瓶、土瓶、瓦片、石製品玉	古墳	土壠 SK10に 切られる
SK04	D4	土壠	不整圓角形 浅小瘤狀	128	120	24	瓦石		
SK06	D6	土壠	不整圓角形 逆傾形	184	120	35	土師器、須恵器高环	古墳	溝 SD12と 切り合う
SK07	D7	土壠	-	-	-	-	夜日式土器層、土師器、瓦	古墳	場所不明
SK10	D10	土壠	椭円形	265	60	9	土師器蓋・甕・石製品	古墳	土壠 SK02に 切られる
SK12	D12	土壠	椭円形	158	45	18	土師器高环・盒・須恵器	古墳	溝 SD13に切 られる
SK16	D16	土壠	不整圓角方形 逆傾形	440	190	47	なし		溝 SD04に接 する
SK17	D17	土壠	不整圓角方形 逆傾形	170	69	27	なし		九州大学調査
SE11	D11	井戸	不整圓形 逆傾形	300	247	166	須恵器蓋	古墳	九州大学調査
SE15	D15	井戸	円形	210	137	84	なし		調査区南西端
SE18		井戸	小整圓角方形 輪形	326	300	177	なし	戻田	戻田井戸
SX05	D5	土壠基	四丸長方形 逆傾形	242	175	44	土師器高环・須恵器、鐵釦、鉄錐	平安	溝 SD04に接 する
SX08	D8	土壠基	四丸長方形 逆傾形	146	63	85	土師器、須恵器、瓦器碗、内巻土器、中国口磁碗、石製 品、青白釉陶器、陶器鏡、唐津燒、甕、平底・丸底、 軒瓦・瓦片、瓦片・瓦、鐵釦、鐵錐	中世	
SX09	D9	土壠基	四丸長方形 逆傾形	141	80	78	土師器高环・高环・須恵器、紙淨、石製品、瓦砾石、壁	中世	
SX13	D13	土壠基	四丸長方形 逆傾形	142	45	56	土師器、須恵器鏡、中國青磁碗	中世	
SX14	D14	土壠基	四丸長方形 逆傾形	137	55	48	土師器、須恵器、中田白磁碗、土製品投擲、石製品投擲	中世	
SD01	M1	溝	逆張縫り	1430	450	174	上層土器・瓦・盆・甕・盒・甌・土師質土器杯・甕形・須恵器 鏡、瓦片、青白釉、中國青磁碗、高麗青磁碗、中國口磁碗、 青白釉陶器、陶器鏡、唐津燒、甕、平底・丸底、軒瓦・瓦片、瓦 片・瓦、鐵釦、鐵錐	戻田	二段掘り
SD02	M2	溝	V字形	4800	570	256	中田白磁碗、青白釉、中國青磁碗、高麗青磁碗、中國口 磁碗、青白釉陶器、陶器鏡、唐津燒、甕、平底・丸底、鐵釦、 鐵錐、瓦片、瓦片・瓦、鐵釦、鐵錐	戻田	
SD03	M3	溝	V字形	4380	810	172	須恵土器・瓦・高环・甕・盒・甌・土師器上器、土師器高环・高环・土 師質土器蓋・甕・瓦器碗、中田白磁碗、高麗青磁碗、中國口磁碗、平 底・丸底、鐵釦、鐵錐	戻田	
SD04	M4	溝	逆傾形	5650	111	31	須恵土器・瓦・高环・甕・盒・甌・土師器上器、土師器高环・高环・土 師質土器蓋・甕・瓦器碗、中田白磁碗、高麗青磁碗、中國口磁碗、平 底・丸底、鐵釦、鐵錐	中世	

道橋名	位置 橋名	道 橋 類	形 態		現存長 新添形	復元場 所	類	古 土 遺 物	時期	備 考
			平面形	断面形						
SD05	MS	溝	逆梯形		1200	110	34	上野櫛型・环、墻型器・壺、鑊、甌、瓦質土器、青磁 碗、中国白磁碗。偏密器鉢、瓷片、鉢形、石瓶、無 縫石石瓶、木灰	中世	
SD06	M6	溝	逆梯形		2850	130	82	青白式・部器、衛生土器等 9 件。土質器皿・壺、甌、瓶 器器皿・壺、甌、瓶、鐵製品、鐵錐、石斧、黑摩石、鐵 鋸	古墳一 族墓	SD07と 切り合ふ
SD07	M7	溝	逆梯形		3150	130	60	佐伯土器・土師器、环・裏環・甌・壺、須恵器・环・ 高环・壺・甌、瓦質土器等、瓷片、鉢形、石瓶、無縫石 小瓶、鐵鋸	平安	満 SD05-06C がある。佐伯土 器等
SD08	M8	溝	逆梯形		900	130	63	鶴文・土器、土師器高杯・壺、甌、裏、須恵器・壺、甌、 鉢形、黑摩石	平安	
SD09	M9	溝	V字形		730	260	168	上野櫛型・环・裏环、土質器皿等、須恵器等、瓦質土器 大口、中国青磁、中国白磁、陶製器、鉢形、黑摩石石瓶	鐵道	満 SD13-井戸 SE15を切る
SD10	M10	溝	逆梯形		800	210	42	七輪器皿・高環・壺、甌、須恵器・壺、中田白堀、黑 摩石	中世	満 SD06-13と 切られる
SD11	M11	溝	逆梯形		5850	210	27- 38	上野櫛型・环、須恵器皿・壺、内腹碗、瓦質土器、中国 青磁碗、中田白堀、平足、鉢形、石斧、敲片、黑摩石、黑摩石	平安	万葉に区分す。 満 SD02-03と 切られる
SD12	M12	溝	V字形		3400	310	175- 195	夜吹式土器體・壺、甌、衛生土器等・壺、甌、甌、丹 麥土・土師器等・壺、甌、中國青磁碗、中田白堀、石瓶、 無縫石石瓶、木灰	鶴文	
SD13	M13	溝	逆梯形		320	120	14	上野櫛型・环、須恵器、黑色器皿・壺、中国青磁碗、中 田白堀、中田白堀、平足、鉢形、石製品、黑摩石	平安	
SD14	M14	溝	逆梯形		700	180	156	土師器皿、須恵器、青磁、半瓦、無縫石製器皿、壺	鐵道	
SD15	M15	溝	逆梯形		260	50	28	なし		満 SD06と 切り合ふ
SD16		溝	逆梯形		4150	18	18	なし		近世

Tab.14 第77次調査遺物一覧表

(単位: cm)

順位 番号	出土 場所	種類	器種	口径	底径 (高さ)	器高 (保存品)	形態の特徴・調整・文様	遺物・色調・末地等	備考	
62 15	SC01	土師器	甕	—	—	(22.4)	口縁部・底部をなくし、底部は残存に限る。 外側上位はタテハケ調整。下位はヘラナガ 調整。内面はハケ調整。	胎土は大粒の砂を含み、やや粗い。 焼成良好。外面は明茶褐色、一部 黒色。内面は暗茶色。		
62 16	SD12 1号	土師器	小型 丸底甕	9.8	—	8.5	口縁部外反、体部は半球形。	胎土は大粒の砂を含み、やや粗い。 焼成やや良。外面は茶褐色、内面 は淡茶色。	内外面削減	
62 17	SD12 1号	土師器	小型 丸底甕	—	—	(7.7)	口縁部外反。底部は失り少しある。 内面上位にラグゼリ。	胎土は砂を含み、やや粗い。 焼成良好。底色は灰褐色、外表面 は淡茶色。	内外面削減	
62 18	SC04	土師器	高环	—	19.2	(7.6)	脚部・底部は大きく外反。底部内面はココ ナガ調整。底部曲面に3箇の穿孔。	胎土は砂を含み、やや粗い。 焼成良好。底色は灰褐色。	内外面削減	
62 19	SC04	土師器	鉢	13.0	—	5.3	体部は半球形。	胎土に砂を少し含むが、滑らか。 焼成軟褐色。	定期品 内外面削減	
62 20	SC04	土師器	鉢	—	17.4	—	7.0	底部尖り丸味。体部内面青灰色である。外側 は瓶の平底。内面はハケ調整。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。 焼成やや軟。淡茶色。	
62 21	SD12 1号	土師器	鉢	—	—	3.0	(5.7)	底部は半球。外側は粗めの叩き、内面はナ ガ調整。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。淡茶色。	
62 22	SC04	土師器	甕	8.4	2.8	11.0~ 12.0	口縁部外反、底部は丸みをもつ。内外面ハ ケ調整。	胎土は大粒の砂を含み、粗い。 焼成軟褐色。		
62 23	SC04	土師器	甕	18.0	—	(15.8)	口縁部はくの字型に外反し、底部は円錐形 の内底。内面はココナガ調整。 口縁部内外側はセコナガ調整。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。 焼成良好。外表面は淡茶褐色、 内面は淡茶色。		
62 24	SC05 上層	土師器	甕	17.0	—	(6.3)	口縁部はくの字形。	胎土に砂を少し含み、粗い。 焼成やや軟。淡茶色。	内外面削減	
62 26	SC06	土師器	器古	8.9	—	(1.9)	杯部・口縁部は直立。	胎土に砂を少し含み、粗い。 焼成不良。茶褐色。		
69 31	SK01	土師器	甕	14.6	—	10.2	口縁部はくの字形に外反。体部は球形で、 内面はナタ調、外側はハケ調整。	胎土に1~3mmの砂を含む。 焼成不良。茶褐色。		
69 32	SK01	土師器	甕	20.1	—	10.0	口縁部は平底仕上、体部は球形で、内面は ナタ調。	胎土に1~3mmの砂を含む。 焼成やや不良。茶褐色。		
69 33	SK01	土師器	甕	—	—	(7.1)	内面は円形の当直底、外側は平行印き底、 1条の内底。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。 焼成良好。茶褐色。	最高点の成形 手法	
69 34	SK01	骨生土器	甕	13.6	—	(8.1)	口縁部はくの字形に外反。作部は丸みをも つ。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。 焼成やや不良。茶褐色。	内外面削減	
69 35	SK01	骨生土器	甕	—	7.2	(7.1)	平底で、体部上上がりは丸みをもつ。外側 はタテハケ。内面はナタ調整。	焼成やや不良。外側は茶褐色・黑 褐色、内面は淡茶褐色。		
69 36	SK01	土師器	高环	16.0	—	(5.9)	体部と底部の境に強い段をもつ。体部は直 線的に立ち上がる。	胎土に1~2mmの砂を含む。 焼成不良。茶褐色。	37と同一個体 か	
69 37	SK01	土師器	高环	—	12.0	(6.6)	脚部・腹部と腹部の境には内面に段をもつ。 内面はヘラケゼリ。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。淡茶褐色。	外表面削減	
70 38	SK02	土師器	鉢	17.8	—	4.8	半球形の作部。口縁部は小さく外反。外側 は粗いハケ調整。底部外側は叩きを施す。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。茶褐色。		
70 39	SK02	土師器	鉢	12.0	—	4.6	体部は球形。底部は平底。内面はナ タ調調整。外側の底部と体部の腹周辺はヘラ ケゼリ調整。外側に底座。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。明茶褐色。		
70 40	SK02	土師器	鉢	13.4	—	6.0	体部は球形で大底。口縁部はくの字形に小 さく外反。内外面はナタ調調整。底面は静止 ヘラケゼリ調整。外面に底座。	胎土に1~2mmの砂を含む。 焼成良好。茶褐色。		

測定番号	出土品番	種類	基盤	径柱	柱高	底径 (高さ)	最高 標準寸	形態の特徴・調査・文様	施錫・色調・高地等	備考
70 41	SK02	土師器	壺	一	—	(6.4)	壺子。体部は球体。内面はナテ調整。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成不良。暗茶褐色。		
70 42	SK02	土師器	高环	一	—	(6.6)	脚板面。複合部は内面に出ヘソを形成。内面にボケズ。	粘土は稍細。焼成やや不良。明茶褐色。		
70 43	SK02	土師器	壺	13.6	—	(39.3)	口縁部は直筒的に立ち上る。体部は球状で、内面はヘラケズリ。山根部内面はココナテ調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。外唇は淡茶褐色。内面は暗褐色~灰茶褐色。		
70 44	SK02	土師器	壺	16.8	—	(7.9)	口縁部外観。体部は丸みをもつ。内面はヘラケズリ。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成不良。暗茶褐色。		
70 45	SK02	土師器	壺	21.0	—	(11.2)	口縁部に外観するに壺子は厚壁。内面は丸みをもつ。外唇はナナノ刃形。下位はタケテ方法のヘラケズリ試作。外唇はヨコナテ調整。	粘土に1~4mmの砂を多く含む。焼成やや軟。淡茶褐色。		
70 46	SK02	土師器	壺	—	11.6	(5.7)	直縁部丸みをもつ。内面の下位はヘラケズリ調整。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。褐色。	内外面焼成	
70 47	SK02	土師器	壺	—	5.3	(10.6)	口縁部外観。体部は円筒形。平底で、体部の外に上りが丸みをもつ。外唇部底部はヘラケズリ。作部と底部はヘラケズリ。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。外唇は暗褐色。内面は茶褐色。口縁部内面は黒褐色。		
70 48	SK02	土師器	壺	12.2	—	(9.7)	口縁部は強く外反し、内面はナテ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成やや不良。茶褐色~暗褐色。	内外面焼成	
70 49	SK02	土師器	壺	18.4	—	(5.9)	口縁部は丸く外反。口縁部の外側部はヨコナテ調整。本体内面の残存は不明。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成やや不良。白茶色。		
70 50	SK02	土師器	壺	—	—	(16.2)	口縁部は小さく外反。作部中位に把手が付く。外側はタケ方向の手形跡き。内面はナテ調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成やや軟。淡茶色。		
70 51	SK02	土師器	壺	—	—	—	底部は半周に近く、厚2.8mmの穿孔を3ヶ所に有する。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	内外面焼成	
71 52	SK02	須恵器	壺	—	—	(4.5)	口縁部は小さく外反。内外面はナテ調整。	粘土は稍細。焼成良好。暗灰色。		
71 53	SK02	須恵器	壺	12.9	—	(3.4)	口縁部は大きく外反。端部を肥厚させる。外側下位に低い突起2点を施す。内外面はナテ調整。	粘土に調砂を含む。焼成良好。淡灰色。		
71 54	SK02	須恵器	壺	—	—	(15.0)	外表面は細かい筋子目印き。内面はヨコナテ調整。	粘土は稍細。焼成良好。暗茶褐色。	解剖系か	
71 55	SK02	土製品	土器	(現存量) 4.6	(復) 1.2	(孔径) 9.4	管状土器で、内底がすぼまる。	焼成良好。淡茶褐色。		
71 56	SK02	土製品	土器	(元量) 7.5	(復) 1.3	(孔径) 0.45	管状上蓋で、両端がすぼまる。	焼成良好。淡茶褐色。	重さ11.0g	
71 57	SK02	土製品	土器	(元量) 8.5	(復) 3.1~ 3.3	(孔径) 1.7	管状土器で、開口をなす。	焼成良好。茶褐色。	重さ90.0g	
72 58	SK03	須恵器	環壺	11.5	—	3.2	天井型は平底。口縁部は直線的に聞く。内側に縦溝がある。外側は脚部の境に段差がある。内面はナテ調整。	粘土に砂を少し含み、細かい。焼成良好。灰色。		
72 59	SK03	須恵器	壺	12.5	—	(4.0)	口縁部は丸く外反。本体は球形。内外面はナテ調整。	粘土に砂を含み、やや粗かい。焼成軟。淡褐茶色。		
72 60	SK03	土師器	壺	—	—	(6.8)	口縁部は丸く外反。本体は丸みをもつ。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成軟。淡茶褐色。		
72 61	SK03	土師器	壺	—	—	(4.2)	壺子。口縁部が小さく外反し、壺子との境に縦溝をもつ。外側は細いナメコヨコナテ調整。底部内面はヘラケズリ。	粘土は稍細。焼成やや軟。明茶褐色。		
72 62	SK03	土師器	高环	17.5	—	(7.3)	口縁部が丸く外反。本体は丸みをもつ。底部内面はヨコナテ調整。	粘土に砂を多く含み、やや粗い。焼成やや軟。明茶褐色。	内外面焼成	
72 63	SK03	土師器	高环	15.2	—	(7.3)	口縁部は外反。体部は球形。内側内面はヨコナテ調整。内面はヘラケズリ。	粘土に砂を多く含み、やや粗い。焼成やや軟。明茶褐色。		
72 64	SK03	土師器	高环	—	10.0	(4.5)	脚部。底部は強く聞く。内側内面はヨコナテ調整。	粘土は稍細。焼成やや軟。明茶褐色。		
72 65	SK03	土師器	壺	15.3	—	(8.4)	口縁部は外反。体部は球形。内側内面はヨコナテ調整。	粘土に砂を含み、やや粗かい。焼成軟。明茶褐色。	外表面焼成	
72 66	SK03	土師器	壺	—	—	—	外表面は細かい凹凸。内面はナテ調整で、底面は陶板が残る。	粘土に砂を多く含み、粗い。焼成やや軟。茶色。		

試験番号	地質番号	出土地	出土地	種類	岩種	性質	底質 (高さ)	高さ (現行高)	形態の特徴・調整・文様	施物・色調・等地帯	備考
72 27	SK12	土師器	高坪	19.1	-	(6.5)	4部。口縁部は幅く外仄、体部は丸みをもつ。	粘土は稍緻。焼成やや歛。淡茶褐色。			
75 81	SX03	土師器	坪	12.8	-	(8.0)	体部は直線的に聞く。内外面ココナテ調整。	粘土に細かい褐色粒子を少し含む。内側焼成やや不良。淡茶褐色。	内側		
75 90	SX08	瓦器	瓶	-	7.1	(2.8)	断面三角形の窓台。体部は丸みをもつ。	粘土は細かい凹を含む。精緻。焼成良好。外側は淡茶褐色、内側は淡墨灰色。			
75 91	SX08	白磁	瓶	-	6.0	(2.8)	断面のコ字形の窓台。内底見込みに施文。	素地は白灰色で、かや細い。地成良好。透明釉。内底下まで施釉。	大室府IV層		
75 92	SX09	土師器	坪	12.1	8.5- 9.2	(2.9)	糸切り底。板目。	粘土に砂を含み、精緻。焼成やや歛。			
75 93	SX09	土師器	坪	12.2	8.2- 8.7	(2.6)	糸切り底。細かい板目。	粘土に板状を含み、精緻。焼成やや歛。外側は暗茶褐色、内側は茶褐色。			
75 94	SX13	青磁	碗	16.6	(5.0)	6.8	外側に施窓突文。内底に印文。	素地は白灰色で精緻。地成良好。内外面は淡茶褐色。底部外側露頭法。	淡茶褐色 元形容		
75 95	SX14	白磁	碗	-	6.1	(4.05)	低い脚り窓台。実質部は我孫のため底無灰。内側は白色。外は外側下底まで施す。溶けきっていない。	素地は淡黄色で精緻。焼成良好。底成良好。外側自接着外側下底まで洋く施釉。	大室府IV層		
75 97	SX14	土製品	丸玉	-	-	3.2	小盤形の丸玉。ナテ調整。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	径3.2×3.5cm 32g		
79 100	SE01-15	土製品	丸玉	-	-	3.3	小盤形の丸玉。ナテ調整。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	径3.3×3.6cm 37g		
89 101	SD01 下層	白磁	碗	15.8	-	(4.5)	口縁部は幅く外仄。軸は外側下底まで施釉。内底上位に施跡。	素地は茶白色。焼成良好。透明釉。大室府V層			
89 102	SD01 覆土	青磁	碗	-	(5.4)	(5.7)	内面ヘラ彫りの花文。轍は高台外側まで施す。底部外は施跡。	素地は淡茶褐色。焼成良好。オリーブ色。	淡茶褐色系		
89 103	SD01 覆土	陶器	碗	-	(6.6)	(4.8)	(体部下位に施) 纋をもつ。凸舌は外に聞く。底部外まで施す。舶用が多く、軸は内側により突き出る窓の高台。	素地は明茶色でかや細かい。焼成良好。沿みを帯びた淡白色。	茶刷		
89 104	SD01	青磁	碗	-	(4.4)	(3.1)	内底見込みに2条の施跡。体部に施文の白毫。貫入多い。符付は削り取る。	素地は淡灰色で精緻。透成良好。オリーブ色を帯びた透明釉。	高麗青磁		
89 105	SD01 裏上	陶器	裏or蓋	-	12.0	(3.6)	基部上げ底。外側まで施釉。	素地は茶灰色で、精緻。焼成良好。墨茶褐色。			
89 106	SD01 下層	土師器	坪	-	7.4	(2.6)	糸切り底。口縁部欠く。	素地はやや細かい。大粒の砂を含む。焼成やや歛。褐色。			
89 107	SD01 下層	土質瓦	錐	-	-	-	体部は外側に、口縁部は内側する。内面はココナテ調整、外邊はハケ調整。外縁に斜めが付す。	粘土は微砂を含み、精緻。焼成良好。外縁は淡茶色。内面は明茶色。			
90 117	SD02 覆土	土師器	坪	-	5.0	(2.0)	糸切り底か。内面ナテ調整。	粘土は砂を少し含み、精緻。焼成良好。明茶褐色。	内外面施釉		
90 118	SD02 上層	陶器	碗	-	(4.6)	(3.8)	体部は丸みをもつ。内側外面を内側させて、高台を削り出す。外邊は高台上位まで施釉。	素地は褐色で精緻。焼成良好。灰白色。	唐津燒 (季別判)		
90 119	SD02 上層	土師器	瓶	-	-	-	把手。断面形は円形で、上位にV字形の捺込みがある。	粘土は大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。淡茶褐色。			
90 120	SD02 裏上	土質瓦	滑鉢	-	-	(5.1)	内面ヨコハケ、外側ナテ調整。下し口は4箇所以上。	粘土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。淡茶褐色。			
90 121	SD02 覆土	瓦質土器	滑鉢	-	11.2	(2.4)	平底。内面の下し口は7本巻位。内底に交錯した4本単位の下し口。外邊はヨコナテ調整。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。外縁は淡灰色。内面は淡茶褐色。	内外面施釉。内縁は使用により少し削痕		
90 122	SD02 中層	瓦質土器	滑鉢	30.0	-	(C.9.0)	口縁部肥厚。体部はやや内凹。内面に5本巻位の下し口。外邊はヨコハケ調整。外縁はタテハケ調整。	粘土はやや精緻。焼成良好。茶褐色。			
90 123	SD02	瓦質土器	滑鉢	-	13.0	4.8	上底。内面に9本巻位の下し口。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。外縁は灰褐色。内面は白灰色で一部灰褐色。	内面は使用により削減。外縁削減		

測定番号	造物番号	出土場所	種類	基柱	口径	高径 (高さ径)	基高 (奥行き)	形態の特徴・調査・文様	施術・色調・素材等	備考
90	124	SD02 瓦質土器	火舟	一	-	(8.2)		口縁部肥厚。外面に2条の突起。突起間に山文のスタンプ。内外面ナデ痕既存。織し施す。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗かい。土色は黄灰色。焼成良好。外側は黒色。	
90	125	SD02 灰土器	火舟	一	-	(8.7)		口縁部は強く内寄し、平縁部を形成。内外面はナデ痕既存。外底と口縁部の一部に織しを施す。	粘土は褐赤色で、微妙。焼成良好。外側は灰灰色。	
90	126	SD02 瓦質土器	火舟	一	-	(9.4)		円筒形の体部で、口縁部は肥厚。外面に2条の突起。突起間に山文のスタンプ。内面はヨコハナ網目。全体に織しを施す。	粘土はやや粗く、褐色。焼成良好。内外面は暗灰色。	
90	127	SD02 中盤	瓦質土器	足跡	-	-		外反した口縁部の先端を内側に折り曲げる。体部外縁に凹凸。	胎土は黃白色でやや粗い。焼成良好。灰土。	内外面磨滅
91	128	SD02 中盤	瓦質土器	火舟	36.0~ 38.5	29.4	36.6~ 36.8	輪形。体部は丸みをもつ。底部に4脚。内面上部はハラ、外面にはテ調査。外縁に2条の突起。突起間にヨコハナ網目。火舟部分は3ヶ所。突起間に梅花文。	粘土は構織。焼成やや弱。灰赤色~暗茶色。	内外面磨滅
91	129	SD03 下盤	土師器	皿	7.0~ 7.3	5.4~ 5.8	2.6~ 2.9	余取り底。体部は丸みをもつ。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成軟。淡茶色。	内外面磨滅
93	140	SD03 上盤	土師器	杯	-	5.4	(1.0)	平底。余取り底か?	粘土に大粒の砂を含み、構織。焼成良好。淡茶色。	内外面磨滅
93	141	SD03 上盤	瓦器	碗	-	(5.2)	(1.6)	断面三角形の高台。内外面はナデ調整。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。系白色。	
93	142	SD03 蓋・上盤	陶器	碗	-	(3.3)	(2.7)	割り出し高台は断面三角形。高台外縁まで輪形。内底部と高台に移行部。	高台は灰白色で、やや粗かい。焼成良好。透明感。	古津焼
93	143	SD03	陶器	罐	-	-	(5.8)	口縁部を削りさせ、立ち上げる。内外面ヨコナデ調査。下し口は6本単位。	高台に砂を多く含み、やや粗い。焼成良好。灰土色。	櫛前焼IV期
93	144	SD03 下盤	陶器	楕球体	-	-	(4.3)	外表面ナデ調査。下し口は4本単位。	素地に砂を含み、やや粗い。焼成良好。小豆色。	櫛前焼
93	145	SD03 灰土	瓦質土器	鉢	-	-	(3.0)	トゲ底。外縁はハケ両壁。	胎土に大粒の砂を含み、構織。焼成良好。外縁は黄茶色。内面は灰白色。	内外面磨滅
93	146	SD03	瓦質土器	足跡	-	-	(4.0)	外反した口縁部を肥厚させ、内側に折り曲げる。口縁部内外面はヨコナデ調査。体部内面はヨコハナ網目。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。灰土色。	
93	147	SD03 下盤	瓦質土器	火舟	-	-	(5.8)	口縁部内側を肥厚させ、平坦部削成。内外面はヨコナデ調査。外縁に筋造りのスタンプ。焼しお。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。灰土色。	内外面磨滅
95	157	SD04	瓦器	碗	-	(6.3)	(1.6)	小さな断面三角形の踏切高台。	胎土はやや粗い。焼成良好。淡茶色。	
95	158	SD04 灰土	白磁	碗	-	(7.0)	(2.1)	高台内側に削りだしを行い、内側に施術。柄が溶けきっていない。	胎土は素色を含むた白色で、やや粗かい。焼成度好。透明感。	大室隋IV期
95	159	SD04 灰土	土師質土器	皿	12.7	-	3.5	口縁部内側に削りだしを行った跡は円筒形で、径0.6cmの穴あながある。内外面はヨコナデ調査。内面にあしらった模様が残存する。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗かい。焼成良好。外縁は暗茶色。内面は暗茶色。	
95	160	SD04 灰土	須恵器	皿	-	13.0	(4.5)	上げ底。体部は円筒形で丸みをもつ。内面はヨコナデ調査。	粘土は砂を含み、結構。焼成良好。灰土色。	平安時代
95	161	SD04	須恵器	甕	-	-	-	外縁に平行引き、内面に青海波の当具痕がある。	胎土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。外縁は灰土色。内面は灰土色。	
95	164	SD05	土師器	皿	7.8	5.6	1.6	余取り底。体部は丸みをもつ。	胎土は砂を多く含み、粗かい。焼成良好。淡茶色。	
95	165	SD05	白磁	碗	-	(7.3)	(1.9)	高台内側の削り落し。体部外縁下部まで施術。内底部込込み状に模様を刻む。	胎土は白灰色で構織。焼成良好。透明感。	大室府窯類
95	166	SD05	須恵質土器	片口鉢	-	-	(5.5)	口縁部は外底。輪化は横曲し、上方につまみ上げる。外縁はヨコナデ調査。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。灰土色。	須恵器系 魚住窯
95	167	SD05	須恵器	甕	-	-	-	外縁は唇子印押し、内面は同心円状の当具痕がある。	胎土はやや粗い。焼成良好。外縁は暗灰土色。内面は小豆色。	
96	169	SD06	陶文土器	甕	-	8.0	(2.9)	上げ底。筋部が盛り出し、体部の立上がりは外内。	胎土に砂を多く含み、粗い。焼成良好。淡茶色。	内外面磨滅

試験番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径 (底古型)	最高 (現存形)	断面の特徴・調整・文様	着物・色調・墨跡等	備考	
96-170	SD06 上部	土器	瓶	-	-	-	把手。断面形は楕円形。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。削除茶色。		
96-172	SD07 東窓器 生焼け	土器	甕	15.6	-	(4.6)	凸輪形外縁を把耳させ、三角形の突起が形成する。内外面はヨコナテ調整。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。削除茶色。	2次的に火を受け、表面は黒化	
96-173	SD07 燒窓器	高杯	-	-	-	(5.2)	脚部、底部に幅0.4cmの造りきを3ヶ所。造りきの形状は、上位は充分に付いていない。内外面はヨコナテ調整。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。青灰色。		
96-175	SD08 上層	陶器器	甕	-	-	13.8	2.35	口縁部内面に小さなえし。つまみは複室底。内外面ヨコナテ調整。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。灰褐色。	7C後半
96-176	SD09 中層	土器器	甕	10.0	5.8	2.25	体部強く丸く。手切り底。	粘土に微砂を含み、滑顧。焼成軟。削除茶色。		
96-177	SD09 下層	土器器	瓦	8.2	4.7	1.75	角切り底。体部は丸みをもつ。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成やや軟。焼茶褐色。	内外面脂減	
96-178	SD09 下層	瓦質土器	火鉢	-	-	(7.4)	体部は丸みをもつ。口縁部の内側を厚壁とする。内面に2箇所の突起がある。内外面はヨコナテのスタンプ。内外面に擦痕を認める。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。外表面は灰褐色。	2次火を受けた	
97-181	SD11 上層	土器器	甕	9.6	6.8	1.1- 1.3	へたり切り底。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成軟。削除茶色。	3回充形	
97-182	SD11 上層	土器器	甕	9.6	6.2	1.1- 1.4	へたり切り底。体部は丸みをもつ。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成軟。削除茶色。		
97-183	SD11	青磁	碗	-	-	(6.9)	高台の断面形はコの字形。高台外縁まで黒帯。内面見込に刃跡がある。見込は膨化。高台盤部の目板は削り落とす。	本体は灰白色で滑顧。焼成良好。焼オーリーブ色。	越前窯系	
97-184	SD11 下層	燒窓器	瓦質甕	13.5	-	2.8	発達した4脚。窓部は中央が盛り上がり、窓部は複室の凹部。窓部は0.3cmの立ち上がり。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成軟。外表面は淡小豆色、内面は灰色。		
97-185	SD11	燒窓器	甕	-	-	-	外側は舟子目叩き、内面は同心円の凸具調。	粘土は滑顧。焼成良好。灰褐色。		
97-186	SD11	燒窓器	甕	-	-	-	外側は舟子目叩き、内面は同心円の凸具調。	粘土に微砂を含み、やや粗い。焼成良好。削除茶色。		
97-187	SD11 上層	土器器	瓦	-	-	-	把手。断面形は楕円形。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。削除茶色。		
97-188	SD11	土器器	瓦	-	-	-	把手。断面形は楕円形。	粘土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。削除茶色。		
97-189	SD11	土器器	瓦	-	-	-	把手。断面形は楕円形で、中央に幅0.8cmの穿孔がある。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。削除茶色。		
97-193	SD13	青磁	碗	-	(3.8)	(2.7)	内底見込に刃痕。体部外下面下まで黒帯。	本体は灰白色で滑顧。焼成良好。オリーブ色。	同安窯系	
97-194	SD13	土器器	甕	9.8	4.6	1.4	へたり切り底。	粘土に砂を含み、滑顧。焼成やや軟。削除茶色。		
97-195	SD13	土器器	甕	12.5	8.4	(4.2)	へたり切り底。内外面はヨコナテ調整。	粘土に砂を少しあみ、滑顧。焼成やや軟。削除茶色。		
97-196	SD13 外生土器	甕	甕	-	11.2	(3.0)	突唇又稱土器の底。上げ底。外側は指輪状の突起がある。内面はナナ調整。	粘土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。削除茶色。		
101-201	SD12 上層	夜日式 土器	甕	-	-	(5.5)	体部は丸みをもつ。体部外縁に刻目突起。外縁は右下りの条状。内面はナナ調整。	粘土に1-2mmの砂を少しあむ。焼成良好。外表面は淡褐色。内面は淡褐色。		
101-202	SD12 下層	夜日式 土器	甕	-	-	(6.8)	口縁部外縁下端に刻目突起。外縁は尖底。内面はナナ調整。	粘土に砂を含み、粗い。焼成やや軟。削除茶色。		
101-203	SD12 下層	夜日式 土器	甕	-	-	(6.6)	口縁部外縁下端に刻目突起。外縁は尖底。内面はナナ調整。	粘土に砂を少しあみ、やや粗い。焼成良好。外表面は淡茶色。内面は淡褐色。		
101-204	SD12	夜日式 土器	甕	-	-	(9.4)	体部は内凹。口縁部外縁に刻目突起。外縁は尖底。	粘土に1-2mmの砂を少しあむ。焼成良好。削除茶色。		

標本 番号	遺物 番号	出土場所	種類	器種	口径	底径 (高さ)	基部 (側面高)	形態の特徴・調査・文様	地物・色調・着地等	備考
101 205	SD12 土器	東口式 土器	甕	一	—	(5.5)	内傾する口縁部外面に刻目突起。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成不良。褐色~淡茶褐色。		
101 206	SD12 土器	東口式 土器	甕	一	—	(9.6)	口縁部は内傾し、体部は丸みをもつ。口縁部外側直下に刻目突起。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。		
101 207	SD12 下器	東口式 土器	甕	19.5	—	(17.5)	体部は丸みをもつ。口縁部外面に刻目突起。外側に質變条痕。	粘土に白く細かい砂を多く含む。焼成良好。外側は暗灰褐色。内面は淡茶褐色。		
101 208	SD12 上器	東口式 土器	甕	一	—	(4.8)	内傾気味。口縁部外側直下に刻目突起。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。外側は淡褐色。内面は淡茶褐色。		
101 209	SD12 土器	甕	一	—	(5.4)	—	—	—	—	—
101 210	SD12 土器	東口式 土器	甕	18.6	—	(13.3)	外側の体部脇部と口縁部外側に刻目突起。脇部下側に質變条痕。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成や小粒。淡茶褐色。		
101 211	SD12 下器	東口式 土器?	甕	19.8	—	(6.7)	口縁部は大きく外脅し、体部との境に段をもつ。内外面にはナテ調整。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成やや小粒。淡茶色。		
101 212	SD12 上器	薄生七器	甕	一	—	(6.9)	口縁部は外張りし、口縁部に削付。内外面はヨコナナケ網目。	粘土に1~4mmの砂を少し含む。焼成不良。淡茶褐色。		
101 213	SD12 上器	薄生七器	甕	29.4	—	(9.2)	口縁部は外脅し、外肉を肥厚させる。内外面はナテ調整。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成不良。淡茶色。		
101 214	SD12 下器	薄生 土器	甕	—	—	(3.6)	つまみ部分。天井は平坦で底部は強く盛り出す。ナテ調整。	粘土に砂を多く含み、やや粗い。焼成やや小粒。淡茶色。		
101 215	SD12 土器	薄生 土器	高杯	—	—	(13.2)	脚筒部内面にしづり模。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成不良。淡茶色。	内外面磨滅	
102 216	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	—	7.1	(4.1)	平底。端部は外へ張る。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。淡茶色。	
102 217	SD12 下器	東口式 土器	甕	—	—	6.8	(4.4)	平底。端部は外へ張り出す。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。素褐色。	
105 218	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	7.2	(3.2)	上げ底。端部は外へや張る。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。		
102 219	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	—	7.8	(3.3)	上げ底で肥厚する。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成や小粒。外側は暗灰褐色。内面は黄褐色。	
105 220	SD12 下器	東口式 土器	甕	—	7.4	(3.7)	上げ底。端部は外へ張り出す。外縁はケヌリ凹部。	粘土に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。暗褐色。		
102 221	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	6.9	(3.1)	上げ底。肥厚し、端部は外へ張る。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。暗褐色。		
102 222	SD12 下器	東口式 土器	甕	—	7.0	(2.6)	上げ底。外表面剥き取り成形。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。褐色。		
105 223	SD12 下器	東口式 土器	甕	—	7.2	(3.2)	上げ底。端部は外へ張る。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成不良。淡茶色。		
102 224	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	7.2	(4.1)	上げ底で肥厚。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成や小粒。素褐色~淡茶褐色。		
100 225	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	7.2	(4.5)	上げ底。把手し、端部は張り出す。	粘土に大粒の砂を含み、粗い。焼成やや小粒。暗茶褐色。		
105 226	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	7.2	(3.2)	上げ底。外面はヨコナナケ網目。	粘土に大粒の砂を多く含み、やや粗い。焼成良好。外側は淡茶褐色。内面は暗褐色。		
102 227	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	7.2	(3.6)	深い上げ底。内面はナテ調整。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成やや小粒。外側は暗茶褐色。内面は暗褐色。		
102 228	SD12 上器	東口式 土器	甕	—	7.0	(8.0)	上げ底で肥厚する。内外面剥き取り成形。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶色。		

測量番号	出土高標	種類	基準	山底	表層 (高さ)	基高 (既存高)	形態の特徴・調査・文様	施柱・色調・塗地等	備考
102 228	SD12 上層	表土式 土器	表		8.5	(5.9)	上げ底。端部は外へ強く張る。	粒土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。淡褐色。	
102 230	SD12 北壁 2層	表土式 土器	表	-	7.2	(9.6)	上げ底。外面はタテ方向の強いナテ調査。	粒土に1~2mmの砂を多く含む。焼成不良。淡褐色。	
102 231	SD12 2層	表土式 土器	表	-	7.3	(2.3)	上げ底。端部は外へ張り出す。	粒土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。明茶褐色。	
102 232	SD12 1層	表土式 土器	表	-	7.0	(3.4)	上げ底。体部は外反する。	粒土に1~2mmの砂を多く含む。焼成不良。外面は淡茶色、内部は黒褐色。	
102 233	SD12 上層	表土式 土器	表	-	7.3	(3.0)	上げ底。肥厚する。	粒土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。外面は黒色~褐色、内部は淡茶色。	
102 234	SD12 下層	表土式 土器	表?	-	7.4	(2.5)	溝手。上げ底で、端部は外に張る。外面はヨコナテ調査。	粒土に砂を含み、やや粗い。焼成不良。外面は淡茶色~濃茶色、内部は黒褐色。	
102 235	SD12 2層	表土式 土器	表	-	6.6	(2.7)	深い上げ底。	粒土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。黒褐色~黒褐色。	
102 236	SD12 1層	表土式 土器	表	-	7.2	(2.4)	平底。体部は外反する。	粒土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。淡茶色、一部濃茶色。	
102 237	SD12 最下層	表土式 土器	表	-	19.8	(6.7)	上げ底。体部は大きく聞く。	粒土に大粒の砂を含み、やや粗い。	
102 238	SD12 上層	赤土土器	表	-	9.4	(5.0)	平底。	粒土に1~1cmの砂を多く含む。焼成不良。淡褐色。	
102 239	SD12 1層	表土式 土器	表	-	7.4	(5.9)	高台状底部、上げ底。	粒土に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。明茶褐色。	
102 240	SD12 1層	表土式 土器	表		6.0	(4.2)	深い上げ底で、高台状。内外面ナテ調査。	粒土に大粒の砂を多く含み、やや粗い。外面は淡茶色、内部は濃茶色。	
102 241	SD12 1層	表土式 土器	表	-	-	(3.3)	上げ底。内外面ナテ調査。	粒土に大粒の砂を多く含み、粗い。外面は淡茶色、内部は濃茶色。	
102 242	SD12 上層	赤土土器	表	-	13.6	(3.8)	平底。外型はタテハケ調査。	粒土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
102 243	SD12 2層	赤土土器	表		8.0	(7.8)	平底。内面はナテ調査。外型はタテハケ調査。	粒土に砂を多く含み、粗い。焼成不良。赤茶色。	
103 244	SD12	表土式 土器	表		46.6	14.2	52.6 基盤と白い表面を有する。内面はナテ調査。外壁はタテハケ調査。下部は丸み条痕がある。平底で、外壁間に木の刺孔。	粒土に白く細かい砂を含む。焼成良好。茶灰色。	充填品
104 251	Yo3 トレント	表土式 土器	表	-	7.3	(2.9)	上げ底。端部は外へ張る。	粒土に砂を多く含み、粗い。焼成やや軟。茶色。	内面剥落
104 252	土器	土器	表	-	-	-	把手。断面は楕円形。	粒土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。明茶褐色。	壺
104 253	表?	土器	表	7.4	5.0	2.05	条切り底。体部は丸みをもつ。	粒土は精緻。焼成良好。淡褐色。	他の遺構の仮込み
104 254	表?	青磁	表	16.0	-	(3.2)	内面にヘラ描きの雲文・柏描き文。内外面施釉。	表土は灰褐色で精緻。焼成良好。深灰色の下地施釉。鋸歯口。	同窓系
104 255	表土	陶器	表	-	(4.6)	(2.1)	蛇ノ目呂古。内面に施釉。内外面に砂目呂古。外側に模様が付着している。	表土は淡茶色で精緻。焼成良好。淡灰色の下地施釉。鋸歯口。	吉津焼
104 256	表土	白磁	表	-	(1.6)	(1.7)	外側下位まで施釉。	表土は白色で精緻。焼成良好。薄型。	伊万里系

Tab.15 第77次調査軒平瓦計測表

(単位:cm)

神社 番号	品 番	出 土 場	土 構	文 様	厚 さ	上外縁		下外縁		横区幅	横厚さ	色 調	胎 土	焼 成	形態・製作技法	備 考
						厚さ	高さ	厚さ	高さ							
89	108	SD01	均整簡單文	5.2	0.8	0.5	0.6	0.5	1.0	1.9	—	黑色・白色の砂を多く含む。	良好	中心割り宝珠形。ナゲ調整。埴し。		
89	109	SD01 下附	均整簡單文	5.1	0.9	0.5	0.7	0.3	0.7	—	淡茶色	3mm前後の砂を含む。	やや軟	中心割り宝珠形。ナゲ調整。埴し。		
93	148	SD09 下附	唐草文	4.8	0.8	0.4	0.7	0.4	0.8	2.3	淡茶色	大粒の砂を含み、やや粗い。	やや軟	ナゲ調整		

Tab.16 第77次調査丸瓦計測表

(単位:cm)

神社 番号	品 番	出 土 場	土 構	長 さ		幅		高 さ	深 度	色 調	胎 土	焼 成	形態・製作技法		備 考
				正統形	局部	正統形	後端部								
89	111	SD01 下附	—	—	—	—	—	—	—	茶褐色	砂を少し含み、粗粒。	良好	背部は墨目叩きのあとナゲ調整。谷部には多じ痕と弧状へラケ入り。埴し。		
89	112	SD01 下附	4.1	—	—	12.8	7.0	4.4	黑色	白灰色の砂を含む。	良好	背部は墨目叩き、谷部はナゲ。埴し。 引穴化量 1.3mm			
91	130	SD02	—	—	—	—	—	—	—	青褐色 茶色・黄褐色 斑状・粗粒質	白灰色の砂を多く含み、粗粒。	良好	背部は墨目叩き、谷部はハケ目調整。埴し。		
93	151	SD03	—	—	—	—	6.3	4.7	淡茶色	大粒の砂を含み、やや粗い。	良好	背部は墨目叩きの後ナゲ消し、谷部は3mm幅の引穴化。埴し。			
93	152	SD03	—	—	—	—	6.2	4.6	淡茶色	大粒の砂を含み、粗い。	良好	背部は1mm幅の墨目叩き、谷部は1.5mm幅の引穴化。埴し。			
95	162	SD04	—	—	—	—	—	—	—	淡茶色	大粒の砂を含み、粗い。	良好	背部は1mm幅の墨目叩き、谷部は1.5mm幅の引穴化とケズリ。埴し。		

Tab.17 第77次調査平瓦計測表

(単位:cm)

神社 番号	品 番	出 土 場	長 さ (現存値)	厚 さ (現存値)	幅		基 準	色 調	胎 土	焼 成	形態・製作技法		備 考
					曲端部	後端部							
90	114	SD01 下附	(16.5)	(10.6)	—	—	—	明黄色	白灰色の砂を多く含む。	良好	谷部はナゲ調整。埴し。		
90	115	SD01 積土	(22.0)	1.8	—	—	—	淡茶色	2~3mm前後の白灰色の砂を多く含む。	良好	背部は難れ砂付着、谷部はナゲ調整。埴し。		
91	129	SD02	(14.0)	(1.7)	—	—	—	淡茶色	白灰色の砂を多く含む。	良好	難れ砂付着、谷部は凹取りナゲ調整。埴し。		
93	149	SD03	(11.2)	1.9	—	—	1.7	明黄色	大粒の砂を多く含み、やや粗い。	良好	背部はハケの後強いナゲ調整。谷部はタテ方向に強いナゲ調整。埴し。		
93	150	SD03	(14.5)	2.0	—	—	2.0	淡茶色	砂を多く含み、やや粗い。	良好	タテ方向のナゲ調整。埴し。		

Tab.18 第77次調査瓦・道具瓦・瓦場計測表

(単位:cm)

測定番号	遺物番号	出土遺構	種類	高 (現存高)	幅 (現存幅)	厚 (現存厚)	色調	地 土	焼度	形態・製作技法	備考
69	110	SD01	鬼瓦	(13.1)	(6.0)	(4.6)	白灰色	白灰色の砂を含む。	やや軟	ナメ調壁	
90	113	SD01覆土	伏衝瓦	(13.0)	(13.1)		茶白色	3mm前後の白灰色の砂を多く含む。	良好	背部は運目凹きの後ナメ調壁、谷部はヘラケズリ、一部ナメ調壁。	

Tab.19 第77次調査鉄製品一覧表

(単位:cm)

測定番号	遺物番号	出土遺構	種類	高 (現存高)	幅 (現存幅)	厚 (現存厚)	備 考
76	82	SX05	釘	3.8	—	—	
75	83	SX05	釘	3.6	—	—	本質が残る。
75	84	SX05	釘	3.4	—	—	本質が残る。
75	85	SX05	釘	3.4	—	—	本質が残る。
75	86	SX05	釘	3.5	—	—	本質が残る。
75	87	SX05	釘	5.3	—	—	本質が残る。
75	88	SX05	釘	5.2	—	—	本質が残る。
75	89	SX05	釘	3.1	—	—	本質が残る。
91	134	SD02覆土	釘	6.3	—	—	

Tab.20 第77次調査石製品一覧表

(単位:cm)

測定番号	遺物番号	出土遺構	岩種	高 (現存高)	幅 (現存幅)	厚 (現存厚)	重量(g)	石材	色調	特 徴
62	25	SC06	砾石	12.0	(2.8)	(2.3)	—	粘板岩	暗灰色	方柱状を呈し、4面を砥削利用。小口は一方が研磨整形、下方は直取りのみ。
71	58	SK02	白玉	—	—	0.2	—	滑石		径0.4cm、孔径0.2cm。
72	67	SK03	融石	7.8	6.2	4.8	384.0	玄武岩	灰青色	卵形を呈し、両面は浅く溝入。四小口の上方は研磨石、下方は融石として利用している。
72	68	SK03	白玉	—	—	0.1	—	滑石		径0.37cm、孔径0.15cm
72	69	SK03	白玉	—	—	0.28	—	滑石		径0.4cm、孔径0.1cm

序 番 号	通 番 号	出土遺構	器種	高 (裏表高)	幅 (現存幅)	厚 (現存厚)	重量(g)	石 材	色 調	特 徴
72	70	SK03	白玉	—	—	0.12	—	滑石	透明白。	径0.4cm、孔径0.2cm
72	71	SK03	白玉	—	—	0.2	—	滑石	透明白。	径0.42cm、孔径0.15cm
72	72	SK03	白玉	—	—	0.12	—	滑石	透明白。	径0.5cm、孔径0.2cm
72	73	SK03	白玉	—	—	0.18	—	滑石	透明白。	径0.5cm、孔径0.18cm
72	74	SK03	白玉	—	—	0.28	—	滑石	透明白。	径0.4cm、孔径0.1cm
72	75	SK03	白玉	—	—	0.2	—	滑石	透明白。	径0.48cm、孔径0.15cm
72	76	SK04	蔽石	(11.4)	5.7	2.9	342.0	玄武岩	灰黑色	神円形の自然石を有する。表面の真牛乳は、洗く透かす。側面に崩れの跡がある。小口の一方は串き石として利用。
75	96	SX14	蔽石	3.5	3.2	—	42	花崗岩	灰褐色	不整の隅方、長方形状に整形。
90	116	SD01下層	板石	(10.2)	5.9	6.2	—	砂岩	外側は薄茶色	三角形の立方体に四取りし、一側を断面としても利用。斜面が3枚ある。玉脛さにも使用している。
91	131	SD02	磨製 石斧	(11.9)	(8.1)	4.15	—	玄武岩	灰黑色	基部を欠く。刃部が幅広く、輕手である。表面が研削している。
91	132	SD02A	板石	12.1	8.0	4.9	—	砾質砂岩	暗茶褐色	丸方形の立方体に四取りし。両側面は横筋整形。八面を断面として利用。
91	133	SD02覆土	蔽石	7.1	6.6	3.5	208	砂岩	淡褐色	不整円形を呈し、一部欠く。八面の中央が浅く陥り、側面には横筋痕が残る。
92	135	SD02覆土	石臼	(裏先径) 18.5	(12.1)	—	—	砂岩	暗褐色	上臼。土溝8本、溝底6本。
92	136	SD02模土	板碑	(20.4)	15.9	9.6	—	砂岩	暗茶褐色	下臼を欠く。表面に2枚の沈泡と梵字。パンか。背面にノミ眼。
92	137	SD02覆土	板碑	(13.5)	(7.0)	(7.7)	—	砂岩	暗茶褐色	破片。背面にノミ眼。
92	138	SD02模土	板碑	(11.5)	18.5	(7.0)	—	砂岩	暗茶褐色	範片。背面にノミ眼。
94	133	SD03B	磨製石斧	(8.6)	4.9	2.9	—	火成岩	灰褐色	全面風化が著しい。基部を欠く。刃部は両刃である。
94	154	SD03B 覆土上層	蔽石	(9.15)	3.9	1.9	—	砾質砂岩	暗灰褐色	長方形状を呈し、面取り多面。両面と側面の4面を断面として利用。一方の小口は研削面を取り除く。
94	155	SD03下層	蔽石	(11.8)	7.1	4.8	—	砂岩	暗褐色	丸方形に四取りした一部を斜面に切り落とした形状で、側面は面取り整形。A面・B面・上小口を断面として利用。
94	156	SD03下層	蔽石	(17.1)	(7.3)	(6.6)	—	砾質砂岩	淡灰褐色	長方形を呈し、両小口は面取り整形。側面を研削して利用。中央部は斜面により浅く陥る。二次火を受ける。
95	163	SD04	石錐	7.8	5.9	1.4	—	玄武岩	灰白色	不整隅角丸方形を呈した縦平縁を利用。三方に鍔かけの浅い抉りをつける。一部を欠く。
96	168	SD05	石錐	3.45	1.8	0.25	1	樹脂石	黒色	縦反の倒片を利用。縫辺を加した箇所が鋸形である。抉りは深く、一方のかえりを欠いている。

番号	遺物 番号	出土遺構	器種	高 (復元高)	幅 (復元幅)	厚 (復元厚)	重量(g)	石 材	色 調	特 徴
95	171	SD06	磨製 石斧	10.4	7.2	3.4	452	玄武岩	暗灰色	基部を欠く。表面は敲打痕と剥離面が残る。表面は風化している。
95	174	SD07灰土	石器	(2.0)	1.5	0.5	2	サスカイト	灰黑色	未製品。表面は風化している。三角錐で、抉りは浅い。
95	179	SD09下層	石器	2.1	(1.8)	0.5	1	黒曜石	黒色	三角錐で、先端とかえりの一方を欠いている。鋸形の側面溝は底。
97	190	SD11上層	素朴 石斧	(7.15)	4.9	2.2	—	玄武岩	暗灰色	刃部を欠損。表面と背面に敲打痕・灰焼痕を残す。表面は風化している。
97	191	SD11	砾石	(5.6)	(8.1)	3.6	—	透輝石 普通角閃石	淡灰褐色	上小口と下形を欠く。表面面を叩き石として利用。
97	192	SD11	砾石	(6.2)	(8.8)	5.3	—	花崗岩	淡茶灰色	下部を欠く。上小口を切り右として利用。A-B両面に敲打による凹みをもつ。砾石としても利用。
97	197	SD14	石器	2.3	1.6	0.3	—	サスカイト	黒色	未製品。かえりの先端をわずかに欠く。整部は丁寧である。抉りは浅い。
103	245	SD12	素朴 石斧	(10.9)	7.1	2.4	—	玄武岩	暗青灰色	縦半右斧を再利用のため、横道を加工。刃部の内側は丁寧だが、表面・基部に敲打痕がある。
103	246	SD12上	石器	5.3	9.6	0.6	—	砂岩	茶灰色	風化が著しい。半圆形は複数形、刃部・背部共に風化をなす。穿孔は2孔で、2方向からである。
103	247	SD12北上層	石器	2.6	1.65	0.3	1	黒曜石	黒色	三角錐で、抉りは浅い。鋸形の削片を利川。両面に剥離痕を残す。
103	248	SD12大根	石器	3.05	2.0	0.45	2	黒曜石	黒色	未製品。三角錐の2便辺の鋸形途中である。側面の削片を利用。
104	249	Pt86	石器	1.6	1.1	0.3	0.2	黒曜石	黒色	超小型の三角錐。一方のかえりを欠いている。側面の凹部は丁寧である。
104	250	Pt88	石器	2.6	1.6	0.4	1	黒曜石	黒色	横長の三角錐で、抉りは浅い。内方のかえりを欠く。

第5章

有田遺跡第78次調査概報



第78次調査区遠景（東から）



第78次調査区全景（南から）

第4章第78次調査概報 (調査番号8306)

1. 地形と概要

(1) 立地

当該地は福岡市早良区有田2丁目20-2に所在し、発掘面積は411m²である。

有田地区の標高12~14mを測る平坦地は北東・北西側から幾つかの谷が台地内に深く切り込むため約200m四方に限られる。当該地はこの平坦地の西南部分に相当するが、当該地の南側には標高10~11mを測る台地の鞍部が存在するため、緩い傾斜面となっている。当該地の南側傾斜地では從来から試掘調査が実施されているが、現在まで遺構の検出例はない。北側では第6・19・77次調査等を実施し、弥生時代~中世に至る遺構を検出している。特に第77次調査では、弥生時代前期初頭の溝と住居跡や中世末の濠跡を検出しており、当該地ではこれらに關した遺構が検出できるものと予想した。

(2) 概要



Fig.106 第78次調査地点位置図 (縮尺1/400)

旧地目は畑であり、耕作土の下は褐色ローム層である。造構面はこの褐色ローム層上面で認められる。造構は弥生時代前期の貯蔵穴6基と住居跡2軒、古墳時代の土壙2基と住居跡2軒、古墳時代～律令時代の掘立柱建物3棟、平安時代の溝1条、中世土壙墓3基、中世末の濠1条、近世の溝1条を検出した。弥生時代前期の貯蔵穴は3時期に分けられ、土壙SU02が前期初頭に、土壙SU07・08が中頃に、土壙SU05・06・12が後半に比定できる。

土壙SU02は長さ約200cm、幅約140cm、深さ約25cmを測り、隅丸長方形を呈する。周壁は袋状を呈している。第18・56・77・78次調査で検出した縄文時代末期の溝は北西から東西方向に巡っており、この内側に土壙SU02が存在する。土壙SU07・08は隅丸方形、または不整形を呈し、壁は袋状を呈する。造物には石庖丁、磨製石斧等が出土した。土壙SU05は平面形が円形を呈し、断面がフラスコ状を呈した袋状の貯蔵穴よりも後出するもので、前期末～中期初頭の時期であろう。円形住居跡SC02・03に伴うものと考えられる。貯蔵穴内からの遺物はドングリ等の果実や石庖丁、敲石等が出土した。住居跡SC02・03は切り合っており、建て替えが行われたものと考えられる。柱穴は5～6本を主柱としている。中世の濠に切られ、全体形をとどめていないが、住居跡SC02の直径は約5.5cmを測る。住居跡の中央には長さ70cm、幅50cm、深さ14cmを測る炉跡が存在する。炉跡の両小口部分の位置には、径20～25cmの円形Pitが各1個存在する。このPitは松菊里系住居跡にみられる棟持柱と考えられる。遺物は敲石・砥石・石斧等が出土した。住居跡SC02は火災に遭った模様で、床には炭化物、焼土が堆積していた。

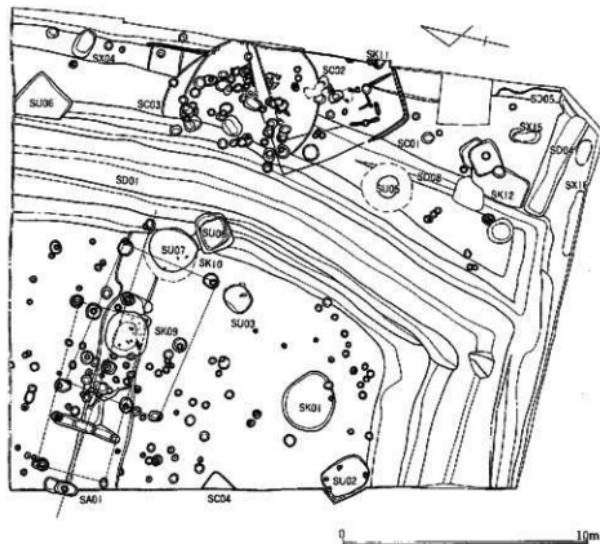


Fig. 107 第78次調査造構配置図 (縮尺1/200)

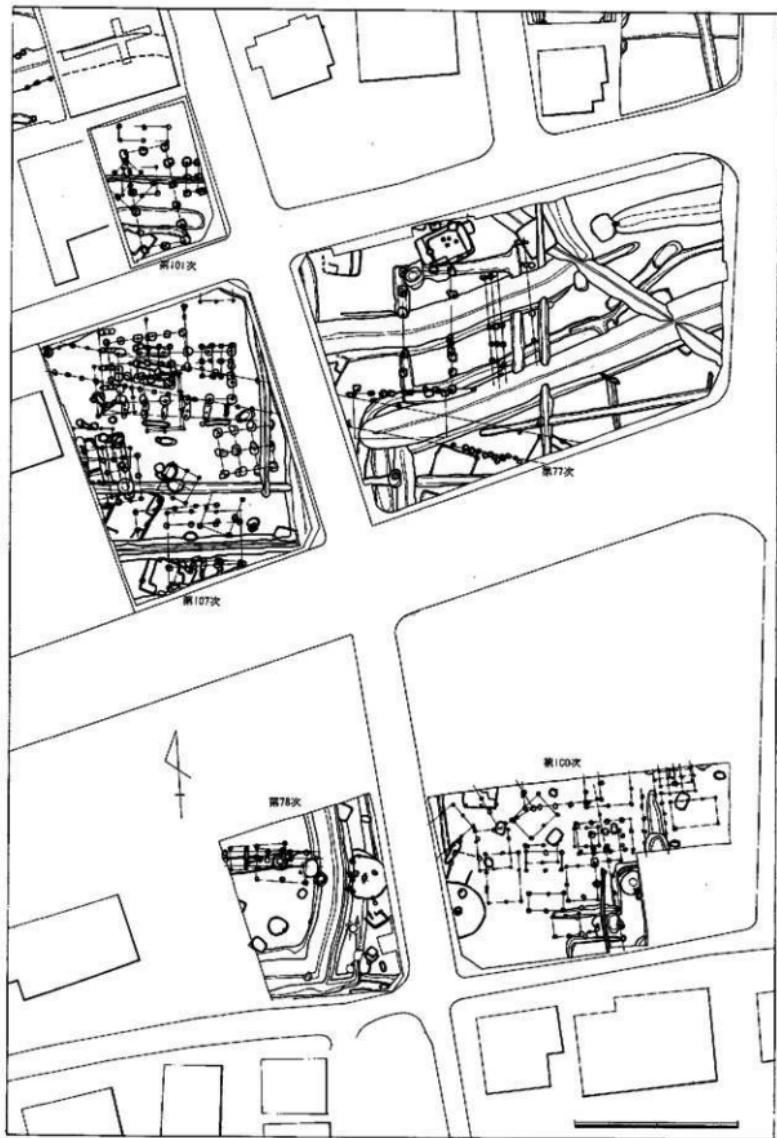


Fig. 108 第77・78・100・101・107次調査構造配置図 (縮尺1/600)

古墳時代の住居跡SC01は、削平のため全体形は不明であるが、周溝の遺存状況により、2棟の住居跡の建て替えが考えられる。SC01Aの住居跡は、両袖にL字形のベッドを有した長方形プランを呈すると考えられる。南壁の中央部に接して、出入口の土壙と考えられる1辺50cmを測る長方形のPitが存在する。このPit内からは小型丸底塗が2個出土している。時期は4世紀後半代が考えられる。

SK01・09・は不整円形を呈し、径は180~210cmを測る。断面は浅いレンズ状を呈しており、SK09から陶質土器が出土している。同例の土壙は第77次調査で2基検出しているが、同様に陶質土器が出土している。共伴した土師器から5世紀中頃と考えられる。

平安時代の溝SD02は東西方向の溝で、溝SD01に切られている。溝SD02は削平を受けているが、幅2m、深さ8mを測り、断面形はレンズ状を呈している。この溝はほぼ条里の方向に合致している。柵SA01は溝SD02と主軸方位を同一方向にもち、柵は溝よりもやや北方向へ振っているものの、重複した状態で検出した。柵は主柱と副柱2本で構成される。確認できた長さは11.4mである。各柱間は260~310cmを測る。柱穴径は50~70cm、柱根径は20cmを測る。溝との先後関係は不明である。

土壙墓SX15・16の覆土は暗茶褐色土である。長さ100~120cm、幅60~70cmを測り、隅丸長方形を呈している。土壙墓SX15・16より土師器の环が出土している。第77次調査にて同様な土壙墓を5基検出しており、この一帯が12~15世紀に墓地であったことが推測される。

中世末の濠SD01は幅5m、深さ190~200cmを測る。第77次調査で検出した溝SD09は東西方向の溝で、当該調査の溝SD01に接続する。南北方向から東西方向へ炬形に曲がっている。南北方向から東西方向へのコーナー部分の底部には幅1m、底からの高さ35cmを測る陸橋が存在する。この濠は第32・53・77次調査で検出した濠と同時期である。各濠はL字形あるいはコの字形を呈し、それぞれが組み合って城郭の一部を形成するものと考えられる。年代は16世紀代である。

有田・小田部

第24集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集

1996年（平成8年）3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
電話（092）711-4666

印 刷 仙松古堂印刷
福岡市西区周船寺1丁目7-52
電話（092）806-1661

